

日本韓国研究

第2号

〈研究論文〉

禁止を表す‘말다’と先行用言の活用に関する考察
— ‘-ㄹ/하-’ 用言を中心に—

飯田 華子

朝鮮語の思考動詞「여기다」に関する通時的考察

仲島 淳子

〈研究ノート〉

코로나 19 상황과 한국 유학에 관한 고찰
— 일본 N 대학교의 사례를 중심으로—

崔 銀景

〈寄稿論文〉

社会的価値を脅かす攻撃的発言に対する反応
— 日韓中学生調査を中心に—

河 正一・森岡 千廣

〈実践報告〉

「日韓研究」授業の実践報告
— 日韓比較文化教育の可能性と課題—

尹 孝貞

〈書評〉

朴 天弘著『現代日本語の「ハズダ」の研究』

李 英蘭

白 凜著『在日朝鮮人美術史1945-1962—美術家たちの表現活動の記録—』 山口 祐香

2022年9月

日本韓国研究

第 2 号

2022 年 9 月 30 日

日本韓国研究会

目次

〈研究論文〉

禁止を表す ‘말다’ と先行用言の活用に関する考察
— ‘-ㄹ/하-’ 用言を中心に— 飯田 華子 3

朝鮮語の思考動詞「여기다」に関する通時的考察 仲島 淳子 23

〈研究ノート〉

코로나 19 상황과 한국 유학에 관한 고찰
— 일본 N 대학교의 사례를 중심으로— 崔 銀景 49

〈寄稿論文〉

社会的価値を脅かす攻撃的発言に対する反応
— 日韓中学生調査を中心に— 河 正一・森岡 千廣 63

〈実践報告〉

「日韓研究」授業の実践報告
— 日韓比較文化教育の可能性と課題— 尹 孝貞 82

〈書評〉

朴 天弘著『現代日本語の「ハズダ」の研究』 李 英蘭 93

白 凜著『在日朝鮮人美術史 1945-1962—美術家たちの表現活動の記録—』
山口 祐香 96

禁止を表す ‘말다’ と先行用言の活用に関する考察

— ‘-ㅎ/하-’ 用言を中心に—

飯田 華子（関西大学大学院博士後期課程）

<要旨>

本研究は、禁止を表す補助動詞 ‘말다’ に ‘-ㅎ/하-’ 用言が先行する文において、‘말다’ の前における ‘ㅎ디/하지’ の省略に焦点を置き、‘ㅎ디/하지’ の省略の有無と用言の特徴との関係を通時的に考察した研究である。例えば現代語では、‘이제 걱정 마세요. (もう心配しないでください。)’ というような文において、‘하지’ が ‘말다’ の前で省略されている。これまで禁止を表す補助動詞 ‘말다’ に関する研究の中では、先行形態に関する研究も存在し、‘-하-’ 用言において ‘하지’ の省略が可能であることは言及されてきた。しかし、具体的な省略の条件については明らかにされていない。本研究ではこのような ‘ㅎ디/하지’ の省略が、‘말다’ の前においてどのような条件で起こっているのか、その省略の条件と先行用言との関係を具体的に明らかにしようとするものである。先行用言の考察は、以下の二つの観点から考察を行う。(1) ‘-ㅎ/하-’ 用言に先行する語彙の音節数の観点から、(2) ‘-ㅎ/하-’ 用言の持つアスペクト的特徴の観点から。研究対象は 15 世紀から 19 世紀までの文献と現代語コーパスを対象とする。

キーワード 禁止表現、말다と하다用言、補助的連結語尾、先行用言

1. はじめに

本研究は、禁止を表す補助動詞 ‘말다’ に ‘-ㅎ/하-’ 用言が先行する文において、‘말다’ の前における ‘ㅎ디/하지’ の省略に焦点を置き、‘ㅎ디/하지’ の省略の有無と用言の特徴との関係を通時的に考察した研究である。具体的に

¹ 禁止を表す ‘말다’ に先行する補助的連結語尾は、口蓋音化の表記への現れから ‘-디>-지’ のような変化を見せている。

は、以下のように課題を設定する。

- I 補助動詞 ‘말다’ にどのような ‘-ㄹ/하-’ 用言が先行しているのか。
- II 補助動詞 ‘말다’ の前で ‘-ㄹ/하-’ 用言はどのように活用・省略しているのか。
- III 先行用言と ‘-ㄹ/하-’ 用言の活用・省略はどのような関係を見せているのか。

まず、補助動詞 ‘말다’ に先行する ‘-ㄹ/하-’ 用言としてどのようなものが出現しているのか、(1) 語彙の音節数の観点からの考察と(2)用言の持つアスペクト的特徴の観点からの考察を通して、それらの用言を具体的に明らかにする。そして、補助動詞 ‘말다’ の前における ‘-ㄹ/하-’ 用言の活用様相を、補助的連結語尾と ‘ㄹ다/하지’ の省略を基準に考察する。そして、先行する ‘-ㄹ/하-’ 用言の特徴と ‘-ㄹ/하-’ 用言の活用の関係性を、(1) 語彙の音節数の観点から、(2)用言の持つアスペクト的特徴の観点から、具体的に明らかにする。

2. 先行研究

2.1 補助動詞 ‘말다’ について

補助動詞 ‘말다’ は、結合する連結語尾などによって多様な意味を表すことができ、このことからその語自体の意味の多様性がうかがえる。補助動詞として使用される ‘말다’ の持つ意味として、国立国語院の標準国語大辞典では以下のように記載している。

表1 『標準国語大辞典』による補助動詞 ‘말다’ の意味

①	(동사 뒤에서 ‘-지 말다’ 구성으로 쓰여) 앞말이 뜻하는 행동을 하지 못하게 함을 나타내는 말. 筆者訳：(動詞の後で ‘-지 말다’ の構成で使われ)前の語が意味する行動をできないようにすることを表す語。
②	(동사 뒤에서 ‘-고(야) 말다’ 구성으로 쓰여) 앞말이 뜻하는 행동이 끝내 실현됨을 나타내는 말. 일을 이루어 낸 데 대하여 긍정적인 생각 또는 부정적이고 아쉬운 느낌이 있음을 나타낸다. 筆者訳：(動詞の後で ‘-고(야) 말다’ の構成で使われ)前の語が意味する行動がついには実現されることを表す語。物事を成し遂げるのに対し肯定的な考えまたは否定的な残念な気持ちがあることを表す。

表1に見られる補助動詞 ‘말다’ の二つの意味を例文で示すと以下のようである。

- (1) a. 이곳에서 수영하지 마세요.
ここで水泳しないでください。
b. 새로운 기계 발명에 성공하고야 말겠다.
新しい機械の発明に成功してやろう。

(『標準國語大辭典』)

本研究はこのような大きく二つに分けた意味のうち、表1の①で示した意味を持つ ‘말다’ を考察対象とする。例文(1)において、(1) a の文のみを対象とし、(1) b のような文は本研究の対象としないものとする。

このような補助動詞 ‘말다’ に関して、朝鮮語文法では否定表現の中で扱ったり命令表現の中で扱ったりと、確立した一つの文法範疇ではなく、他の文法範疇の補充法として位置付けられることが多い。

이관규(2017)、고영근(2019)などは、否定表現の中で、以下の表のように否定表現を ‘안’ 否定文、‘못’ 否定文、‘말’ 否定文の3つに分け、その中の一種類として扱っている。このような先行研究のほとんどは、否定文の中で命令文や勧誘文での否定は ‘말다’ を使って表すとし、活用形態として叙述語の語幹に ‘-지’ を付けてその後に ‘말다’ が結合すること、平叙文や疑問文では使われないことを明らかにしている。否定表現に関しては、これまでも多くの研究者が着目し、通時的な研究もみられる。しかしながら、否定表現の研究の中で、‘안’ 否定文と ‘못’ 否定文の比較研究はこれまで活発に行われてきた反面、‘말’ 否定文に着目した研究は多くない。

최현배(1955)、장경희(2005)などは、命令表現または行為指示表現の中で禁止を表す ‘말다’ を扱っている。このように命令文を命令と禁止の意味を表す文であるとし、またこのような先行研究では、ほかの否定補助動詞は命令形にすることが不可能であるため ‘말다’ を使うということ、命令文の中に属すからこそ ‘말다’ の語尾は命令形であることを明らかにしている。

一方、本研究で考察の対象とする言語行為としての「禁止」とは、相手に対する行為要求の機能を持ち、依頼、勧め、指示、許可などと同じように、相手の行為の発動に関わるものである。そのため、話し手の意思が非常に強く表れる表現である。김영란(1998)、이은희(2012)は、禁止表現を対象とした研究である。これらは禁止表現を否定表現や命令表現とは切り離し、一つの文法範疇として確立させようとしたものであり、‘말다’ を使った禁止表現以外にも禁止の意味をもつ多様な形態を挙げて研究を行った。

このように、様々な文法範疇の中の一つとして、何かの補充法として主に扱

われ、補助動詞 ‘말다’ のみに焦点を当てた研究はこれまで活発的に行われてこなかったのが実際である。

2.2 ‘-ᄃ/하-’ 用言について

‘하다’ 用言は、形容詞である場合、‘-하-’ が派生接尾辞であるというのが一般的である²が、動詞である場合の ‘하다’ に関しては様々な論議がされてきた。動詞 ‘하다’ 自体に関しては、최현배(1961)³、‘-하다’ 動詞に関しては、심재기(1982)⁴など、体言が先行する ‘하다’ 動詞がどの機能に相当するののかというのが、これまでの研究者の注目を集めてきた。このような研究の中で注目されてきた一つとして、先行する語彙と ‘ᄃ다/하다’ との「分離性」を挙げることができる。このような中、本考察では、先行する語彙と ‘ᄃ다/하다’ との間に完全な「分離性」を見るのが難しいと考え、このような動詞における ‘-ᄃ/하-’ を動詞化接尾辞として扱う主張に従うこととする。つまり、남기심, 고영근(2019)や이관규(2007)における派生語の中に属するという主張のもとに考察を進めていく。これらは、「派生語」に ‘-ᄃ/하-’ 動詞が属し、単独の動詞 ‘ᄃ다/하다’ と捉えるのではなく、接尾辞 ‘-ᄃ/하-’ として考えるという考え方である。

また、‘-하-’ に先行する体言に関しては、‘-하-’ の文法的機能の観点、先行する語彙の観点、それによる ‘하다’ の意味の変化の観点から様々な研究が進められてきた。이서란(1998)は、‘漢字語+하다’ は韓国語の複合動詞の大多数を占めていること、そしてこの動詞を構成する漢字語語基はいくつかの例外を除いてすべて「動作性」を表すことを明らかにした。김창섭(1997)は、非叙述性名詞と本動詞 ‘하-’ もしくは接尾辞 ‘-하-’ が創造的言語使用の脈絡で、状況的もしくは比喩的な意味が加わって使われるとき、新しい意味が動詞 ‘하-’ 側に付与される場合もあれば、名詞側に付与される場合もあることを明らかにしている。

本研究ではこれまでの研究を踏まえ、禁止を表す補助動詞 ‘말다’ に先行する場合の ‘-ᄃ/하-’ 用言に着目し、その通時的変遷の様子を明らかにしていく。

² 이관규(1999) 『学校文法論』の単語の形成体系に従う。

³ 최현배(1961)は、‘하다’ の文法的機能を、動詞・派生接尾辞・補助動詞に分けて説明している。

⁴ ‘-하다’ 가 동사화소, 즉 일종의 파생접미사로서 서술 기능 대행, 서술 기능 완결의 기능을 수행하면서 의미상으로는 선행어근의 투영 의미를 완전 표출한다. (筆者訳：‘-하다’ が動詞化素、つまり派生接尾辞として叙述機能代行、叙述機能完結の機能を遂行し、意味上では先行語根の投影意味を完全表出する。) 심재기(1982)引用

2.3 先行研究の検討

これまで、補助動詞 ‘말다’ に関する研究の中で、先行する ‘-ᄃ/하-’ 用言に関する考察を行った研究として、이세영 (2002) と 박지연 (2010) を挙げることができる。

이세영 (2002) は、‘말다’ の統辞的環境や意味特性を明らかにし、‘말다’ 構成の文法化の現象を明らかにすることを目的とした研究である。‘말다’ の多様な意味は、その語自体で決まるものではなく、先行語尾が結合した構成体を一つの意味単位としてみるべきとし、その文法化の段階を四つに設定した。一段階は「中断」の意味を持つ ‘-다(가) 말-’、二段階は「義務」のモダリティを表す ‘-지 말-’、三段階は「認識」のモダリティを表す ‘-다(가) 말-’、四段階は反復等その他固定形態である。이세영 (2002) は、‘-지 말-’ の先行形態として、‘하지’ が省略されて体言や副詞の後に表れることについて言及しており、先行用言の[動作性]が ‘하지’ の省略の条件であることを明らかにしている。しかし、これは現代語のみを対象とした研究であり、通時的な考察は行っていない。

박지연 (2010) は、‘말다’ の文法範疇とその変化の過程を通時的に明らかにし、現代の ‘말다’ の共時的な文法体系に新しい観点を提示すると共に、禁止を表す ‘말다’ に関して以下の四点を明らかにした。一つ目は、禁止を表す ‘말다’ の文法化は近代から起こったこと。二つ目は、「名詞句+ ‘말다’」の文では、助詞が結合せず、語尾の活用は、禁止対象行為が[-行為性]の場合は ‘말고’、[+行為性]の場合は ‘-라, -자, -으면, -고’ が結合すること。三つ目は、‘-지 말-’ の構成において、‘-지’ に結合する ‘-를, -는, -도, -만’ の要素は 18 世紀以降に出現したこと。また、終結語尾に「命令、希望、当為」の意味が来るという制約ができること。四つ目は、‘말다’ は他動詞、もしくは主語が非行為主である自動詞に使われること。以上の四つを明らかにした。ここでは、「名詞句+ ‘말다’」の文における名詞句の[±行為性]の性質による文の統辞的特徴の変化を明らかにしている。しかし、名詞句の種類と ‘하지’ の省略の関係については具体的に言及していない。

3. 研究方法

15 世紀から 19 世紀においては、文献から直接データを収集した。収集に引用した文献は文章体を表 2 に、会話体を表 3 にまとめて示す。

表 2 引用文献 (文章体)

時代	世紀	文献名	略称	刊行年度
中世	15 世紀	法華經諺解	法華	1463
		内訓	内訓	1475
		三綱行實圖	三綱	1481
	16 世紀	續三綱行實圖	續三綱	1514
		二倫行實圖	二倫	1518
		小學諺解	小學	1588
近代	17 世紀	論語諺解	論語	1590
		家禮諺解	家禮	1632
	18 世紀	女訓諺解	女訓	1658
		御製内訓	御内	1736
		女四書諺解	女四書	1737
	19 世紀	五倫行實圖	五倫	1797
三聖訓經		三聖	1880	
聖經直解	聖經	1895		

表 3 引用文献 (会話体)

時代	世紀	文献名	略称	刊行年度
中世	15 世紀	-	-	-
	16 世紀	翻譯老乞大	翻老	1517 以前
		翻譯朴通事	翻朴	1517
近代	17 世紀	老乞大諺解	老解	1670
		朴通事諺解	朴解	1677
	18 世紀	朴通事新釋諺解	朴新解	1765
		隣語大方	隣語	1790

本研究が禁止表現を考察対象とすることから、文章体の引用文献では出現頻度の高いと思われる教育書や宗教書を中心とする。この中で抽出された用例は、15 世紀 44 用例、16 世紀 64 用例、17 世紀 107 用例、18 世紀 80 用例、19 世紀 114 用例であり、これらを本考察の対象とする。

20 世紀以降の現代朝鮮語においては、国立国語院で作られた「21 세기 세종계획 말뭉치 (21 世紀世宗計画コーパス)」のうち現代語書き言葉平文コーパス(36, 879, 143 語節)と現代語話し言葉平文コーパス(805, 646 語節)、そして延世大学言語情報研究院で作られた「연세 20 세기 한국어 말뭉치(延世 20 世紀韓国語コーパス)」(150, 378, 870 語節)を使用して用例を抽出した。その中で抽出された計 2, 832 用例を本考察の対象とする。

4. 先行用言⁵の出現様相

ここでは、補助動詞 ‘말다’ に先行する ‘-ᄃ/하-’ 用言としてどのようなものが出現しているのか、語彙の音節数の観点からの考察と用言の持つアスペクト的特徴の観点からの考察を通して、それらの用言を具体的に考察していく。

4.1 先行する語彙の音節数による分類

まず、補助動詞 ‘말다’ に先行する ‘-ᄃ/하-’ 用言を、‘-ᄃ/하-’ に先行する語彙の音節数別に分類する。一音節、二音節、二音節以上に分けてその出現様相を整理すると以下のようである。

表 4 ‘-ᄃ/하-’ 用言に先行する語彙の音節数別出現様相

時代	15c	16c	17c	18c	19c	20c	21c
一音節	25	33	47	29	29	409	265
二音節	18	31	60	51	83	856	1192
二音節以上	1	-	-	-	2	37	80

それぞれ音節別に ‘-ᄃ/하-’ 用言が出現する例文を 15 世紀から 19 世紀、現代語に分けて提示する。

- (2) a. ᄃ토매 이기요물 꼴티 말며
 狼母求勝ᄃ며(内訓 1:8a)
 争いに勝ちを求めず
- b. 나그내네 히믈⁶ 마오
 客人們休怪(翻老上 41a)
 客人を怪しまず

上の例文(2)は、15 世紀から 19 世紀に見られた文である。例文(2)a は一音節の語に ‘-ᄃ-’ がついたものであり、例文(2)b は二音節の語に ‘-ᄃ-’ がついたものである。

⁵ 15 世紀から 19 世紀までの出現した用言の詳細は付録 1 を参照。

⁶ 先行名詞として現れる ‘히믈’ に関しては、語源的にみると ‘힘+을(目的格助詞)’ のように解釈できるが、15 世紀にはすでに名詞として扱われていた文が確認されたことから、本稿でも名詞として扱うこととする。

- (3) a. 아무 증거도 없이 함부로 그런 말하지 마시오. (『오성과 한음』)
何の証拠もなく勝手にそんなことを言うな。
- b. 그렇게 한심스럽게 생각하지 말자. (『내 영혼의 상처를 찾아서』)
そんな情けない考えをしないでおこう。
- c. 작은 일이나 큰 일이나 거짓말하지 말고. (『나라사랑의 길』)
小さいことにも大きいことにも嘘をつかず。
- (21世紀世宗計画コーパス)

次に上の例文(3)は、現代語に見られた文である。例文(3)aは一音節の語に‘-하-’が結合したものであり、例文(3)bは二音節の語に‘-하-’がついたもの、そして例文(3)cは二音節以上の語に‘-하-’がついたものである。

4.2 アスペクト的特徴による分類

用言の分類の基準の一つとして、語彙的アスペクトの理論をもとにした分類が挙げられる。アスペクト(動作相、aspect)とは、進行や完了など、述語が表す事象の完成度や時間軸における分布の様子などの差異化をもたらす文法形式である。これは、文法的手段として表現される文法範疇としてのアスペクトであるが、動詞や形容詞が持つ語彙の意味自体にもアスペクト的意味が存在する。これらを区別するために、文法範疇としてのアスペクトを「文法的アスペクト(grammatical aspect)」、語彙的意味によるアスペクトを「語彙的アスペクト(lexical aspect)」と言う。語彙的アスペクトに関しては、Vendler(1967)が「states」、「activities」、「accomplishments」、「achievements」の四つの分類を提示し、これは現在までも参考にされている分類であると言える。朝鮮語においてアスペクトの観点からの用言の分類を提示した研究には、油谷(1978)、浜之上(1991)、고영근(2007)、박덕유(2007)等がある。

本考察ではその中でも、朝鮮語の特徴をその分類に活かし客観的な分類が可能であると考えられる、浜之上(1991)による分類⁷に従い、動詞を「状態動詞」と「動作動詞」、動作動詞をさらに「状態性動作動詞」と「動作性動作動詞」に分類する。

⁷ 図1 浜之上(1991)による動詞の分類

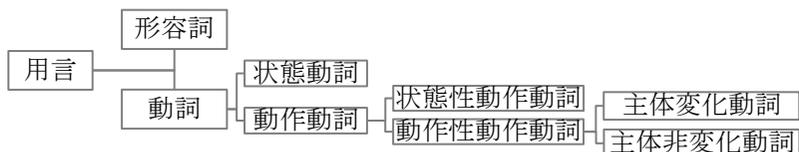


表 5 ‘-ᄃᆞ/하-’ 用言に先行する語彙の音節数別出現様相

		‘-고 있-’ の結合	‘-고 있-’ 動作の具体性
形容詞		—	—
動詞	状態動詞	×	—
	動作動詞	○	具体的でない
	動作性動作動詞		
動作動詞	動作性動作動詞	○	具体的

浜之上(1991)は状態動詞と動作動詞の分類の基準として、‘-고 있-’の結合が可能であるかどうかを採用し、状態性動作動詞と動作性動作動詞の分類の基準として、‘-고 있-’の結合した形態が具体的な動作を表しているかどうかを採用しており、本考察でもこの基準に従って動詞を三つに分類している。このような分類によるそれぞれの動詞の特徴を整理すると上のようになる。

表 6 ‘-ᄃᆞ/하-’ 用言に先行する語彙の aspekto 的特徴別出現様相

時代	15c	16c	17c	18c	19c	20c	21c
形容詞	2	2	8	5	11	6	9
状態動詞	0	8	14	18	7	45	13
状態性動作動詞	24	39	42	40	53	705	803
動作性動作動詞	18	15	43	16	43	541	710

- (4) a. 어머니 섬길 사르문 우회 사라도 풀만티 말며
 事親者に居上不驕ᄃᆞ며(内訓一 46a)
 親に仕える人は目上の人もおごり高ぶらず
- b. 子 | 곶ᄃᆞ샤ᄃᆞ 速고 차ᄃᆞ 말며 小利를 보디 마를띠니
 子 | 曰無欲速ᄃᆞ며無見小利니(論語 3:44a)
 子が曰く速く欲張らず薄利を見ず
- c. 이는 어렵다 아니ᄃᆞ니 네 녀ᄃᆞ 말라
 這箇不難你不要慮(朴新解 1:46a)
 これは難しくないので君は心配するな
- d. 도타 도타 네 게얼리 말고 거리에 游蕩ᄃᆞ 말고
 好好你休撒懶街上閑游蕩(朴解上 45b)
 よしよし君は怠慢にせず街でぶらぶら遊ばず

次に上の例文(4)は、15世紀から19世紀に見られた文である。例文(4)aは‘말다’に形容詞である‘-ᄃᆞ-’用言、例文(4)bは状態動詞である‘-ᄃᆞ-’用言、例文(4)cは状態性動作動詞である‘-ᄃᆞ-’用言、例文(4)dは動作性動作動詞である‘-ᄃᆞ-’用言が先行したものである。

- (5) a. 거짓말 마. (『뜻으로 읽는 한국어사전』)
嘘をつくな。
- b. 미일(未日)에는 결혼하지 말라. (『민 의와 무 의』)
未日には結婚するな。
- c. 내일은 내가 알아서 할 테니
너무 걱정하지 마. (『가야 할 나라』)
明日は私が上手くするからあまり心配するな。
- d. 남의 말하듯 말하지 마세요. (『이상한 사람들』)
他人のことを言うように話さないでください。
- (21 世紀世宗計画コーパス)

次に上の例文(5)は、現代語に見られた文である。例文(5)aは‘말다’に形容詞である‘-하-’用言、例文(5)bは状態動詞である‘-하-’用言、例文(5)cは状態性動作動詞である‘-하-’用言、例文(5)dは動作性動作動詞である‘-하-’用言が先行したものである。

5. 先行用言の活用形態

ここでは、補助動詞‘말다’に先行する用言の活用様相を、補助的連結語尾と‘히디/하지’省略を基準に考察していく。

- (6) a. 이제 걱정하지 마세요.
もう心配しないでください。
- b. 이제 걱정 마세요.
もう心配しないでください。

(筆者による例文)

上のような例文において下線部で示した箇所が‘말다’とそれに先行する用言との結合部分である。例文(6) a では補助的連結語尾‘-지’が使われており、例文(6) b では‘하지’が省略されて名詞の後にすぐ‘말다’が後行している。

변정민(1995)、서정수(1996)、고영근(1997)、이세영(2002)、이지영(2008)、박지연(2009)、等の‘말다’についての研究では先行形態を以下のように説明している。

表7 ‘말다’ の先行形態に関する主な見解

主張する研究者	先行語彙に関する見解
서정수(1996)	【現代朝鮮語】 動詞+ ‘-지’、名詞（‘말다’ に連結語尾が続く場合のみ）、‘-는/도’（強調の意味）、副詞のあとの ‘하지’ と ‘주지’ の省略、形容詞+ ‘-지’
이세영(2002)	【現代朝鮮語】 ほとんどが用言。体言や副詞にも表れる。
박지연(2009)	【現代朝鮮語】 ‘-지’ は必須的副詞語として機能する。
이지영(2008)	【中世朝鮮語】 ‘-디’、形容詞や副詞(動詞 ‘ㅎ디’ の省略)、
고영근(2020)	【中世朝鮮語】 用言+ ‘-지’、‘-게’、‘-어’

このような先行研究から、‘말다’ の先行形態には補助的連結語尾が現れるのが基本であり、その他の形態として ‘ㅎ디/하지’ の省略を認めている研究もある。

‘말다’ の先行形態を、補助的連結語尾と名詞に分類し、時代ごとのそれぞれの出現状況を整理すると以下の表のとおりである。

表8 ‘말다’ の先行形態の出現状況

	15c	16c	17c	18c	19c	20c	21c
補助的連結語尾	31	52	73	64	116	672	1107
名詞	20	23	36	18	6	625	427

- (7) a. 일로브터 朝夕 사이에 哀호미 니르러도 哭디 말라
 自是로朝夕之間애哀至不哭호라(家禮 9:10a)
 自然と朝夕の間に哀れな気になっても泣くな
- b. 반역흔 집 子식을 춌티 말며
 逆家子를不取호며(御内一 70a)
 反逆な家の息子を(婿に)取らず
- c. 내 네 아비 곤호니 勿외 分별 말라
 我如汝父호니勿復憂慮호라(法華 2:211b)
 私は君の父のようなのでまた憂慮するな

次に上の例文(7)は、15世紀から19世紀に見られた文である。例文(7)aと(7)bは‘말다’に補助的連結語尾が先行したものであり、例文(7)cは‘말다’

に名詞が先行したものである。

(8) a. 그 오랜 고난에 대하여

우리는 말하지 말하지 말자. (『운명과 형식』)

その長い苦難について私たちは話さないでおこう。

b. 그런 걱정 마시고 빨리 갑시다. (『한평 구휼의 안식』)

そんな心配せず早く行きましょう。

(21世紀世宗計画コーパス)

次に上の例文(8)は、現代語に見られた文である。例文(8)aは‘말다’に補助的連結語尾が先行したものであり、例文(8)bは名詞が先行したものである。

このような二つの形態に分けて考察すると、同じ用言でも補助的連結語尾を使用して現れていたり名詞のみで現れていたりするものも存在する。このようなことから、「名詞+‘말다’」は、‘말다’の前において‘ㅎ디/하지’が省略されていることがわかる。

6. 二つの関係

前章で提示した通り、‘말다’の先行形態には、補助的連結語尾が使用される場合と名詞が先行する場合がある。つまり、‘ㅎ디/하다’用言において、補助的連結語尾が使用される場合は‘ㅎ디/하지’が省略されず、名詞が先行する場合は‘ㅎ디/하지’が省略されているものである。このような‘ㅎ디/하지’の省略の有無が、先行語彙とどのような関係があるのかを考察していく。

6.1 先行する語彙の音節数との関係

まず、‘ㅎ디/하지’の省略と先行語彙の音節数にはどのような関係があるのかを考察していく。

表9 ‘ㅎ디/하지’が省略されない場合の先行語彙の音節数別出現様相

時代	15c	16c	17c	18c	19c	20c	21c
一音節	21	31	45	26	27	230	203
二音節	3	9	28	33	80	844	840
二音節以上	0	0	0	0	0	20	65

表 10 ‘ㅎ디/하지’が省略される場合の先行語彙の音節数別出現様相

時代	15c	16c	17c	18c	19c	20c	21c
一音節	3	1	2	2	1	177	62
二音節	15	21	32	15	3	431	350
二音節以上	1	0	0	0	2	17	15

まず、このような表において、‘ㅎ디/하지’が省略されない場合と省略された場合を比較してみると、15世紀から19世紀でこれらに特徴が見られた。それは、‘-ㅎ-’に先行する語彙の音節が一音節の場合、‘ㅎ디/하지’が省略される可能性が低く、‘-ㅎ-’に先行する語彙の音節が二音節以上の場合、‘ㅎ디/하지’が省略される可能性が高いということである。具体的に例文を挙げて考察していく。

- (9) a. 논호매 하기를 구티⁸ 말며
 分母求多ㅎ며(御内一 6b)
 分けることに多いほうを求めず
- b. 그 가프물 칙망티 마를씨니
 不責其報 | 니(御内三 34a)
 この報いを責めず

- (10) a. 노릇득원 안식 말며
 不戲色ㅎ며(内訓一 9a)
 ふざけた顔色をせず
- b. 네 스스로 자탕 말라
 你不要自誇(朴新解 3:31b)
 自ら自分を誉めるな

例文(9)と(10)はそれぞれ15世紀から19世紀において、‘말다’の前で‘ㅎ디’が省略されていない文と、省略された文である。例文(9)を見ると、‘-ㅎ-’に先行する語彙の音節は、例文(9) a では一音節の語、例文(9) b では二音節の語が現れている。このように‘ㅎ디’が省略されない場合は先行語彙の音節数が統一されていない。しかし、例文(10)を見ると、‘-ㅎ-’に先行する語彙の音節が二音節である。このように‘ㅎ디’が省略されたものをみると、そのほ

⁸ 例文(9)に見られる‘티’という表記は、補助的連結語尾である‘디’に先行する用言の語幹に現れる‘ㅎ’が結合し、激音化したものが現れた表記である。そのためこのような文では‘ㅎ디’が省略されていないものとする。

とんどにおいて先行語彙が二音節以上で現れており、一音節の語は‘말하다’の回数のみであった。よって、‘-하-’に先行する語彙の音節数が一音節の場合、‘하다’は省略されにくいということが言える。

- (11) a. 사람 무시하지 마. (『토지 16』)
 人を無視するな。
 b. 돈을 위해서 일하지 마세요. (『여성중앙 21』)
 お金のために仕事をしないでください。
 (21世紀世宗計画コーパス)

- (12) a. 곧 나갈 테니 아무 걱정 말라. (『풀종다리의 노래』)
 すぐ出るので何も心配するな。
 b. 옆에서 잘 지켜 줄 테니까 아무 염려 마세요. (『목사의 바다』)
 横できちんと守ってあげるから何も憂慮しないでください。
 c. 속 모르는 말 말게. (『토지 2』)
 本心のおわからないことは言うでない。
 (21世紀世宗計画コーパス)

上の例文(11)は、現代語において‘말다’の前において‘하지’が省略されなかった文であり、例文(12)は、‘말다’の前において‘하지’が省略された文である。現代語においても、‘하지’が省略された語彙の‘-하-’に先行する語の音節数を見てみると、‘말하다’を除いてすべてが二音節以上の語彙であった。

6.2 アスペクト的特徴との関係

つぎに、先行用言の省略と先行語彙のアスペクト的特徴にはどのような関係があるのかを考察していく。

表 11 ‘하다/하지’が省略されない場合の
 先行語彙のアスペクト的特徴別出現様相

時代	15c	16c	17c	18c	19c	20c	21c
形容詞	2	2	3	5	10	6	9
状態動詞	0	7	13	18	7	8	9
状態性動作動詞	14	19	22	25	52	322	533
動作性動作動詞	8	12	30	11	38	336	557

表 12 ‘ㅎ디/하지’ が省略される場合の
先行語彙の aspekto 的特徴別出現様相

時代	15c	16c	17c	18c	19c	20c	21c
形容詞	0	0	1	0	0	0	0
状態動詞	0	0	1	0	0	1	3
状態性動作動詞	9	19	20	13	1	384	271
動作性動作動詞	10	3	13	4	5	240	153

まず、このような表において、‘ㅎ디/하지’ が省略されない場合と省略された場合を比較してみると、形容詞や状態動詞など、用言に[動作性]がないものは、‘말다’ の前において ‘ㅎ디/하지’ が省略されることが少ないということがわかる。

- (13) a. 뉘마다 평 니븐 사르미 잇거든 출티 말며
世有刑人이어든不取ㅎ며(内訓一 86b)
先代に罪人がいれば(婿に)取らず
- b. 子 | 골오사디 位 업스믈 患티 말오
子 | 曰不患無位오(論語 1:35a)
子が曰く位が無いことを病まず
- c. 일은 선인과 악인을 의론치 말고 (聖經七 56a)
事は善人と悪人を議論せず
- (14) a. 이기디 못호믈 분뽕 말라 말라 ㅎ더라
不患其不能伸이라ㅎ더라(内訓三 34a)
伸びないことを心配するなど言った
- b. 너히 히믈 말오
你休怪(翻老上 59a)
なんじ怪しまず
- c. 이는 어렵다 아니ㅎ니 네 넘너 말라
這箇不難你不要慮(朴新解 1:46a)
これは難しくないのだから君は憂慮するな

上の例文(13)は、15世紀から19世紀において、‘말다’ の前で ‘ㅎ디’ が省略されなかった文であり、例文(14)は、‘말다’ の前で ‘ㅎ디’ が省略された文である。このような文における ‘-ㅎ-’ に先行する語彙を比べてみると、‘ㅎ디’ が省略された文では、‘-ㅎ-’ が無くてもそれぞれの語自体で動作を

表すことができるものである。

- (15) a. 뉴스나 다른 사람의 말에 의존하지 말고. (『서평』)
 ニュースや他人の言葉に依存せず。
 b. 숫자에만 집착하지 마세요. (조선일보 2003년 기사)
 数字だけに執着しないでください。

(21世紀世宗計画コーパス)

- (16) a. 모두 모이고 일을 해도 늦지 않을 테니
걱정 마십시오. (『그 곳에 이르는 먼 길』)
 皆集まってから仕事をして遅くないので心配しないでください。
 b. 바보 같은 소리 말아요. (『오디션』)
 ばかみたいなことを言わないでください。

(21世紀世宗計画コーパス)

上の例文(15)は、現代語において、‘말다’の前で‘하지’が省略されなかった文であり、例文(16)は、‘말다’の前で‘하지’が省略された文である。現代語における‘하지’の省略の有無を比較すると、語彙によって省略可能なものが決まっていたことがわかる。現代語において‘하지’の省略が頻繁に起こっていた語彙は、状態性動作動詞では‘간섭하다’、‘걱정하다’、‘상관하다’、‘생각하다’、‘염려하다’、‘오해하다’、動作性動作動詞では‘잔소리하다’、‘거짓말하다’、‘말하다’、‘소리하다’である。

このような考察から、15世紀から19世紀においても現代語においても、状態性動作動詞の中で「思考」と関連する用言、動作性動作動詞の中で「言動」と関連する用言において、同じように‘ㅎ디/하지’が省略されることがわかった。

7. おわりに

本研究は、禁止を表す補助動詞‘말다’に‘-ㅎ/하-’用言が先行する文において、‘말다’の前における‘ㅎ디/하지’の省略に焦点を置き、‘ㅎ디/하지’の省略の有無と用言の特徴との関係を通時的に明らかにすることを目的として考察を行った。

四章では、補助動詞‘말다’に先行する‘-ㅎ/하-’用言を、(1)先行語彙の音節数の観点から(2)用言の持つアスペクト的特徴の観点から分類した。五章では、補助動詞‘말다’の前における‘-ㅎ/하-’用言の活用様相を、補助的連結語尾と‘ㅎ디/하지’の省略を基準に考察した。そして先行する‘-ㅎ/하-’用

言の特徴と ‘-ㅎ/하-’ 用言の活用の関係性を、六章で言及した。

語彙の音節数の観点からの考察では、‘ㅎ디/하지’ が省略されたものほとんどにおいて、‘-ㅎ/하-’ に先行する語彙が二音節以上で現れていることが分かった。よって、‘-ㅎ/하-’ に先行する語彙の音節数が一音節の場合、‘ㅎ디/하지’ は省略されにくいということが言える。

用言の持つアスペクト的特徴の観点からの考察では、形容詞や状態動詞など、用言に[動作性]がないものは、‘말다’ の前において ‘ㅎ디/하지’ が省略されることが少ないことがわかった。また、状態性動作動詞の中で「思考」と関連する用言、動作性動作動詞の中で「言動」と関連する用言において、‘ㅎ디/하지’ が省略されることがわかった。

本考察は、‘말다’ の前における ‘ㅎ디/하지’ の省略のみに焦点を置いた考察であったため、文全体の統辞的特徴との関係については言及していない。これについては今後の課題として研究を進めていく。

<参考文献>

書籍・論文

- 고영근 (1997) 『표준 중세 국어 문법론』 집문당
- 김영란 (1998) 「한국어 금지 표현의 형식과 기능」 상명대학교 대학원 碩士學位論文
- 김창섭 (1997) 「‘하다’ 동사 형성의 몇 문제」 『악어문연구』 22, 서울대학교, pp. 247-267.
- 김효진 (2010) 「중세 국어 파생법 연구」 제주대학교 교육대학원 碩士學位論文
- 남기심, 고영근 (2019) 『표준 국어 문법론』 탐출판사
- 박지연 (2009) 「‘말다’ 구문 연구 : ‘말다’ 의 중립동사적 특성을 중심으로」 연세대학교 대학원 碩士學位論文
- 박지연 (2010) 「‘말다’ 의 문법적 위상 정립을 위한 통시적 연구」 『어문론총』 53 권 53 호, 한국문학언어학회, pp. 107-145.
- 서정수 (1996) 『현대 한국어 문법 연구의 개관』 한국문화사
- 심재기 (1982) 『국어 어휘론』 집문당
- 안병희 (1990) 『중세 국어 문법론』 학연사
- 우형식 (1998) 『국어 동사 구문의 분석』 태학사
- 이관규 (1999) 『학교 문법론』 월인
- 이서란 (1998) 「‘한자어+하다’ 동사 연구」 『관악어문연구』 23 권, 서울대학교, pp. 281-303.

이세영 (2002) 「 ‘말다’ 구성 연구」 동아대학교 대학원 碩士學位論文
최현배 (1961) 『우리말본』 정음문화사

辞典

국립국어원 (1999) 『표준국어대사전』 두산동아
남광우 (2014) 『교학 고어사전』 교학사

Web 사이트

국립국어원 모두의 말뭉치 (国立国語院みんなのコーパス)
<https://corpus.korean.go.kr/>

네이버사전 (Naver 辞典)
<https://ko.dict.naver.com>

디지털 장서각 (デジタル藏書閣)
<https://jsg.aks.ac.kr>

디지털 한글 박물관 (デジタルハングル博物館)
<http://archives.hangeul.go.kr/>

연세 말뭉치 용례 검색 시스템 (延世コーパス用例検索システム)
<https://ilis.yonsei.ac.kr/corpus/#/>

연세 현대 한국어사전 (延世現代韓国語辞典)
<https://ilis.yonsei.ac.kr/dic/>

- 受付 : 2022 年 7 月 31 日
- 修正 : 2022 年 9 月 13 日
- 掲載 : 2022 年 9 月 30 日

付録1 出現用言の詳細

15 世紀

거짓말ᄃᆞ다(1)、供養ᄃᆞ다(2)、끓만ᄃᆞ다(1)、祈禱ᄃᆞ다(1)、끓ᄃᆞ다(6)、怒ᄃᆞ다(1)、다ᄃᆞ다(1)、盜賊ᄃᆞ다(1)、말ᄃᆞ다(3)、명ᄃᆞ다(1)、미여ᄃᆞ다(1)、범ᄃᆞ다(1)、병ᄃᆞ다(1)、封ᄃᆞ다(1)、분간ᄃᆞ다(1)、分別ᄃᆞ다(5)、邪婬ᄃᆞ다(1)、說法ᄃᆞ다(3)、심기다(1)、숙ᄃᆞ다(1)、안식ᄃᆞ다(1)、嬴심ᄃᆞ다(1)、傳ᄃᆞ다(2)、충ᄃᆞ다(5)、貪ᄃᆞ다(1)、行ᄃᆞ다(1)、戲論ᄃᆞ다(1)

16 世紀

求ᄃᆞ다(4)、倦ᄃᆞ다(1)、근심ᄃᆞ다(1)、欺ᄃᆞ다(1)、노ᄃᆞ다(1)、勞ᄃᆞ다(1)、다ᄃᆞ다(1)、當ᄃᆞ다(1)、도죽ᄃᆞ다(1)、動ᄃᆞ다(1)、되답ᄃᆞ다(1)、雷同ᄃᆞ다(1)、말ᄃᆞ다(1)、免ᄃᆞ다(1)、분간ᄃᆞ다(1)、비ᄃᆞ다(1)、딱ᄃᆞ다(1)、설만ᄃᆞ다(1)、視ᄃᆞ다(1)、施ᄃᆞ다(1)、스랑ᄃᆞ다(1)、스모ᄃᆞ다(1)、言ᄃᆞ다(1)、欲ᄃᆞ다(1)、辱ᄃᆞ다(2)、衛ᄃᆞ다(1)、友ᄃᆞ다(1)、猶ᄃᆞ다(1)、 의심ᄃᆞ다(1)、因循ᄃᆞ다(1)、잡말ᄃᆞ다(1)、자랑ᄃᆞ다(2)、줏ᄃᆞ다(1)、질정ᄃᆞ다(1)、聽ᄃᆞ다(1)、憚ᄃᆞ다(1)、廢ᄃᆞ다(1)、함담ᄃᆞ다(1)、허믈ᄃᆞ다(15)、허소ᄃᆞ다(1)、患ᄃᆞ다(4)、誨ᄃᆞ다(1)、喜ᄃᆞ다(1)、

17 世紀

加ᄃᆞ다(1)、改ᄃᆞ다(1)、高大ᄃᆞ다(1)、告ᄃᆞ다(1)、告廟ᄃᆞ다(1)、哭ᄃᆞ다(6)、근심ᄃᆞ다(1)、ㄹᄃᆞ다(2)、농ᄃᆞ다(1)、답네ᄃᆞ다(1)、答拜ᄃᆞ다(3)、當ᄃᆞ다(1)、더蓄ᄃᆞ다(1)、도적ᄃᆞ다(2)、讀祝ᄃᆞ다(2)、懶惰ᄃᆞ다(1)、말ᄃᆞ다(1)、問ᄃᆞ다(1)、미여ᄃᆞ다(1)、配ᄃᆞ다(1)、拜ᄃᆞ다(3)、변ᄃᆞ다(1)、變服ᄃᆞ다(2)、服ᄃᆞ다(2)、訃ᄃᆞ다(1)、赴據ᄃᆞ다(1)、분변ᄃᆞ다(1)、設ᄃᆞ다(2)、設奠ᄃᆞ다(1)、盛奠ᄃᆞ다(1)、小看ᄃᆞ다(1)、衰ᄃᆞ다(1)、受胙ᄃᆞ다(1)、스랑ᄃᆞ다(1)、스慕ᄃᆞ다(1)、아쳐ᄃᆞ다(1)、語ᄃᆞ다(1)、連ᄃᆞ다(1)、擾及ᄃᆞ다(1)、由ᄃᆞ다(1)、游蕩ᄃᆞ다(1)、飲食ᄃᆞ다(1)、 의논ᄃᆞ다(1)、 의심ᄃᆞ다(1)、자랑ᄃᆞ다(3)、作ᄃᆞ다(1)、杖ᄃᆞ다(1)、著ᄃᆞ다(1)、奠ᄃᆞ다(1)、吊喪ᄃᆞ다(1)、접卜ᄃᆞ다(1)、祭ᄃᆞ다(2)、餽ᄃᆞ다(1)、重ᄃᆞ다(1)、震動ᄃᆞ다(1)、疾怨ᄃᆞ다(1)、참預ᄃᆞ다(2)、參與ᄃᆞ다(1)、천즈ᄃᆞ다(1)、取ᄃᆞ다(1)、츠례ᄃᆞ다(1)、通ᄃᆞ다(1)、行ᄃᆞ다(2)、허ᄃᆞ다(1)、허費ᄃᆞ다(1)、허믈ᄃᆞ다(15)、惑亂ᄃᆞ다(1)、昏姻ᄃᆞ다(1)、遷ᄃᆞ다(1)、降ᄃᆞ다(6)

18 世紀

求ᄃᆞ다(4)、권ᄃᆞ다(1)、嬌癡ᄃᆞ다(1)、근심ᄃᆞ다(2)、기록ᄃᆞ다(1)、넘녀ᄃᆞ다(5)、寧ᄃᆞ다(1)、당부ᄃᆞ다(1)、跳梁ᄃᆞ다(1)、動ᄃᆞ다(1)、懶惰ᄃᆞ다(1)、말ᄃᆞ다(2)、命ᄃᆞ다(1)、背反ᄃᆞ다(2)、背約ᄃᆞ다(1)、변기ᄃᆞ다(1)、分변ᄃᆞ다(1)、딱ᄃᆞ다(1)、辭讓ᄃᆞ다(2)、설만ᄃᆞ다(1)、屬ᄃᆞ다(1)、순ᄃᆞ다(1)、失時ᄃᆞ다(1)、스慕ᄃᆞ다(1)、스양ᄃᆞ다(2)、원망ᄃᆞ다(1)、요동ᄃᆞ다(1)、擾亂

하다(1)、辱하다(1)、用廬하다(1)、憂念하다(1)、遊行하다(1)、遊蕩하다(1)、因循하다(1)、일흠하다(1)、入執하다(1)、장해하다(1)、자랑하다(5)、
 爭分하다(1)、질정하다(2)、責망하다(1)、取하다(5)、冶容하다(1)、친하다(1)、
 침노하다(1)、통하다(1)、廢하다(2)、허물하다(3)、허하다(3)、
 혐의하다(1)、慌忙하다(1)、忽하다(2)、侯하다(1)、

19 世紀

간예하다(1)、간음하다(1)、걱정하다(3)、결단하다(2)、경영하다(1)、고
 집하다(1)、과도하다(1)、관계하다(1)、교만하다(1)、구애하다(1)、굴하다(1)、
 근심하다(4)、금하다(1)、기록하다(1)、꺾치하다(3)、피하다(1)、
 녀녀하다(1)、노하다(1)、늦하다(1)、더하다(1)、도모하다(4)、도적질하다(2)、
 말하다(1)、무서워하다(1)、미워하다(1)、발하다(1)、분노하다(1)、
 분변하다(1)、불목하다(1)、불화하다(1)、산란하다(1)、살인하다(1)、
 상하다(1)、슬혜하다(1)、시험하다(1)、실망하다(1)、스모하다(1)、스양하다(1)、
 싱각하다(2)、육하다(1)、원망하다(1)、음난하다(1)、의론하다(29)、
 의심하다(2)、이동하다(1)、이통하다(1)、장하다(1)、저주하다(1)、
 족하다(1)、지체하다(1)、탄식하다(1)、탐하다(5)、투기하다(2)、투도하다(1)、
 파하다(2)、패하다(1)、피하다(2)、평계하다(1)、한가하다(1)、
 허비하다(1)、혐의하다(1)、형벌하다(2)、혹하다(1)、혼잡하다(1)、훈하다(1)、
 희하다(1)、횡하다(2)

朝鮮語の思考動詞「여기다」に関する通時的考察

仲島 淳子（関西大学大学院博士後期課程）

<要旨>

本研究は、朝鮮語の思考動詞「여기다」について、中世から近代、そして現代へと通時的に、形態的、統辞的、意味的分析を実施し、その特徴を提示することを目的とした。その結果「여기다」の形態が、1920年には6割に達し、その後1930年には9割を超え、現在はほぼ100%「여기다」を使用することがわかった。活用形態と漢字の意味的分析から、現在は感情形容詞の一単語で表されるものが、中世から近代にかけては「副詞語+너기다」でその意味を担い形容詞のような扱いであったか、あるいは「너기다」が形容詞を強調する役割だけをしていたと考えられる。結合関係は「여기다」に該当する単語に先行し結合する要素は、いずれの時代においても、接尾辞「-이」が結合した副詞語が最も多く、その副詞語を形成するのは、感情を表す形容詞からの派生副詞が大半であった。そして、現代中期以降「-게」の割合が多く、また「-게」が結合する形容詞は、感情を表すものではなく状態を表す形容詞であった。統辞論的統合構造については、李賢熙(2005)の先行研究を元に分析を行い、新たに5つの構文追加が必要であることについて述べた。

キーワード 副詞語、感情形容詞、一音節の漢字、接尾辞「-이」

1. はじめに

朝鮮語において、日本語の「思う」に該当する単語として「생각하다」、「여기다」、「헤아리다」などがある。これら3つの単語は、現代語で意味が重なる部分もあれば、それぞれが独自の意味を持つ。朝鮮語学習者にとって、このような同義語の使用は、明確な判断基準がなければ非常に難しく、また誤用も起こしやすい。そこで、「생각하다」、「여기다」、「헤아리다」について、中世、近代、現代にかけ通時的に、形態的、統辞的、意味的分析を実施し、それぞれの単語が持つ特徴を明らかにすることは、朝鮮語学習者及び朝鮮語教育に必要であると考えられる。現在、これら3つの単語について並行して分析を行っており、本稿は、その中の「여기다」に関する分析結果を考察し、その特徴を提示することを目的とする。

2. 研究範囲及び対象

研究範囲及び対象は次の通りである。まず、2017年6月に韓国の国立国語院で公開された、「역사 자료 종합정비 결과(歴史資料総合整備結果)」を基に、15世紀から20世紀までの総997件の文献資料によって構築された検索機「어디메」を用い、抽出した5042個の「여기다」に該当する単語とその文章である。時代別の文献数は表1の通りである。(全文献名は【付録1】参照)

表1 「어디메」の時代別検索対象文献数

時代	文献数
15世紀	改刊 法華經諺解、救急簡易方諺解、救急方諺解 他 29
16世紀	簡易辟瘟方、警民編、救荒撮要 他 42
17世紀	家禮諺解、警民編諺解、勸念要錄 全 他 46
18世紀	家禮釋義、加髻申禁事目、改修 捷解新語 他 81
19世紀	歌曲源流、敬惜字紙文諺解、京郷新聞 他 73
20世紀	寶鑑、部別千字文、邵康節活字本 他 9

そして、意味が「여기다」として掲載された表題語の例文を、李朝時代の文献に記録された約30,000語の見出し語からなる『李朝語辭典』(劉昌惇、延世大學校出版部)から43用例、1145年～1908年のものと思われる326の文献に記録された11,315語の古語が採録されている『교학 고어사전』(南廣祐、(株)教學社、以下『古語辭典』という)から48用例、ハングルが創製されて以降20世紀の初めまでにハングルで筆写された文献に現れた語彙や文法要素からなる『고어대사전』(박재연、서문대학교 중한번역문헌연구소)から26用例を対象とした(文献名は【付録2】参照)。さらに、現代語については、2021年8月19日に公開された국립국어원 비출판물 말뭉치(버전 1.0)より、小学生から80代の成人まで総5,937人が書いた、詩、日記、手紙、小説(童話)、観賞文など総2,174,487語節から作成された「개인적 글쓰기 자료」、総2,739名の話者が、15個の主題、13個の提示資料を対象に二人の話者が自由に対話した日常対話資料(対話当たり約15分、総500時間分)「2020년 일상 대화 말뭉치」から、それぞれ「여기다」が使用された29の文章と24の文章を収集し、また、연세 20세기 한

국어 말뭉치から「여기다」が使用された 30,862 の文章を収集し使用した。そして、必要に応じ『우리말 큰사전 4:옛말과 이두』(한글학회、以下『우리말 큰사전』という)、『17세기 국어사전』(홍윤표他、太學社)に意味が「여기다」として掲載された表題語の例文を参考にし、形態構造面、統語構造面、意味面について考察した。

朝鮮語史の時代区分については、音韻や文法、語彙などの体系の変化や、文体の変化といった言語の変化を基準としたものや、社会的な歴史区分を基準としたものなど、その時代区分については、研究者によって設定に多少異なる部分がある。しかし、言語に関する時代をどのように区分するかは、当然ながら言語の音韻や文法、語彙などの変化が基準になるべきである。そのため、本稿では母音体系や子音体系、文法体系の変化を基準とした、이기문(1961)の時代区分を基とするが、‘·’の消滅は、朝鮮語の母音体系において大きな変化であり、言語の変化を分析する上で重要であるため、この‘·’の消滅と‘e’、‘ε’の単母音の誕生によって 7 母音体系から 8 母音体系へと変化した時期で、さらに近代を前期、後期に区分した홍윤표(1994)の時代区分を基準として「中世、近代、現代」を使用する。

古代朝鮮語：～9 世紀末

中世朝鮮語：10 世紀～13 世紀末(前期)、14 世紀～16 世紀末(後期)

近代朝鮮語：17 世紀～18 世紀中盤(前期)、18 世紀中盤以降～19 世紀末(後期)

現代朝鮮語：20 世紀初～現在

3. 先行研究

李賢熙(2005)では、15 世紀中世語の辞書を編纂する際、登載する用例の配列順序をどのように配列するのか検討するために、既存の古語辞典『우리말큰사전』、『李朝語辞典』、『古語辞典』に掲載された「너지다」の見出し項を整理し、意味論的特性と音韻論的顕現様相、形態論的統合構造と統辞論的統合構造に分けて考察している。

まず、意味論的特性について、中世朝鮮語の「너지다」は現代朝鮮語「여기다」の、“心の中である対象を何らかに思ったり判断する”という意味とほぼ類似した意味を持つと見られるが、中世朝鮮語の「너지다」が「여기다」よりはるかに多様な構文類型を見せるため、留意しなければならないとしている。そして、中世朝鮮語で「생각하다、판단하다、여기다」の意味以外に「말하다」の意味としても使用されていたと推測している。

そして、統辞論的統合構造について、11 パターンを例と共に羅列し、その中でも「너지다」構文は、目的語を持つ場合、目的語と「너지다」の間に副詞語を統合させる構文類型が最も多いと述べている。(1)～(3)は、「너지다」の前

に副詞語が先行する構文の例である。

<2>'(NP-를, V-오물, V-{ㄴ, ㄹ}돌)ADP¹ 너기다'形式

- (1) ㄱ. 衆生이 저근 惡을 므더니 너겨<月印釋譜 21:78>
 ㄴ. 特進의 빗나물 돌히 너기다 아니하소라<杜詩諺解初刊本 24:30>
 ㄷ. 가야미 사리 오라고 몸 닷기 모루는 돌 舍利弗이 슬피 너기니<月印千江之曲 上 170>

<2'>'VP-돌 ADP 너기다'形式

- (2) 이 곤흔 豆흔 藥을 먹돌 슬히 너기니<月印釋譜 17:21>

<2''>'NP-{에, 로}ADP 너기다'形式

- (3) 사르미 다 조조 드로모로 榮籠히 너기거늘<内訓 2 下 11-2>

しかし、李賢熙(2005)は、あくまでも辞書編纂時に登載する用例の配列順序についてのみ述べており、また構文類型について李賢熙(1994)においても、「너기다」構文が、目的語を持つ場合、目的語と「너기다」の間に副詞語を統合させる構文類型が最も多い理由については言及していない。

홍사만(1998,2003)は、思惟動詞「사랑하다」について「싱각하다」、「너기다」との類義関係を分析する中で、「사랑하다」、「싱각하다」、「너기다」は‘-ㄴ가 X’、‘-고져 X’、‘-줄을 X’の統辞的環境で共通的な分布を見せると述べている。そして、「너기다」について、次のようにまとめている。①現代国語動詞「여기다」は目的語とその補充的な項を要求する複雑な他動詞であり、“무엇을 어떻게 여기다”、“무엇을 무엇으로 여기다”、“무엇을 무엇이라고 여기다”という文型が一般的な形態で、それは中世、近代の「너기다」についても同様であり、‘目的語+副詞「너기다」’の分布が最も多かった。②‘目的語+補充語「너기다」’構文における補充語は、様態副詞を始め、‘N+로’があり、同等比較構文として‘-ㄴ(ㄹ)가’、‘-ㄷ(ㄷ시)’、‘-ㄱ터’などがあった。③「너기다」の前に冠形下位文が来る‘S-「너기다」’構文ではその下位文が‘-ㄴ(ㄹ)가(고)「너기다」’の疑問形と、‘-다(라)「너기다」’の平叙文の場合が一般的であり、間接話法となる一種の引用文である。④中世国語

¹ NP(名詞句) VP(動詞句) ADP(副詞語) S(主述構造を完全に持つ文章) S' (述語部分が上位文の目的語と同じなので省略された文章)

で「너지다」は部分的ではあるが、自動詞として使われたものと、他動詞として使われ目的語を持ちその補充語がない形態がある。目的語に依存名詞が来ることもあり、そのような分布は「사랑하다」にも見られる同価的形態である。⑤「너지다」で始まる文は、必ず冠形下位文が後続し、間接話法の引用文と扱うことができるが、近代では確認できない。⑥近代国語で‘目的語+副詞「너지다」’と交替が可能な‘目的語+副詞「싱각하다」’の形が見られないのは両者が弁別的な統辞制約を形成していたためで、現代にはそれが失われた。

上記の「너지다」に関するまとめ④で、中世朝鮮語で「너지다」は部分的ではあるが、自動詞として使われたものがあることについて触れており、その大部分が「너지다」の形態で現れ、「너지다 -하다」の形式であるとしている。そしてこの時「너지다」は前置文で後続する下位文は間接話法引用文の性格を帯びるものと思われると述べている。しかし、15世紀以降「너지다」が「너지다」の形態以外で自動詞のように現れるものがあり、さらに考察が必要であると思われる。

이은섭(2008)は、現代朝鮮語で「여기다」が形成する構文について、辞書に掲載された例文と類型を元に、コーパスを用いて考察し、「여기-」構文の類型を‘-로’副詞語先行構文と副詞節先行構文の2つに分類し、特徴について次のように述べている。現代語の「여기-」構文は、①全体が他動詞構文である。②‘-게 여기-’構文と、‘-이 여기’構文は同質性がある。③意味面において、思惟主体が思惟対象を可視的なものとして認識しているか、思惟主体と対象との心理的距離などが「여기-」構文の類型を決定する要因である。また、「여기-」が形成する最も典型的な構文は‘-게 여기-’構文であり、‘-게’で代表する副詞節の叙述語は全て形容詞が担当していると述べている。しかし、これらは歴史的な部分には焦点を当てず、あくまで現代語のみ考察している。「여기다」が持つ形態的、統辞的、意味的な特徴と他の思考動詞「생각하다」、「헤아리다」との関連性を知るためには、共時的な考察では不十分であり、近代、更には中世と遡った通時的な調査が必要であると考えられる。

이상억、서승완(2017)では、1446年の『訓民正音解例』から1900年の『新約聖書』に至る朝鮮時代の400余りの文献に掲載された914個の表題語の変化形について調査し、その中で「여기다」の形態を表2の通り整理している。

表2 『조선시대어 형태 사전』여기다の世紀別形態
(이상억、서승완(2017)『조선시대어 형태 사전』より)

単位(個)

世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀
基本形					
너지-	1174(석)	457	546	490	182(신심소)

녀기-	4(석)	71	93	159	57(매일)
너기쁘-		1(龜)			
네기-			2(杜重)	1	223(예성로스)
넉이-			1(癸丑)	4	156(신약)
넉이-			70(계녀서)	62	992(신약)

そして、それぞれの形態の割合は、「녀기-」が60%、「넉이-」が8.1%、「너기쁘-」が0.0%、「네기-」が4.8%、「넉이-」が3.4%、「넉이-」が23.7%であったとしている。つまり、15世紀から17世紀にかけての形態は「녀기-」が最も主流であったが、17世紀に「넉이-」が登場してから、徐々に「녀기-」は減少し、19世紀には「넉이-」が主流となったということである。また、表記方法の面では、15世紀に連綴表記であったものが、17世紀に入り分綴表記も見られるようになってきている。しかし、이상억、서승완(2017)では、形態の種類と時期、そして数のみを提示しただけにとどまっている。

本稿では、上記の先行研究では明確にされていない内容について、明らかにしたい。

4. 「여기다」の形態的分析

4.1 表記

『국립국어원 우리말샘』によると、「여기다」は15世紀から19世紀では「녀기다」、16世紀から19世紀では「넉기다」、18世紀以降は「여기다」として現れたとし、次のように解説されている。

현대 국어 '여기다'의 옛말인 '녀기다'는 15세기 문헌에서부터 나타난다. 16세기에는 제1음절에 반모음 'ㅣ[y]'가 첨가되어 모음 'ㄱ'이 'ㅋ'로 바뀐 '넉기다' 형태가 등장하였다. 근대국어 후기에 'ㄴ'의 구개음화로 인해 'ㅣ, ㅍ, ㅋ, ㅌ, ㅍ, ㅍ' 등의 모음 앞에서 'ㄴ'이 탈락하는 현상이 일어났는데, 이에 따라 18세기에는 '녀기다'에서 'ㄴ'이 탈락하여 현대 국어와 같은 '여기다'가 나타나게 되었다. 한편 근대국어 문헌에는 '넉이다, 넉이다, 역이다'와 같은 과도한 분철 표기도 등장하고 있다.

이형태/이표기 녀기다, 넉이다, 녀기다, 넉이다, 여기다, 역이다

(²現代韓国語「여기다」の古語である「녀기다」は15世紀の文献より現れる。16世紀には第1音節半母音「ㅣ[y]」が添加され、母音「ㄱ」が「ㅋ」に変わった「넉기다」という形態が登場する。近代韓国語後期に「ㄴ」の口蓋

² 著者による翻訳。以降()内は著者による翻訳。

音化により「ㄹ, ㅍ, ㅋ, ㆁ, ㅍ, ㅌ」といった母音の前で「ㄹ」が脱落する現象が起こったが、これによって18世紀には「녀기다」から「ㄹ」が脱落し、現代韓国語と同じ「여기다」が現れることになった。一方、近代韓国語文献には「녁이다, 녍이다, 역이다」のような過度な分綴表記も登場している。異形態/異表記：녀기다, 녍이다, 녀기다, 녍이다, 여기다, 역이다)

『국립국어원 우리말샘』の世紀別形態は、이상억、서승완(2017)と同様に、「녀기다」、「녀기다」が15世紀から19世紀に現れる形態であり、「녁이다」、「녁이다」ともに17世紀ではなく18世紀に現れる形態となっているが、「녀기뜨다」、「네기다」は見られなかった。(【付録3】参照)

今回調査した「어디메」から抽出した5042個の形態は表3の通りである。

表3 「여기다」の世紀別形態(어디메より)

単位(数：個/割合：%)

世紀 基本形	15世紀		16世紀		17世紀		18世紀		19世紀		20世紀	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
녀기-	1068	100	451	90	438	84	610	69.4	213	16.8	112	14.0
녀기-			50	10	84	16	164	18.7	173	13.6	10	1.3
녁이-							88	10	566	44.4	581	72.8
녁이-							3	0.3	143	11.2	84	10.5
여기-							10	1.1	121	9.6	6	0.8
역이-							3	0.3	22	1.8	4	0.5
네기-									35	2.8		
녀계-							1	0.1				
녁기-									1	0.1	1	0.1

これらのデータで注目したいのは「여기다」という形態への変化時期である。이상억、서승완(2017)では、「여기다」は15世紀から19世紀では現れていなかった。そして、『국립국어원 우리말샘』によると、「여기다」は近代韓国語後期に「ㄹ」の口蓋音化により、18世紀には「녀기다」から「ㄹ」が脱落し、現代韓国語と同じ「여기다」が現れることになったとのみ述べており、現在の「여기다」という形態が主となった、はっきりとした時期を述べられていない。確かに表4でもわかるように、「여기다」は18世紀に全体の1.1%の割合で出現し始めた。しかし、19世紀になりそれまで主流であった「녀기다」が大幅に減少し、「여기다」の割合も増加してはいるものの、全体の10%弱にとどまり、「녁이다」という形態が全体の50%弱を占めている。そしてその傾向は変わることなく、20世紀には「녁이다」という形態が70%を超える。20世紀のデータに

ついては、「어디메」の対象文献が20世紀初期のものであるため、연세 20세기 한국어 말뭉치를を用い、「넉이다」、「넉이다」、「너기다」、「여기다」を検索した結果が表4である。

表4 20世紀の「여기다」の形態(연세 20세기 한국어 말뭉치より)
単位(数：個/割合：%)

年代 基本形	1900		1910		1920		1930		1940		1950		1960		1970		1980		1990	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
넉이다	73	70.87	42	52.5	8	34.78	16	5.755	4	2.174		0		0	9	0.354	2	0.038	4	0.02
넉이다	21	20.39	18	22.5	14	4.348	3	1.079	2	1.087	1	0.163	1	0.055	7	0.275	4	0.076		0
너기다	1	0.971		0		0	1	0.36	2	1.087	1	0.163		0		0	3	0.057	17	0.085
여기다	8	7.767	20	25	14	60.87	258	92.81	176	95.65	610	99.67	1821	99.95	2525	99.37	5240	99.83	19949	99.89
	103	100	80	100	23	100	278	100	184	100	612	100	1822	100	2541	100	5249	100	19970	100

1910年代までは、「넉이다」が半数を超えるが、1920年代には、全体的な用例は少ないものの、その中でも「여기다」の数が他と比較して半数以上を示しており、さらに1940年代はほぼ「여기다」が使用されている。つまり、「여기다」は20世紀中盤にその形態が確立したということになる。抽出した語彙の形態を集計した表3、表4の通り、中世から現代までにかけて「여기다」の形態変化の主流は、「너기다>너기다>넉이다>넉이다>여기다」であったと言える。

次に「여기다」の異形態について、考察する。まず、(4)は「너기쁘다」の例文であり、1579年の文献『禪家龜艦診解』のものである。이상익, 서승완(2017)では、「너기쁘다」が1件となっていたが、2件確認できた。

(4) ㄱ. 저그나 너기쁘면<禪家龜艦診解上 3>

ㄴ. 學者 | 眞實로 너기며 議論티 몬호리로다<禪家龜艦診解下 63>

そして、「네기다」の用例をしてみる。次の(5)ㄱは「네기다」の例文で、1632年の文献『杜詩診解重刊』のものである。(5)ㄴ、ㄷの例文は、『華音撮要』、『三國志』いずれも19世紀の文献であり、19世紀には全体の2.8%の割合で「네기다」という形態が現れていた。

(5) ㄱ. 네브터 비르수 天命을 便安히 네겨 : 宿昔始安命<杜詩診解重刊二 13>

ㄴ. 노야는 우리들의 이 한 목숨을 어엿비 네겨 다시 싱각호어라(老爺可憐我們)

的這一條性命再〓想着罷) 원접수(遠接使) <華音撮要 56b>

- ㄷ. 然? 죄 그러이 네져 죽이지 아니호고 별실에 두고 길으니 정옥이 날마다 가문안호고 일직 셔〓로 결의형제로르 호고 셔모를 친모갓치 디접호고(操然其言、遂不殺徐母、送於別室養之、程昱日往問候、詐言曾與徐庶結為兄弟、待徐母如親母) <三國志 6 : 61>

そして、先行研究や『국립국어원 우리말샘』では見られなかった、重綴表記「넉기다」が(6)の通り 1736 年の『女四書諺解』と 1900 年代の『閒中謾錄 2』で確認できた。

- (6) ㄱ. 인군이 그 쓰슬 아름다히 넉겨<女四書諺解 3 : 2>
 ㄴ. 선인이 불행이 넉기오시고 넘너호시 측냥 읍수오시니<閒中謾錄 2>

同様に(7)は先行研究及び『국립국어원 우리말샘』では見られなかった「넉기다」が 19 世紀から 20 世紀の初めに書かれた『啓明大 西遊記』に見られる。

- (7) ㄴ 나히 일천 히 풍상을 오만니 넉기니 높흔 줄기와 영기로은 가지 힘이 스스로 강호엿도다(吾年千載傲風雷霜、高幹靈枝力自剛) <啓明大 西遊記 21 : 100-64>

そしてわずかひとつであるが、(8)のように 1772 年の文献で「넉계다」が確認された。

- (8) 오 사람이 어엿비 넉계 제호눈 디를 강 우희셔 오고 명호야 골오디 셔산이라 호다(吳人어憐之호야 立祠江上호고 命曰胥山이라 호다) <十九史略諺解卷之一>

이상억、서승완(2017)、『국립국어원 우리말샘』の分類では、15 世紀には「넉기다」、「넉계다」といった連綴表記であったものが、17 世紀、あるいは 18 世紀になり「넉이다」、「넉이다」といった分綴表記となっていたが、18 世紀に「넉기다」といった重綴表記が確認でき、つまり、18 世紀は表記方法の混乱期で、連綴表記、分綴表記、重綴表記が同時に存在した時期であったと考えられる。また連綴表記の基本形も「넉기다」、「넉계다」だけではなく、「넉기다」という表記も 19 世紀の文献で確認される。これは、近代に入り ‘.’ の消滅と ‘의’ の単母音化に伴い ‘-이/-의’ が ‘-이’ へと変化する時期であったためであると思われる。これらをまとめると、「여기다」の異形態は「넉기다、넉이다、넉계다、넉이다、넉이다、넉기다、넉기다、넉기뜨다、넉계다、넉기다」が存在したと言える。

4.2 連結語尾の活用形態

「너지다」は、『李朝語辭典』、『古語辭典』、『고어대사전』、『표준국어대사전』、いずれの辞書においても動詞として掲載された他動詞である。

中世の文法において、自動詞や動詞「오-」の後ろに「아/어」が続くと、「거」や「나」に形を変える。例えば、「앉다」、「오다」に「-아닐/-어늘」が接続した場合、「앉거늘」、「오나늘」となる。そしてこの「거」系列の語尾は自動詞だけではなく形容詞にも接続する。しかし、15世紀の文献(9)ㄱ、16世紀の文献に(9)ㄴでは、他動詞「너지다」であれば、それぞれ「너지시늘」、「너지늘」となるはずが、「너지거시늘」、「너지거늘」という形態が確認できる。

(9) ㄱ. 어엿비 녀기거시늘 <三綱行實圖 烈 7 >

ㄴ. 무을 사람이 영화로이 녀기거늘 <小學諺解 5 : 30 >

同様に17世紀の文献(10)でも、「도히 녀기다」、「민망히 녀기다」に「거」系列の語尾が接続している。

(10) ㄱ. 신라 진평왕이 산형을 도히 녀기거늘 <東新忠 1 : 7 b >

ㄴ. 아비 일즉 아가아달 순이 던디집 업스물 민망히 녀기거늘 <東國新續三綱行實圖 三綱孝子圖 1 : 45 b >

また、李賢熙(2005)で「너지다」の構文を11に分類した「<2">'NP-{애,로}AD P 녀기다」形式」の例文として、提示された(3)にも「너지거늘」が現れる。이은섭(2008)は、現代国語で「여기다」が形成する構文について、「-로」副詞語先行構文と副詞節先行構文の2つに分類し、全体が他動詞構文であると述べている。「너지다」が他動詞であるとする、これらの現象は、「너지다」が前に来る副詞語と共に用いられ「어엿비 녀기다」、「영화로이 녀기다」という形態で形容詞のような扱いであったか、あるいは形容詞を強調する役割だけをしていたと考えられる。このような「거」系列の語尾が接続しているものは15世紀15個、16世紀10個、17世紀6個、18世紀14個、19世紀5個、20世紀2個が確認でき、45個は副詞語と共に用いられており、その他7個は叙述文や助詞が先行してた。そして、その副詞語を形成する語彙は感情を表す形容詞であるという特徴が見られた。このことについては、第6章の意味に関する部分で述べるが、感情を表す漢字一文字で表記されたものを諺解する際、ほとんどが接尾辞「-이」が結合した副詞と「너지다」で表されるため、「-이」で形成される副詞語+너지다」を形容詞とみるのが妥当であると考えられる。

5. 「여기다」の統辞的分析

5.1 結合関係

表5は、「어디메」から抽出した現在の「여기다」に該当する5,042個の単語に先行し結合するものである。

表5 「여기다」の世紀別結合関係①(어디메より)

単位(数:個/割合:%)

結合要素	15世紀		16世紀		17世紀		18世紀		19世紀		20世紀	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
副詞 (이)	696	65	374	75	407	78	680	77	1,080	85	637	80
副詞 (게/케)		0	2	0	3	1	55	6	83	7	49	6
副詞 (곧, 다, 쏘他)	27	3	1	0	1	0	9	1		0		0
副詞の否定形	12	1	16	3	4	1	17	2	12	1	2	0
助詞 (만, 과, 고)	17	2	13	3	2	0	12	1	22	2	4	1
助詞 (이, ㅣ, 은/는)	37	3	3	1	2	0	2	0	2	0		0
助詞 (로, 노)		0		0	9	2	9	1	44	3	84	11
叙述文 (다, 라)	61	6	13	3	12	2	6	1		0	1	0
語尾 (저, 자他)	23	2	11	2	15	3	10	1	3	0	2	0
語尾 (르/는/는가他)	20	2	23	5	23	4	38	4	2	0	6	1
語尾 (르까)	2	0		0	4	1	7	1		0		0
語尾 (고)	18	2	1	0	1	0		0		0	2	0
先行文なし	14	1	1	0		0	3	0	6	0	4	1
名詞	19	2		0	1	0		0	1	0		0
目的語節 (돌)	4	0		0	1	0		0		0		0
その他	125	12	43	9	34	7	31	4	19	1	8	1
	1,075	100	501	100	519	100	879	100	1,274	100	799	100

表5からわかるように、いずれの時代においても「여기다」に該当する語彙に先行して結合する要素としては、接尾辞「-이」が結合した副詞語が最も多く、他の要素は10%に達しないものがほとんどである。副詞を形成する派生接尾として、「-이」、「-히」、「-오/우」などを挙げることができるが、「-히」については、「-히다」という形態から「ㅇ」が脱落し「-이」が結合したものであるため、ここでは「-이」、「-히」を別々に扱わず、「-이」として計上している。이은섭(2008)では、「여기-」が形成する最も典型的な構文は「-게 여기-」構文であるとしているが、少なくとも現代国語初期の段階では、「-게」が結合した副詞語は全体の6%に過ぎず、「-이」で形成される「-이 여기-」構文が主であったことがわかる。

- (11) ㄱ. 衆生을 어엿찌 너겨 正法을 세시니이다 <釋譜詳節 24>
 ㄴ. 아비사 비록 어엿비 너겨 이든 말로 달애야도 <月印釋譜 12>
 ㄷ. 공민왕이 보야호로 신둔이를 어엿비 너기셔를
 <東國新續三綱行實圖 三綱忠臣圖>
 ㄹ. 오직 던해 에엿비 녀이시며 <明義錄解 利>
 ㄹ. 너희 어엿비 네기기를 너희 하늘에 아밤이 갖치 호여라
 <耶蘇聖教全書>
- (12) ㄱ. 더 사르미 헤아롬 업숨 우수를 므던히 너골디니라 <南明泉繼頌諺解>
 ㄴ. 그 아비 일 홀어미 된 주를 슬피 너겨 브들 앓고져 호거늘
 <東國新續三綱行實圖 新續烈女圖 卷七>
 ㄷ. 의덕이 술을 밍그라늘 위 자시고 돌게 너겨 니르샤디
 <十九史略諺解卷之一>
 ㄹ. 은혜의 고로지 아님을 엇더케 녀일고 <寶鑑 2>

そして、接尾辞「-이」が結合する語彙で、最も多いのが「어엿브다(불쌍하다)」であり、(11)のように「어엿찌/어엿비/어엿비/에엿비/어엿비」といった形態で現れる。その他の語彙も(12)ㄱ.ㄴ.のように感情を表す形容詞に接尾辞「-이」が結合したものが大半であった。一方、近代以降増加する「-게」が結合して形成される副詞語は、(12)ㄷ.ㄹ.のように、状態を表す形容詞に結合したものが多。

表 6 「여기다」の世紀別結合関係②

(『李朝語辭典』、『古語辭典』、『고어대사전』 『17세기 국어사전』より)

単位(数:個/割合:%)

世紀 先行語	15世紀		16世紀		17世紀		18世紀		19世紀	
	副詞語	20	64.5	14	73.7	159	77.9	7	77.8	11
-라	4	12.9			1	0.5				
-가					1	0.5				
-르/논/논가	1	3.2	1	5.3	25	12.3	1	11.1		
-을	1	3.2								
-져	1	3.2			3	1.5				
-애	1	3.2								
-로			1	5.3	5	2.5				
-도			1	5.3	2	0.9				
-만					1	0.5	1	11.1		

名詞	1	3.2			2	0.9				
句	1	3.2	1	5.3	4	2				
なし	1	3.2	1	5.3	1	0.5				

表 6 は、『李朝語辭典』、『古語辭典』、『고어대사전』、『17 세기 국어사전』に意味が「여기다」として掲載された 314 の例文から重複を除き、年代がわかるものから「여기다」に先行し結合するものをまとめたものである。

表 6 からわかるように、こちらも全体の 80%弱で副詞語が「여기다」に該当する語彙に先行する。この副詞語 211 個は、2つを除きすべて「어엿비 너기다」、「도히 너기다」、「아름다이/아름다이/아름다히 너기다」のように接尾辞「-이」が結合した、形容詞からの派生副詞であった。そして、いずれのデータからも中世から近代にかけ共通しているのは、その形容詞が感情を表すものが大半であるということである。

次に現代朝鮮語である。국립국어원 비출판물 말뭉치から収集した「여기다」が使われた文章は文語 29 件、口語 27 件であった。これらの文章で「여기다」に結合する要素として先行するものは表 7 の通りである。

表 7 「여기다」の結合関係(국립국어원 비출판물 말뭉치より)

単位(数:個/割合:%)

先行語	文語		口語	
	数	割合	数	割合
-게	8	27.6	11	45.8
-로/으로	8	27.6		
-라/-라고	6	20.7	4	16.7
눈			3	12.5
-다/-다고	2	6.9	1	4.2
소중히,궁홀히	2	6.9	1	4.2
당연시,중요시	1	3.4	2	8.3
その他	2	6.9	2	8.3

最も多く結合したものは文語、口語ともに語尾「-게」であり、文語では「-로/으로」が同数であった。中世、近代同様に副詞語が結合する割合は多いが、「-이/히」で作られた副詞語より「-게」の割合が多いことがわかる。「-게」は、動詞や形容詞の後ろに接続し、後ろにくる状態の目的や結果、程度などを表す

語尾であるが、「당연하다」、「신중하다」、「중요하다」、「소중하다」といった形容詞に接続しており、「딱하다」、「가없다」を除いたすべてが状態を表す形容詞であった。

これらをまとめると、「여기다」に先行して結合する要素として、中世から現代の初期までは感情を表す形容詞に接尾辞「-이」が結合した副詞語が最も多かったが、近代以降、状態を表す形容詞に語尾「-게」が接続したのが見られるようになり、現代は語尾「-게」が接続する形態が最も多くなった。これは第4章で考察した「-이」で形成される「副詞語+너지다」を形容詞と見ることにとも関連しており、感情を表す形容詞に接尾辞「-이」が結合した副詞語と「너지다」という形態は、現代ではひとつの形容詞となっていると考えられる。

5.2 統辞論的統合構造

先行研究で言及した通り、李賢熙(2005)では、中世の「너지다」構文の統辞論的統合構造について、11パターンを例と共に羅列し、中でも「너지다」構文は、目的語を持つ場合、目的語と「너지다」の間に副詞語を統合させる構文類型が最も多いと述べ、その構文パターンとして3つを提示している。それらを元に、「여기다」構文における統辞論的統合構造について考察する。李賢熙(2005)が示した副詞語を先行させる3つの構文パターンは次の通りである。

- <2>'(NP-를,V-오물,V-{ㄴ,ㄹ}돌)ADP 너기다'形式
 <2'>'VP-돌 ADP 너기다'形式
 <2''>'NP-{애,로}ADP 너기다'形式

収集した用例の多くを分析した結果、李賢熙(2005)の3つの構造パターンの分布を見せるものが確認できた。しかし、3つの構造パターンだけでなく、残る8つの構造パターンに分類される用例においても、副詞語を統合させているものが確認された。

- (13) ㄱ. 어딘 일을 어달이 너교디 色 도히 너김으로 밧고아 흥며<小學諺解 1>
 ㄴ. 狻猊 더러 부료물 듣고져 조수로이 너기고<杜詩諺解 20>

(13) ㄱ.は、李賢熙(2005)で提示された「<3''''>'NP-를 너교디 S' (흥-)'形式」である。「너교디」の前に副詞語が先行している。そして、(13) ㄴ.は、「<4>'VP-고져 너기-'形式」である。こちらにも「너지」の前に副詞語が先行している。つまり、新たに「NP-를 ADP 너교디 S' (흥-)'形式」、及び「VP-고져 ADP 너기-'形式」を追加する必要がある。

そして、11の構造パターン当てはまらないものも確認されたが、その中でも

中世から現代にかけて確認されたものが次の(14) (15)である。

- (14) ㄱ. 이뻘 아들돌히 아비 죽다 듣고 무수매 ㄱ장 설버 너고디 <月印釋譜 17>
 ㄷ. 每每에 念^ㅎ호미 이에 밋고 自然히 므던히 너골 무수몰 두디 몰홀 ㅅ라미로 라 <內訓 1>
 ㄹ. 관원이 이 말을 듣고 ㄱ장 우습게 녀이나 <三說記 卷之 27 張本>
- (15) ㄱ. 그런 죄인돌히 다 즐겁고 쾌히 너기몰 만나고 <佛說長壽滅罪護諸童子陀羅尼>
 ㄴ. 밥 머글 에도 업수니 괴롭고 설이 너겨 혼번은 혼자말노 니르디 <西宮日記>
 ㄷ. 그도 그럴것이 보통 더럽고 하찮게 여겨지는 발톱과 보통 깨끗하고 숭고하다고 여겨지는 사랑의 조합이라니 <非出版物、15歲、女性>

(14)は「듣다(듣다), 밋다, 웃다」といった動詞に、動作の先行を表す語尾「-고」が接続したものと、「너기다」の間に副詞語が入るパターンである。この時の語尾「-고」は、単純な動作の先行を表しているだけではなく、例えば、(14)ㄱ. 「それを聞いて、苦しく思う」のように、先行文のことが起こり、そのことが原因で後行文の状況や感情となることを表しており、語尾「-아서/어서」と入れ替えが可能である。これについても、新たに「V-고 ADP 너기(여기)-形式」、「V-고 ADP 너고디-形式」を追加する必要がある。

一方、(15)は「즐겁다, 괴롭다, 더럽다」といった形容詞に、並列を表す語尾「-고」が接続したものと、「너기다」或いは「여기다」の間に副詞語が入るパターンである。この時の語尾「-고」は、例えば(15)ㄱ. 「楽しく、愉快地に思う」のように、2つの状態を並列に述べており、「愉快地で、楽しく思うと」前後の入れ替えが可能である。こちらも「ADJ-고 ADP 너기(여기)-形式」の追加が必要である。

6. 「여기다」の意味的分析

6.1 漢字表記による意味分析

박영섭(2012)では、15世紀『訓民正音』、『釋譜詳節』、『月印釋譜』、16世紀『訓蒙字會』、『光州千字文』、『石峰千字文』、『新增類合』、17世紀『老乞大諺解 上・下』、『朴通事諺解 上・中・下』、18世紀『伍倫全備諺解』、19世紀『註解 千字文』、20世紀『字典釋要』、『新字典』といった文献から、一音節の漢字、二音節以上の漢字について、対訳語を通時的に分析しており、「너기다」に該当する漢字として、一音節の漢字では「見、僑、想、擬、誕」を挙げている(【付録 4】を参照)。また、「어엿비녀기다」に該当する漢字

として「憐」、「어엿비 너기다」に「憫然」、「므더니 너기다」に「傲(傲)」、
「어엿비」に該当する漢字では「矜、哀、哀愍、憐愍、惻隱」を挙げているが、
これらは「어엿비」としてだけでなく「어엿비 너기다」としての意味を表して
いることから、「너기다」が単独で使われる場合と、副詞語などと共に用いら
れる場合があったことがわかる。このことを踏まえ、『李朝語辭典』、『古語
辭典』、『고어대사전』、『우리말 큰사전』の例文と共に漢字表記について考
察する。

まず、15 世紀文献上の(16)の文章で、一音節の漢字「謂、以」は「~と思う」
、「想」は「~に思う」、「意」は「~を思う」、「擬」は「察する、慮る」
という意味として「너기다」が用いられている。一方、一音節の漢字「愛」、
二音節の漢字「哀矜」は「어엿비 너기다」が用いられている。

(16) ㄱ. 훈 會에 다 니르디 아니하시니라 너기며 <楞嚴經諺解 1 : 16 >

ㄴ. 내 百姓 어엿비 너기샤:我愛我民 <龍飛御天歌 50 章 >

ㄷ. 어엿비 너겨 보샤:覽之哀矜 <龍飛御天歌 96 章 >

ㄹ. 무수매 너기며 사랑하야:心想思惟 <金剛經諺解 上 16 >

ㄹ. 그 잘 호말로 누물 病드이 너기디 아니홀시 : 不以其所長病人故 <圓覺經
諺解序 10 >

ㅁ. 漸漸 저근 비물 노코져 너기노라 : 漸擬放扁舟 <初刊杜詩諺解 14 : 8 >

ㅂ. 어느 出守하야 江城의 와 사로물 너기리오 : 豈意出守江城居 <初刊杜詩
諺解 21 : 17 >

ㅇ. 너겨 議論하며 思量하린댄 : 擬議思量 <南明集諺解 下 67 >

16 世紀の文献上の(17)の文章では、一音節の漢字「憐、賤、好、榮、痛」が
「불쌍하다(憐だ)」、「천하다(賤しい)」、「좋다(良い)」、「영화롭다(華や
かだ)」、「아프다(痛い)」のように、現在は形容詞の一単語で表すものを、「
副詞語+너기다」としている。

(17) ㄱ. 어엿비 너길 년 (憐) <新增類合 下 13 >

ㄴ. 飲食만 하논 사름을 곧 사름이 저히 너기누니 : 飲食之人則人賤之矣 <宣小
5 : 29 >

ㄷ. 學者 | 眞實로 너기며 議論티 묻하리로다 : 學者實不可擬議也 <禪家龜鑑
下 63 >

ㄹ. 용민을 도히 너겨 싸흠 싸호며 : 好勇鬪狼 <宣小 2 : 34 >

ㄹ. 무을 사름이 영화로이 너기거늘 : 鄉人榮之 <宣小 5 : 30 >

ㄴ. 아비 命 아닌 줄을 설이 녀겨 : 痛父非命 <宣小 6 : 24>

17世紀の文献上の(18)の文章では、一音節の漢字「安、奇、悦」が16世紀同様「편안하다(安らかだ)」、「기특하다(奇特だ)」、「기쁘다(嬉しい)」などの形容詞一単語で表されず「副詞語+너지다」となっている。

(18) ㄱ. 네브터 비르수 天命을 便安히 네겨 : 宿昔始安命 <杜詩諺解重刊二 13>

ㄴ. 아는 사람이 기르기 녀기더라 : 識者奇之 <東國新續三綱行實圖 忠 1 : 50>

ㄷ. 도적이 그 고은 주를 도히 녀겨 자바가고져 허거닐 : 賊悦其姿色將欲攬去 <東國新續三綱行實圖 孝 7 : 56>

18世紀の文献上の(19)の文章では、一音節の漢字「善、苦、輕」が「착하다(良い)」、「괴롭다(苦しい)」、「가볍다(軽い)」などの形容詞一単語で表されず「副詞語+너지다」に、一音節の漢字「爲」は「〜と思う」を表している。

(19) ㄱ. 착히 녀기다 : 善之 <同文類解上 24>

ㄴ. 내 그디를 위허라 당검을 춤추고져 허나 칼 노爲래 괴롭 : 고 슬퍼 사람이 괴로이 녀겨 염허돏다(我欲爲君舞長劍、劍歌苦悲人苦厭) <古文眞實諺解 5-1 : 21>

ㄷ. 爲?샤군 왕니 필탁으로써 다 방달을 일심으니 지어 취허매 오슬 벗고 희롱 허고 늙더도 그러게 녀기디 아니허더라(城陽王夷、眞蔡畢卓、皆以任放爲達、至於醉狂裸體、不以爲非) <通鑑 西晉 2 : 3>

ㄹ. 以爲?뵈 상해 슈의 좌우를 섬기니 좌위 다 기리논디라 쉬 어딘가 녀겨 단시드려 왈(實善事垂左右、左右多譽之、故垂以爲賢、謂段氏曰) <資治通鑑 東晉 9 : 25> 覺

ㅁ. 선부도 오히려 능히 후싱을 두려허신디라 [선부논 동주라] 당뵈 가히 년소를 가뵈야이 녀기디 못홀씨로다(宣父猶能畏後生、丈夫未可輕年少) <古文眞實諺解 4 : 43>

19世紀の文献上の(20)の文章では、一音節の漢字「傲、屑、憐」が「오만하다(傲慢だ)」、「달갑다(満足だ)」、「불쌍하다(憐だ)」、二音節の漢字「不快」が「불쾌하다(不快だ)」などの形容詞一単語で表されず「副詞語+너지다」に、一音節の漢字「覺」が「〜と思う」を表している。

(20) ㄱ. 니 나히 일천 허 풍상을 오만니 녀기니 놓흔 줄기와 영기로은 가지 힘이 스스로 강허엿도다(吾年千載傲風雷霜、高幹靈枝力自剛) <啓明大 西遊記 21 : 100-64>

- ㄴ. 如也 ; 不快如也 ? 양어시 추탁하고 아니 머그려 흥거늘 빅공이 더욱 쾌히 아니 너겨 술을 자바흔 번 거후르고(楊御史還推辭理論. 白公因心下不快、拿起酒來、也不候楊御史、竟自一氣飲乾) <玉嬌梨 1 : 16>
- ㄷ. 亦如也、然也、与너겨同? 쇼데 지으려 흥니는 또 못 지을로다 흥니 이 글을 못 지오미 아니라 쇼데로 더즈려 흥가지로 흥믈 슬히 너기미라(及小弟是做、你又說不做. 這是明欺小弟不是詩人、不厝與小弟同吟) <玉嬌梨 1 : 17>
- ㄹ. 覺? 다박시 츠언을 듯고 더욱 이상히 너겨 다만 모호히 응답하며 누의 나려 차를 가질나 가디(茶博士聽了此言、更覺詫異、只得含糊答應、搭訕着下樓取茶) <忠烈俠義傳 11 : 27>
- ㄹ. 노야는 우리들의 이 한 목숨을 어엿비 네겨 다시 싱각호어라(老爺可憐我們的這一條性命再 // 想着罷) 원접스(遠接使) <華音撮要 56b>

このように、感情を表す漢字は形容詞一単語で表さず、「副詞語+너기다」という形態で表されていた。そして、第 4 章で考察した通り、中世の文法において、他動詞には接続しない「거」系列の語尾が「너기다」に接続し、「너기거시 놀」、「너기거늘」という形態が確認できた。つまり、現代の感情形容詞は「副詞語+너기다」で表され、形容詞として扱われていたが、時代とともにそれらは、「도히 너기다(良く思う)> 좋다(良い)」、「便安히 네기다(安らかに思う)> 편안하다(安らかだ)」、「괴로이 너기다(苦しく思う)> 괴롭다(苦しい)」のように感情形容詞として一単語で表現されることとなったと考えられる。現代の感情形容詞は一単語で「여기다」までを含むことになる。

7. まとめ

本研究は、朝鮮語において日本語の「思う」に該当する「여기다」について、中世から近代、そして現代へと通時的に、形態的、統辞的、意味的分析を実施し、その特徴を提示することを目的とした。そして、第 3 章の先行研究で指摘した部分について考察を行い、次の通り明らかにした。

まず、『국립국어원 우리말샘』、「어디메」から抽出した資料、연세 20 세기 한국어 말뭉치から収集した資料を基に考察を行った結果、이상익、서승완(2017)では、「여기다」が 15 世紀から 19 世紀には現れていなかったが、少数ではあるものの「여기다」は 18 世紀に現れ始めていたことがわかった。元々 15 世紀に「너기다」という形態であったが、その後 16 世紀に連綴表記「너기다」が現れ、18 世紀には分綴表記「넉이다」という形態が現れその形態が 19 世紀には主流となった。そして、19 世紀はそれ以外に「넉이다」なども含め非常に多くの形態

が存在する時期であり、現代に入っても初期のころは「넉이다」がしばらく主に現れていたが、1920年には「여기다」が6割に達し、その後1930年には9割を超え、現在はほぼ100%「여기다」を使用するに至っている。また、先行研究や『국립국어원 우리말샘』では見られなかった、重綴表記「넉기다」が近代前期と現代朝鮮語で、「넉기다」が近代後期から現代朝鮮語の文献で、「넉계다」が近代後期朝鮮語の文献で見られ、異形態として、「넉기다, 넉이다, 넉기다, 넉이다, 역이다, 네기다, 넉기다, 넉기뜨다, 넉계다, 넉기다」の存在を明らかにした。

次に、이은섭(2008)は、現代朝鮮語で「여기다」が形成する構文について、「-로」副詞語先行構文と副詞節先行構文の2つに分類し、全体が他動詞構文であると述べている。しかし、中世の文法において、「거」系列の連結語尾が自動詞だけではなく形容詞にも接続することから、15世紀、16世紀の文献に見られる「넉기거시늘」、「넉기거늘」は、他動詞「넉기다」としてではなく、副詞語と共に用い形容詞のような扱いであったか、あるいは形容詞を強調する役割だけをしていたと考えられる。

そして、李賢熙(2005)では中世朝鮮語「넉기다」の構文類型を11のパターンに分類し、目的語を持つ場合、目的語と「넉기다」の間に副詞語を統合させる構文類型が最も多いとし、そのパターンとして3つのパターンを提示していた。しかし、この3つのパターンに分類できない物があり、新たに「NP-를 ADP 넉교디 S' (ㅎ-)'形式」、「VP-고져 ADP 넉기-'形式」、「V-고 ADP 넉기(여기)-'形式」、「V-고 ADP 넉교디-'形式」、「ADJ-고 ADP 넉기(여기)-'形式」の追加が必要であることを明らかにした。

홍사만(1998,2003)では、15世紀以降「넉기다」が「넉교디」の形態以外で自動詞のように現れるものがあると述べていた。しかし、感情を表す漢字は形容詞一単語で表さず、「副詞語+넉기다」という形態で表されていたこと、中世の文法において、他動詞には接続しない「거」系列の語尾が「넉기다」に接続し、「넉기거시늘」、「넉기거늘」という形態が確認できたことから、現代の感情形容詞はかつて「副詞語+넉기다」で表され、自動詞としてではなく形容詞として扱われていたが、時代とともにそれらは、「도히 넉기다(良く思う)>좋다(良い)」、「편안히 넉기다(安らかに思う)>편안하다(安らかだ)」、「괴로이 넉기다(苦しく思う)>괴롭다(苦しい)」のように感情形容詞として一単語で表現されることとなったと考えられる。つまり、現代の一単語の感情形容詞は、中世における「副詞語+넉기다」である。李賢熙(2005)の、「넉기다」が目的語を持つ場合、目的語と「넉기다」の間に副詞語を統合させる構文類型が最も多かったということについても、このような理由からと思われる。また、中世から現代初期朝鮮語にかけ、いずれの時代においても、接尾辞「-이」が結合した副

詞語が最も多く、他の要素は 10%に達しないものがほとんどであった。そして、この副詞語を形成するのは、感情を表す形容詞からの派生副詞が大半であった。そして、現代中期以降も副詞語と結合する割合は多いが、それまでとは異なり、'-이/히' で作られた副詞語より「-게」の割合が多く、また「-게」が結合する形容詞は、感情を表すものではなく状態を表す形容詞であった。これは、現在は感情形容詞一単語で表されるものが、中世から近代朝鮮語にかけては「副詞語+너지다」でその意味を担っていたためであると思われる。

本研究は各時代の対象文献を幅広く設定し、非常に多くの文例から考察を行ったが、すべて文献であり、実際の言語活動ではないこと、語彙の使用基準や頻度については著者や編集者、あるいは翻訳者の影響があるという問題点がある。しかしながら、通時的な研究を行うためには、現時点ではこの方法しかない。今後、現代の口語における「여기다」の使用頻度や結合要素などを中心に研究をすすめ、最終的に指導方法へとつなげていきたい。

〈参考文献〉

■ 図書・論文

- 高明均 (2014) 『『馬經診解』語彙研究-17世紀近代朝鮮語の語彙の宝庫-』 関西大学出版部
- 高明均 (2020) 「漢字語의 한글表記와 類型에 관한 考察-『洪吉童傳』(昭和9年, 京城)을 中心으로-」 『外国語学部紀要』第23号, 関西大学
- 고영근・본관 (2011) 『우리말 문법론』 집문당
- 고영근 (2012) 『표준 중세국어문법론』 집문당
- 국립국어원 (2012) 『외국인을 위한 한국어 문법 2』 커뮤니케이션북스
- 박덕유・강미영 (2018) 『쉽게 풀어쓴 한국어 문법』 한국문화사
- 박영섭 (2012) 『한자 대역어의 통시적 연구』 도서출판 박이정
- 宋喆儀 (2008) 『國語의 派生語形成 研究』 國語學會
- 李基文 (1961) 『國語史概說』 民衆書館
- 이은섭 (2008) 「'여기-' 구문에 대하여 -구문 유형과 사유의 속성을 중심으로-」 『國語學』 第53輯, 국어학회, pp. 141-175.
- 李翊燮・李相億・蔡琬 (2010) 『韓國語概說』 大修館書店
- 이익환・이민행 (2005) 『심리동사의 의미론』 도서출판 연락
- 李賢熙 (1994) 『中世國語 構文研究』 新丘文化社
- 李賢熙 (2005) 「15세기 국어 동사 너기다 표제항의 용례 배열」 『한국사전학(5)』 한국사전학회, pp. 57-77.

- 鄭在永 (1996) 『依存名詞‘ㄷ’의 文法化』 太學社
- 허용·강현화·고명균·김미옥·김선정·김재욱·박동호 (2021) 『외국어로서의 한국어교육학 개론』 박이정
- 홍사만 (1998) 「중세·근대어 어휘의미 연구(5) -「사랑하다」, 「싱각하다」, 「너지다」의 띄미-」 『어문론총』 제 32 호, 경북어문학회
- 홍사만 (2003) 『국어 어휘의미의 사적변천』 한국문화사
- 홍윤표 (1994) 『근대국어연구(1)』 태학사

■ 辞書類

- 남광우 (1997) 『교학 고어사전』 교학사
- 박재연 (2010) 『고어대사전』 서문대학교 중한번역문헌연구소
- 이상억·서승완 (2017) 『조선시대어 형태 사전』 서울대학교출판문화원
- 劉昌惇 (1955) 『李朝語辭典』 延世大學校 出版部
- 한글학회 (1992) 『우리말 큰사전 4:옛말과 이두』 어문각

■ ウェブサイト

- 국립국어원 (2021) 『표준국어대사전』 2021 년 4 분기版, 국립국어원홈페이지, (2022 年 3 月 10 日取得,
https://stdict.korean.go.kr/search/searchView.do?word_no=456923&searchKeywordTo=3)
- 어디메 「한국어 고문헌 검색기」 어디메홈페이지, (2022 年 5 月 11 日取得,
<https://akorn.bab2min.pe.kr/>)

■ コーパスデータ

- 국립국어원 (2021) 「국립국어원 비출판물 말뭉치(버전 1.0)」 국립국어원홈페이지, (2021 年 8 月 19 日取得)
- 연세대학교 언어정보연구원 「연세 20 세기 한국어 말뭉치」 연세대학교 언어정보연구원 홈페이지, (2022 年 6 月 11 日取得,
<https://ilis.yonsei.ac.kr/corpus/#/search/TW>)

- 受付 : 2022 年 7 月 31 日
- 修正 : 2022 年 9 月 13 日
- 掲載 : 2022 年 9 月 30 日

【付録 1】

「어디메」の時代別検索対象文献

時代	文献名
15世紀	改刊法華經診解(2巻の文献)、救急簡易方(5巻の文献)、救急方診解(2巻の文献)、金剛經三家解診解(7巻の文献)、南明果繼頌診解、楞嚴經診解(10巻の文献)、東國正韻、杜詩診解(18巻の文献)、牧牛子修心訣、蒙山法語、般若心經診解、法華經診解(5巻の文献)、佛頂心陀羅尼經、四法語診解、三綱行實圖(3巻の文献)、三壇施食文、上院寺重創勸善文、釋譜詳節(9巻の文献)、禪宗永嘉集診解(3巻の文献)、詩釋義、神仙太乙紫金丹、新昌孟氏墓出土診簡、十玄談要解、佛說阿彌陀經、靈驗略抄、龍飛御天歌(10巻の文献)、圓覺經診解(12巻の文献)、月印釋譜(20巻の文献)、月印千江之曲、六祖法寶壇經診解、眞言勸供、訓民正音
16世紀	簡易辟瘟方、警民編、救荒撮要、内訓(4巻の文献)、老朴集覽、論語診解(4巻の文献)、大學診解、梅湖別曲、孟子診解、蒙山和尚六道普說、武藝諸譜、百聯抄解、翻譯老乞大(2巻の文献)、翻譯朴通事、翻譯小學(7巻の文献)、法集別行錄、分門瘟疫易解方、佛說大報父母恩重經、佛說長壽滅罪護諸童子陀羅尼經、書傳診解(5巻の文献)、石峰千字文、宣祖國文敎書、聖觀自在求修六字禪定、小學診解(6巻の文献)、續三綱行實圖、順天金氏墓出土診簡、新增類合、安樂國太子傳變相圖、安民學哀悼文、呂氏鄉約診解、牛羊猪染疫病治療方、迂濶歌、二倫行實圖、李應台墓出土診簡、自悼詞、正俗診解、中庸診解、瘡疹方撮要、天字文(光州版)、初發心自警文、七大萬法、太平詞、鶴峰金誠一診簡、孝經診解、訓蒙字會
17世紀	家禮診解 卷(10巻の文献)、警民編診解、勸念要録 全、金塘別曲 存齋歌帖、南征歌、南草歌、老乞大診解(2巻の文献)、蘆溪歌 蘆溪先生文集、陋巷詞 蘆溪先生文集、獨樂堂 蘆溪先生文集、東國新續三綱行實圖 三綱(23巻の文献)、東醫實鑑 湯液篇、痘瘡經驗方、慕夏堂述懷歌 慕夏堂實記卷之三、朴通事診解(3巻の文献)、辟瘟新方、丙子日記、鳳山曲(一名 天臺別曲) 零潭別集、龍湫遊詠歌 水南放翁遺稿、北關曲、分類杜工部詩(25巻の文献)、墳山恢復謝恩歌 清溪歌詞、莎堤曲、西宮日記、禪家龜鑑、船上歎 蘆溪先生文集、聖主中興歌、松江歌(2巻の文献)、詩經診解(20巻の文献)、新刊救荒撮要、新傳煮取焰焔方診解、語録(2巻の文献)、診解痘瘡集要(2巻の文献)、診解胎產集要、女訓診(2巻の文献)、譯語類解(3巻の文献)、練兵指南、嶺南歌、類合(2巻の文献)、逸民歌、立巖別曲、爲君爲親痛哭歌、周易診解(9巻の文献)、晉州河氏墓出土診簡、天字文(2巻の文献)、天風歌 存齋歌帖、捷解新語(9巻の文献)、出塞曲、火砲式診解
18世紀	家禮釋義、加邨申禁事目、改修 捷解新語(10巻の文献)、敬信録診釋、關東別曲[松江歌辭に収録]、勸禪曲持經靈驗傳、金剛別曲 明村遺稿、樂隱別曲 弄丸齋 歌詞集、論語栗谷先生診解(4巻の文献)、丹山別曲、大方廣佛華嚴經入不思議解脫境界普賢行願品、大學栗谷先生診解、同文類解、孟子栗谷先生診解(4巻の文献)、明義錄解(4巻の文献)、蒙語老乞大(8巻の文献)、蒙語類解(3巻の文献)、武穆王貞忠録(7巻の文献)、武藝圖譜通志診解 全、朴通事新釋診解(3巻の文献)、方言類釋(4巻の文献)、兵學指南(2巻の文献)、北征歌 適宜、北窟歌、三譯總解(10巻の文献)、賞春曲(不憂軒輯 卷二[歌曲])、小兒論、續明義錄診(2巻の文献)、續新基別曲、修善曲持經靈驗傳、新刊救荒撮要、新基別曲、新傳煮硝方、十九史略診解(2巻の文献)、樂學拾零、御製警民音、御製警世問答續錄診解(2巻の文献)、御製戒酒論音、御製内訓(3巻の文献)、御製百行原、御製賜畿湖別賑資論音、御製常訓診解、御製養老務頒行小學五倫行實鄉飲儀式鄉約條例論音、御製論(4巻の文献)、御製自省篇診解、御製濟州大靜旌義等邑父老民人書、御製祖訓診解、御製成鏡道南北關大小民人等論音、御製訓書診解、女四書診解(4巻の文献)、念佛普勸文、寧三別曲、伍倫全備診解(8巻の文献)、五倫行實圖 卷(5巻の文献)、優語類解(2巻の文献)、諭京畿(4巻の文献)、諭慶尙道(2巻の文献)、諭六邑民人等論音、諭諸道道臣論音、諭中外大小臣庶論音、類合(松廣寺版)、諭湖西大小民人等論音、諭湖南民人等論音、因果文彌陀懺抄、隣語大方(10巻の文献)、日東壯遊歌(4巻の文献)、字仙典則、龔說因果(2巻の文献)、製王世子冊禮後各道臣軍布折半蕩減論音、濟衆新編卷之八、種德新編診(4巻の文献)、重刊老乞大診解(2巻の文献)、中庸栗谷先生診解、增修無冤錄診解、地藏經診解、參禪曲持經靈驗傳、天字文(松廣寺版)、聞義昭鑑診解、捷解蒙語、八歲兒、合江亭船遊歌 存齋歌帖、型世言(4巻の文献)、曉諭論音、喜雪

19世紀	<p>歌曲源流、敬惜字紙文診解、京郷新聞、雇工歌 雜歌、雇工答主人歌 雜歌、古今歌曲 國語國文學資料叢書第5輯、過化存神、關東續別曲、關西別曲_岐峯集、關聖帝君五倫經(診解)、廣才物語、九雲夢、歸山曲 枕肱集、閨閣叢書 全、錦香亭記 1 (京板36張本)、南宮柱籍、南原古詞 (5卷の文献)、女士須知、大明英烈傳 (8卷の文献)、獨立新聞 (185卷の文献)、大方廣佛華嚴經[華嚴經疏鈔重刊助緣序]、每日新聞 (11卷の文献)、明聖經診解 全、牧童歌、蒙喻篇 上、夢中回心曲、夢幻歌 樂府(高麗大本)、夢幻別曲 樂府(高麗大本)、半回心曲 和請、謝氏南征記 (2卷の文献)、三國志 (3卷の文献)、三國志 (8卷の文献)、三説記、三聖訓經 全、西遊記 (2卷の文献)、聖教百問答、聖教切要、水南放翁歌 水南放翁遺稿、僧元歌、神學月報、沈清傳、御製諭大小臣僚及中外民人等斥邪論音、燕行別曲歌辭選、念佛歌、耶蘇聖教全書、月峰記 (2卷の文献)、月印千江之曲 和請、유옥역전傳、諭中外大小民人等斥邪論音、諭八道四都耆老人民等論音、醫宗損益附餘、李茂實千字文、易言診解 (4卷の文献)、蠶桑輯要、鄭壽景傳 筆写本、竈君靈蹟誌、註解千字文、主教要旨、周年瞻禮廣益 (2卷の文献)、甌南浦 木浦 各國租界章程、眞教切要、陳大房傳 (2卷の文献)、眞理便讀三字經、懲世否泰錄 (京板32張本)、草庵歌[感應篇]、春香傳、到命日記 韓国教会史研究所 影印本、太上感應篇圖説 (5卷の文献)、天路歷程 卷之上 (2卷の文献)、兎生傳、閨中謾錄 (3卷の文献)、韓佛字典、漢字用法、協成會會報、洪吉童傳(京板30張本)、興夫傳</p>
20世紀	<p>寶鑑 (4卷の文献)、部別千字文、邵康節 活字本、速修漢文訓蒙、(新訂)千字文、神學月報、歷代千字文、烈女春香守節歌 (2卷の文献)、正蒙類語、初學要選、토끼傳、八相歌</p>

【付録 2】

『李朝語辭典』、『古語辭典』、『고어대사전』의 引用文献

辞書名	「여기다」に該当する単語が使用された文献
李朝語辭典	月印千江之曲、楞嚴經諺解、苧溪 太平詞、月印釋譜、捷解新語、翻譯小學、杜詩諺解初刊、金剛經三家解、新增類合 下、法華經諺解法、金剛經諺解、小學諺解、禪家龜艦諺解 上、禪家龜艦諺解 下、敬信錄諺解、杜詩諺解重刊、三綱行實圖 烈、小學諺解、朴通事諺解初刊 上、東國新續三綱行實圖 忠、癸丑日記、閑中錄
古語辭典	龍飛御天歌、釋譜詳節、月印千江之曲上、訓民正音註解本、月印釋譜、楞解經諺解、法華經諺解、金剛經諺解 上、圓覺經諺解 序、宣賜內訓序、杜詩諺解初刊、南明集諺解 下、翻譯小學、龜艦諺解 下、捷解新語、倭語類解 上、明皇、同文類解上、女範1、桐華寺 王郎傳、蘆溪集 太平詞、龜艦諺解 上、敬信錄諺解、杜詩諺解重刊、三綱行實圖 烈、翻譯朴通事 上、新增類合 下、小學諺解、宣孟、松江歌辭 續美人曲、松江歌辭 星山別曲、東國新續三綱行實圖 忠、東國新續三綱行實圖 孝、女四書諺解、癸丑日記、閑中錄
고어대사전	啓明大 西遊記、宣祖國文教書、順天金氏諺簡、柳時定諺簡、王氏傳、古文眞實諺解、玉嬌梨、資治通鑑 西晉、資治通鑑 東晉、忠烈俠義傳、浩然齋 下、辛未錄、洛城、碧虛談關帝言錄、嚴氏孝門清行錄、尹河鄭三門聚錄、蔓橫清類、華音撮要、三國志、苦行錄

【付録 3】

『국립국어원 우리말샘』 여기다의 世紀別의 用例

世紀	形態	例文
15 世紀	너지다	내 이를 爲호야 어엿비 너겨 <<1446 訓民正音 2 ㄴ>> (번역: 내 이를 위하여 불쌍히 여겨.) 仁者는 님 어엿비 너기는 사르미니 <<1447 釋譜詳節 11:12 ㄱ>> 膠漆스 짜호로 히여 萬古애 雷陳을 重히 너기게 호디 말라 <<1481 杜詩諺解-初 20:31 ㄱ>>
16 世紀	너지다, 너지다	아비 罪 업시 주근 주를 설이 너겨 가슴 두드려 울오 飲食을 아니 먹고 주그니 <<1514 續三綱行實圖 孝:32 ㄴ>> 네 닐음이 올타 나도 무수매 이리 너기노라 <<1510 年代 翻譯

		<p>老乞大 上:11 ㄱ></p> <p>제 아버지 죄 아닌 이레 주근 주를 설이 너져 벼슬 아니코 살며 셔 <1518 翻譯小學 9:26 ㄴ-27 ㄱ></p> <p>想 너길 상 <1576 新增類合 下:11 ㄱ></p>
17 세기	<p>너기다, 너기다</p>	<p>아버이 저머셔 홀어미 된 줄를 어엿비 너져 남진 얼오려 혼대 <1617 東國新續三綱行實圖 烈 2 ㄴ></p> <p>또 寧호면 비록 兄弟 이시나 友生만 곁티 너기디 아니호눗다 <1613 詩經諺解 9:7 ㄴ></p> <p>이미 나를 嘉히 아니 너길시 能히 旋濟티 몬호라 <1613 詩 經諺解 12 ㄴ></p> <p>膠漆入 짜호로 히여 萬古애 雷陳을 重히 너기게 호디 말라 <1632 杜詩諺解重刊 20:31 ㄱ></p>
18 세기	<p>너기다, 넉이다, 너기다, 넉이다, 여기다</p>	<p>朝廷이 重히 너기논 바논 이 文章이니 <1721 伍倫全備諺解 3:1 ㄱ></p> <p>오직 어딘 사롬이야 능히 사롬을 도히 넉이며 능히 사롬을 아 쳐히 넉인다 호니 <1764 御製祖訓諺解 22 ㄴ></p> <p>女戒에 곁오디 가난호니는 가난롬을 편안히 너기고 가옴여니 는 가옴열믈 경계홀 디니 <1737 御製內訓 1:24 ㄱ-ㄴ></p> <p>동넉 빅성이 곁향을 브리기를 수이 넉이기는 <1783 御製論原 春道嶺東嶺西大小士民綸音 9 ㄱ></p> <p>불상이 여겨 갑술 나초와 주고 못되게 말지니라 <1796 敬信 錄諺釋 67 ㄴ></p>
19 세기	<p>너기다, 넉이다, 너기다, 넉이다, 역이다</p>	<p>상제 아롭다이 너기샤 너를 혼 벼슬과 돈 오만 냥을 주시느니 라 <1852 太上感應篇圖說 1:07 ㄴ></p> <p>고이히 넉이고 또 혼 그 뜻을 아지 못호더니 <1852 太上感應 篇圖說 3:04 ㄴ></p> <p>과부를 불상이 너기고 곤혼 니를 구호며 곡식을 중이 너져 복 을 앗기며 <1880 三聖訓經 5 ㄱ></p> <p>외로운 니를 불상이 넉이며 잘못된 니를 용셔호며 <1876 南 宮桂籍 5 ㄴ></p> <p>변괴가 빅출호야 아래 스롬이 그 우홀 업슈이 역이미 지앙이 육친에 맞쳐셔 <1882 論八道四都耆老人民等綸音 2 ㄱ></p>

【付録 4】

박영섭 2012 『한자 대역어의 통시적 연구』

「여기다」に該当する漢字一覽

漢字	意味	例文
見	보다,나토다,너기다,시방,얹피,번들 다,소견	하늘이 어엿비 너기샤(天可憐見) < 翻譯老乞大 上 2 >
憐	너기다	오히려 어엿비 너기샤물 민즈와(猶恃憐憐) < 楞嚴經諺解 1-76 >
憐	수랑ㅎ다,어엿비너기다,돛오다,슌 다,슬프다,돛오다,愛憐ㅎ다,어엿브 다	오히려 어엿비 너기샤물 만즈와(猶恃憐憐) < 楞嚴經諺解 1-76 > 마툴 다오매 굴꿇 개야밀 어엿비너 기고(築場憐穴蟻) < 杜詩諺解初 7.18b > 일편되어 나그내를 어엿비너기고(偏憐客) < 翻譯老乞大 上 37 >
想	스치다,想, 너기다,思想,싱각	무슴 사모미 다민데 뜯 너기미니 이런드로(爲心特浮想耳故) < 楞 嚴經諺解 1-65 >
傲 (傲)	므더니 너기다,놈업시오다,傲慢	서르 므더니너교문(相傲) < 楞嚴 經諺解 9-78 >
擬	너기다	엇데 써 무슴매 너기료(何用擬心) < 楞嚴經諺解 2-84 > 싸혀 더더 니르고져 너기디 아니ㅎ 노라(撥棄不擬道) < 杜詩諺解初 22.4a >
誕	나다,너기다	政術란 사오나오물 돌히 너기고(政 術甘踈誕) < 杜詩諺解初 20.25b >
憫然	어엿비 너기다 > 불쌍히 여기다	憫然은 어엿비너기실씨라 < 訓民 正音 2 >

코로나19 상황과 한국 유학에 관한 고찰

-일본 N 대학교의 사례를 중심으로-

최 은경 (나가사키외국어대학교)

<요지>

본고는 한국어 학습자들의 한국 유학 지도에 관한 단서를 찾기 위하여 2021년도 가을학기를 기준으로 조사 시점에 한국에서 유학 중인 일본어 모어 화자 27명을 대상으로 실시한 설문 조사 결과를 바탕으로 작성되었다. 조사 항목은 유학 중인 학생들이 한국에서 수강하는 수업 종류, 수업 실시 형태, 코로나 상황에 대한 불안 등에 관한 것이었다. 조사 참가자 중 14명이 학부 수업만을 수강하고 있었으며 그 외 학생들은 학부 수업과 어학당 수업을 모두 듣는 것으로 나타났다. 또한 학부, 어학당 수업 모두 절반 정도가 온라인으로 실시되었음을 알 수 있었다. 마지막으로 코로나로 인해 학생들은 한국인과의 교류 기회가 감소한 것을 가장 힘들어하는 것으로 드러났다.

키워드 일본어 모어 화자, 한국어 학습자, 한국 유학, 코로나의 영향,
해외유학 지도

1. 들어가며

2020년경부터 시작된 신종 코로나 바이러스 (이하 코로나)가 2년이 지난 지금도 여전히 그 위세를 떨치고 있다. 본고에서 주로 다루는 N 대학의 경우 2019년에 유학을 시작한 학생들은 모두 조기귀국을 하였고 2020년도에는 교환학생 파견이 중지되었다. 가을학기부터는 한국 정부 초청 국비 유학생에 합격한 학생에 한해 매우 제한적으로 유학 제도를 다시 시작하였다.

2021년도에는 한국을 제외한 국가로는 유학이 금지되었으며 2022년도 부터는 중국을 제외한 유럽권, 영미권에도 유학이 가능해지게 되었다. N 대학의 경우 외국어를 전공하는 학생들이 많고 입학 초기부터 유학을 희망하며 4년 간의 수학

계획을 정하는 경우가 결코 드물지 않다. 한국어 전공의 경우 입학 초기부터 한국 유학을 희망하는 학생들이 타 언어에 비해 특히 더 많았으며 그 중 60% 이상이 한국으로 유학을 가는 상황이었다. 그러나 코로나로 인해 교환학생 파견이 중지되면서 한국어 학습에 흥미를 잃은 학생들도 생기게 되었고 일부 학생들은 졸업을 유예하거나 수학 계획을 변경하여 파견유학이 재개된 2021년도에 유학을 시작하기도 하였다.

본고에서 대상으로 하는 2021년도 가을학기에 한국에서 유학을 한 학생들은 모두가 처음으로 경험하는 코로나 감염 방지를 위한 자가격리, 원격 수업 등을 경험하며 많은 혼란 속에서도 유학을 감행한 사례라고 할 수 있다. 앞으로는 코로나 감염 방지를 전제로 한 유학 업무가 필수적이라고 생각되므로 본 연구에서는 2021년도에 한국에서 유학 한 학생들을 대상으로 한 조사를 통해 향후 학생들의 유학 업무 지도에 관한 실마리를 찾고자 한다.

2. 선행연구

최상은, 김병찬, X. Fu (2021)은 코로나로 인해 유학생들의 학업 부적응 사례가 더 많아졌다고 밝혔다. 특히 한국어 능력이 충분하다고 생각되는 학생조차도 마스크로 인해 입모양이 보이지 않거나 원격 수업 때문에 교우관계를 충분히 형성할 수 없어 수업 내 지시를 따라가기 어렵다고 밝힌 경우가 많다고 보고하였다.

손한결, 손복은 (2021)은 온라인으로 교양 수업을 이수하는 유학생들을 대상으로 조사를 실시하였다. 그 결과 비대면 수업 실시로 인해 유학생들이 교수와 상호작용을 하기 어려워진 점, 인터넷이나 컴퓨터 등 수업 수강에 필요한 학습 환경을 준비하기가 쉽지 않다는 의견이 다수 수집되었다고 밝혔다. 책리하, 박창언, 지미영 (2021) 역시 코로나에 대한 불안감이 낮을수록 온라인 수업에서의 학습 참여도와 만족도가 높다고 기술한 점을 미루어 보았을 때 많은 유학생들의 학업에 코로나가 좋지 않은 영향을 끼쳤음을 알 수 있다.

장이츠, 김민아 (2021) 또한 유학생들이 코로나로 인해 수업은 물론 생활 필수품의 구입까지 온라인으로 해야 하는 상황에 매우 큰 스트레스를 느끼고 있다고 보고하였다. 스트레스의 원인은 한국어의 한계나 인터넷에 관련된 기술적인 문제를 비롯하여 사회적 관계 단절로 인해 유학생들이 외로움을 느끼는 것에 있다고 하였다. 더불어 수업 외에서 배울 수 있는 다양한 기회를 놓치고 있다는 아쉬움을 토로하는 유학생의 의견도 덧붙이며 이와 같은 문제를 해결하기

위해 유학생들을 위한 상담 서비스를 제공하거나 멘토링 서비스를 제공하는 것을 제안한 바 있다.

양영하, 최명숙 (2021)은 한국 S 대학의 유학생 상담센터의 사례를 바탕으로 온라인 수업에서의 언어, 기술적 능력 부족, 교우 관계의 문제, 활동범위 제한 등에 대해 상담센터에서 전문 심리상담사와의 상담을 하는 것뿐만 아니라 또래와의 상담, 온라인 경연대회 참여 등의 기회를 마련하여 문제 해결을 꾀하였다고 밝혔다. 유학생의 심리적인 부분에 대한 지원 이외에 코로나와 직접적으로 관련이 있는 지원에 대해서는 조경원, 이상대, 김수정, 김민경 (2021)이 부산 지역에서의 코로나 대처에 대해 조사한 내용을 참고할 수 있다. 이 선행연구에서는 유학생에 대한 지원이 일관되지 않은 점을 지적하며 유학생을 담당할 수 있는 언어적 능력과 동시에 감염병에 대한 전문적인 지식을 갖춘 전문인력 구축이 필요하다고 주장하였다. 또한 구체적인 매뉴얼 개발 및 보급, 기숙사 내에 추가로 격리시설을 마련하여 2차 감염을 방지해야 한다고 밝혔다.

선행연구의 내용을 종합해 보면 코로나로 인해 유학생들의 학업에 많은 제한이 생겼다는 점을 알 수 있다. 특히 비대면 상호작용으로 인한 언어, 기술적 문제와 사회적 고립이 주된 문제라고 하겠다. 그러나 현재 한국에 있는 유학생들 중 중국 학생들의 비율이 많은 관계로 앞에서 소개한 대부분의 선행연구들이 중국 유학생을 대상으로 하고 있다는 점과 학부 재학생 또는 대학원 재학생이 조사 대상이라는 점은 본 연구와 다르다고 하겠다. 본고의 연구는 일본 대학에 소속되어 있는 학생들이 한국으로 유학을 간 상황을 대상으로 하였기 때문에 선행연구들과 상이한 결과가 도출될 가능성이 있다고 생각된다.

3. 분석

3.1 조사 방법

본 연구의 조사는 2022년 2월 7일부터 3월 7일까지 실시되었으며 모두 N 대학에 재학 중인 27명의 학생들을 대상으로 하였다. 참가자는 모두 2021년도 가을학기를 기준으로 한국에서 유학 생활을 하였고 수업과는 별개로 진행하였기 때문에 연구자 소속기관의 개인연구비로 소정의 사례금을 지급하였다. 조사 실시 전 연구자 소속기관의 윤리 위원회를 통해 조사 실시 허가를 받았다 (허가번호 021-007). 조사 전 본 연구에 관해 연구자가 연구 목적에 대해 충분히 설명하고 익명으로 처리된 데이터가 논문에 게재될 수 있음을 밝혔다. 조사는 모두 참가자의 동의를 얻은 후 실시되었으며 Google Form을 통해 진행되었다. 조사

항목은 학년 및 전공, 유학 기간, 유학을 결심하게 된 계기, 현재 거주 상황, 수업 이수 상황, 코로나 관련 상황에 관한 항목이었고 질문 및 응답은 모두 일본어로 실시되었다.

3.2 조사 결과

3.2.1 조사 협력자 정보

조사 협력자 27명의 학년과 전공 정보는 아래 표1에 정리하였다.

표1 조사 협력자의 학년 및 전공 (2021년도 가을학기 기준)

	1학년	2학년	3학년	4학년
한국어 전공 (명)	0	12 (5)	11	3
한국어 비전공 (명)	0	0	1 (영어)	0

상기 표1을 보면 12명이 2학년, 12명이 3학년, 3명이 4학년인 것을 알 수 있다. 단기 어학 연수를 제외한 N 대학의 유학 프로그램은 일반적으로 2학년 가을학기부터 참여할 수 있으므로 1학년이 없는 것은 당연한 결과라 할 수 있겠다. 이 중 3학년 11명, 4학년 3명 중 일부 학생들은 2019년도 가을 학기에 교환과건유학을 다녀왔으나 코로나로 인해 중도 귀국한 후 다시 유학을 시작한 학생들로 유추된다.

학생들의 전공을 살펴보면 조사 협력자 중 단 1명만이 영어를 전공하는 학생으로 한국어 비전공자이고 나머지 26명은 한국어 전공자임을 알 수 있다. 2학년 12명 중 괄호 안에 표기된 5명의 학생은 입학 당시 영어를 전공하는 학생들이었으나 한국 유학 시작 전 한국어 전공으로 전과를 한 학생들이며 본고에서는 이 학생들도 한국어 전공으로 분류하였다. 이처럼 한국 유학을 가는 학생들 중 대부분이 한국어 전공이라는 점은 N 대학이 가지는 특수한 경향이라고 할 수 있겠다. 이어서 학생들의 유학 기간에 대해 표2를 살펴 보고자 한다.

표2 조사 협력자의 유학 기간 (2021년도 가을학기 기준)

유학 시작 시기	한국 체재 기간	인원 (명)
2021년 가을학기	6개월 미만	16
2021년 봄학기	6개월 이상 1년 미만	6
2020년 봄학기	1년 이상 2년 미만	4
2019년 봄학기	2년 이상	1

먼저 N 대학의 유학 프로그램은 귀국 후 N 대학에서 수학이 필요한 프로그램과

그렇지 않은 프로그램으로 나눌 수 있다. 귀국 후 N 대학에서 수학하는 프로그램에는 6개월(한 학기) 또는 1년(두 학기) 동안 유학할 수 있으며 매년 가을학기에 유학을 시작하는 교환과건유학, 한국 정부 초청을 받아 봄학기 또는 가을학기부터 1년 동안 과건되는 국비유학이 있다. 이러한 프로그램들은 유학만으로는 졸업에 필요한 학점을 모두 취득하기 어렵기 때문에 유학 종료 후 귀국하여 N 대학에서 나머지 학점을 취득해야 졸업할 수 있다.

반면 N 대학의 이중학위 프로그램은 N 대학에서 2년 동안 수학하고 3학년이 되는 시점에 유학을 가므로 대부분 봄학기에 출국한다. 3학년부터 2년을 자매협정대학에서 수학한 후 두 학교의 졸업장을 취득할 수 있으며 유학 기간 동안 졸업에 필요한 학점을 모두 취득할 수 있기 때문에 유학 종료 후 반드시 귀국해야 하는 것은 아니다. 위에서 언급한 N 대학의 유학 프로그램을 기간별로 정리하면 6개월, 1년, 2년이라고 할 수 있겠다.

N 대학의 유학 프로그램 기간과 상기 표2의 유학 기간을 비교해보면 앞서 기술한 것과 같이 N 대학은 2019년도 가을학기에 과건한 교환학생들을 2020년도 봄학기 시작 전 모두 귀국 조치하였기 때문에 현재 유학 중인 학생들 중 2019년 봄학기에 유학을 시작한 1명은 이중학위 프로그램 대상자임을 알 수 있다. 또한 2021년도 가을학기를 기준으로 하여 유학 기간이 1년 이상 2년 미만인 4명 역시 유학 기간이 1년을 넘는 점을 고려하였을 때 이중학위 프로그램 중인 학생임을 유추할 수 있다. 2019년과 2020년에는 교환과건 제도를 일시중지 하였으므로 가을학기부터 유학을 시작한 학생들이 없는 것도 확인할 수 있다.

반면 2021년 봄학기부터 유학을 시작한 6명의 학생은 한국 정부 초청 국비 유학생으로 특별 과건된 학생과 이중학위 프로그램 학생이 모두 있을 것으로 추측된다¹. 조사 협력자 중 가장 많은 16명 역시 한국 체재 6개월 미만으로 코로나 사태 후 한국 유학이 재개되자마자 과건된 학생들이나 교환과건 학생과 국비 유학생 모두 포함되어 있을 것으로 생각된다.

3.2.2 유학을 결심하게 된 계기

유학 계기에 대하여 ‘韓国に留学しようと思ったきっかけは何ですか。(한국 유학을 결심한 계기는 무엇입니까?)’ 라는 질문에 대해 자유 서술형으로 응답을

¹ N 대학에서는 2020년 가을학기에도 한국 정부 초청 국비 장학생에 한하여 학생들을 과건하였으나 2021년 가을학기를 기준으로 한 시점에서는 이미 유학을 끝내고 귀국하였기 때문에 본 조사에서는 제외되었다.

² 본 조사는 앞에서 언급한 대로 일본어 모어 화자를 대상으로 하였기 때문에 모두 일본어로 진행되었으나 본고가 한국어로 집필된 점을 고려하여 한국어 번역을 추가로

수집하였다³.

가장 많이 사용된 단어는 ‘韓國語 (한국어)’로 27명 중 18명의 학생들이 기입하였다. 한국어 실력을 향상시키기 위해서, 한국어를 공부하고 싶어서 등 한국어를 공부하고자 하는 의지를 유학 계기로 응답한 학생들이 가장 많았다. 다음으로 많이 사용된 단어는 ‘現地 (현지)’로 한국 현지에서 공부하고 싶어서, 현지에서 살아남기 위해서 등을 유학 계기로 서술한 학생들이 11명 있었다.

반면 취직에 유리하기 때문에, 장래를 위해서 등의 이유로 유학을 결심했다고 답변한 학생은 단 3명에 지나지 않았다. 그 외 추가로 ‘特別經驗 (특별한 경험)’이라는 단어를 사용한 학생을 2명 찾아볼 수 있었다. 이를 통해 학생들 중 일부는 유학이 일반적인 것은 아닌 특별한 경험이라고 인식하지만 많은 학생들은 유학 가는 것이 취직 또는 미래를 위해 큰 도움이 된다고 생각하지 않는 경향이 있다는 것을 확인할 수 있었다. 또한 한국어 학습, 현지에서의 생활 등에 관한 서술이 주로 많은 것을 통해 학생들의 유학 계기가 주로 학습에 중점을 두고 있는 것을 알 수 있다. 단, 본 연구에서 실시한 조사에서는 유학 계기를 자유 서술형으로 수집하였기 때문에 학생들이 기입하지 않은 부분에 대해 추론하기 어렵다는 한계가 있다. 향후 계속해서 조사를 실시할 때에는 이번 조사에서 수집된 응답을 바탕으로 선택지 등을 활용할 필요가 있을 것으로 생각된다.

3.2.3 주거 상황

조사 대상자 27명 중 21명은 파견 대학교의 기숙사에서 거주한다고 응답하였고 나머지 6명은 기숙사 이외의 곳에 거주한다고 응답하였다. 기숙사 이외에 거주하는 6명의 학생 중 기숙사가 제공됨에도 불구하고 본인의 의지로 따로 거주하는 학생은 2명에 불과하였다. 나머지 4명은 서울 지역에서 유학 생활을 하는 학생들로 자매협정교의 기숙사 수용인원이 충분하지 않아 어쩔 수 없이 본인이 주거 시설을 찾아야 했으며 한국어 실력 부족, 한국 부동산 상황에 대한 정보 부족과 더불어 코로나 상황이 겹쳐 집을 구하기가 매우 어려웠다고 밝혔다.

한국 대학교의 기숙사 부족 문제는 매년 대두되고 있으나 2021년도에는 코로나로 인해 기숙사의 인원 제한 등으로 평소보다 더욱 어려운 상황이었다는 것으로 추측된다. 또한 한국 대학교 주변 원룸 가격이 대부분 비싼 편임에도

기입하였다.

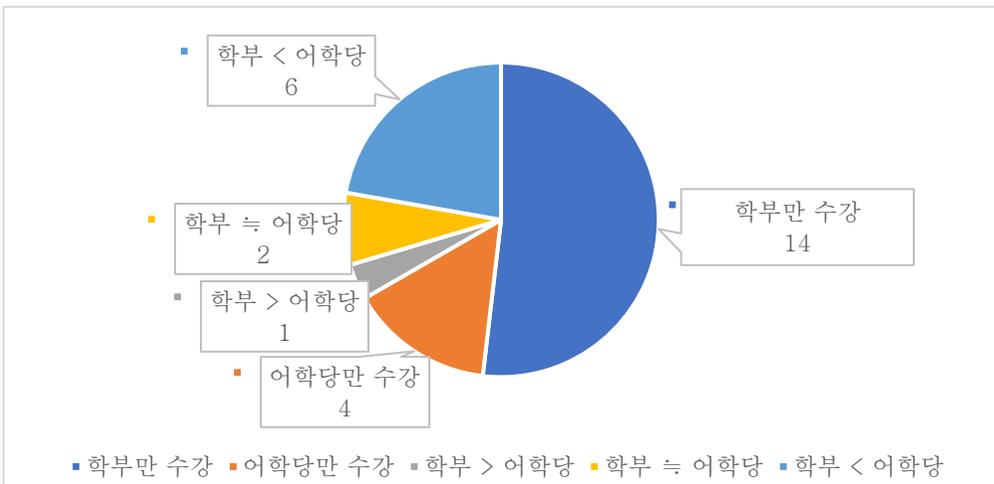
³ 학생들 중 유학 계기를 서술할 때 ‘한국어’, ‘현지’ 라는 단어를 모두 사용한 학생들이 다수 있어 복수 응답으로 처리하였기 때문에 본 설문문의 응답 수는 전체 참여자 27 명보다 많다는 점을 밝힌다.

불구하고 수요가 많아 한국 학생들조차 입주하기 어려운 점을 감안하면 향후 N 대학에서 서울 지역의 자매협정교로 파견되는 일본 학생들의 주거 시설을 찾는 데에 소속 대학에서 많은 지원을 해야 할 필요가 있다고 하겠다.

3.2.4 한국 대학에서의 수업 관련

2021년도 가을학기를 기준으로 하여 학생들이 수강한 수업의 비율을 살펴보면 약 50%가 넘는 학생들이 학부 수업만을 들었다고 응답한 것을 알 수 있다. 한국 정부 초청 국비 장학생의 경우 학부 수업만을 들어야 하는 규정이 있기 때문에 이에 해당하는 학생들이 학부 수업만을 들었다고 응답한 것이라고 추측할 수 있다. 다만 국비 유학생이 아닌 경우라고 하더라도 학생이 파견된 학교에 본인의 한국어 능력에 맞는 어학당⁴ 수업이 없거나 학생 본인에게 필요한 학점이 어느 정도인지에 따라 학부 수업만 수강한 학생들도 일부 존재할 가능성이 있을 것으로 예상된다. 자세한 내용은 아래 그림1에 정리하였다.

그림1 조사 협력자의 수업 수강 비율 (2021년도 가을학기 기준)

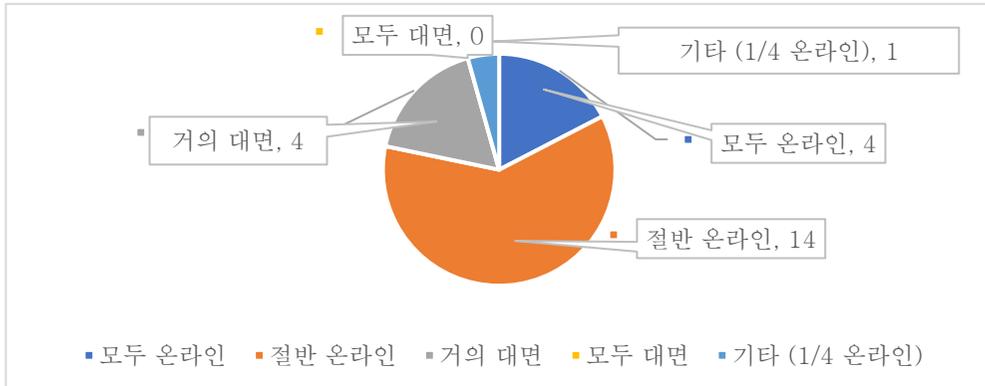


상기 그림1을 살펴보면 학부 수업만 수강했거나 학부 수업을 어학당 수업보다 더 많이 수강했다고 응답한 학생은 전체 27명 중 15명이고 어학당 수업만 수강했거나 어학당 수업을 학부 수업보다 더 많이 수강했다고 응답한 학생은 전체

⁴ 한국어 교육원, 한국어학당 등 각 대학교마다 명칭이 조금씩 다를 수 있으나 학부 수업 이외에 외국인 유학생의 한국어 능력 향상을 위해 별도 개설된 과정을 본고에서는 모두 ‘어학당’이라고 지칭하겠다.

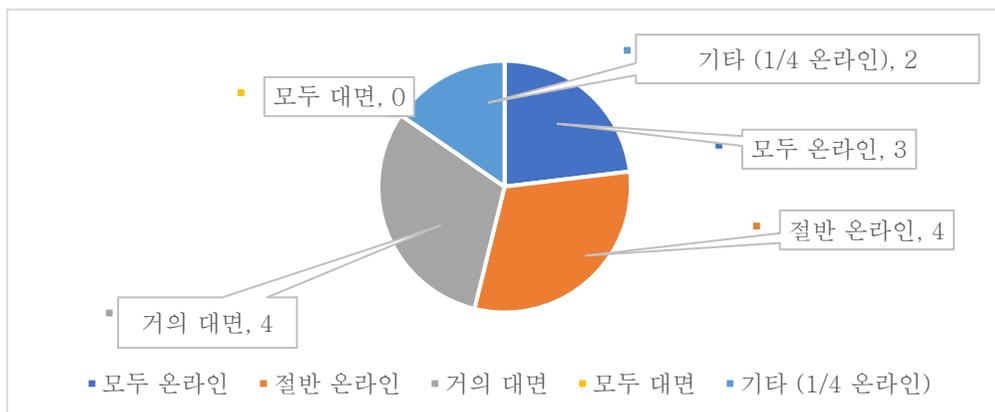
27명 중 10명인 것을 알 수 있다. 어학당 수업만 수강했다고 응답한 4명을 제외한 23명은 그 비율은 각각 다르지만 학부 수업을 최소 1개 이상 수강했다고 유추할 수 있다. 다음은 코로나 상황에서 학생들이 수강한 학부 수업의 실시 형태는 어떠한지 아래의 그림2를 통해 알아보겠다.

그림2 조사 협력자의 학부 수업 형태 (2021년도 가을학기 기준)



조사 참가자 중 학부 수업만을 들었다고 밝힌 14명을 포함하여 총 23명이 학부 수업 실시 형태에 대해 응답하였다. 학생들이 수강한 학부 수업 중 모두 대면으로 실시된 수업은 전혀 없었고 거의 대면으로 실시되었다는 응답은 4명에 불과했다. 가장 많은 응답 수는 절반 정도 온라인으로 실시된 수업이라는 것을 알 수 있다. 이어서 어학당 수업의 실시 형태는 어떠한지 다음 그림3을 통해 살펴보겠다.

그림3 조사 협력자의 어학당 수업 형태 (2021년도 가을학기 기준)



앞서 그림1에서 학부 수업만 들었다고 밝힌 14명을 제외한 13명을 대상으로 어학당 수업의 실시형태에 관해 조사하였다. 그 결과 어학당 수업도 학부 수업과 마찬가지로 모두 대면으로 실시된 수업은 없었으나 거의 대면으로 실시되었다는 응답이 4명, 절반 정도 온라인으로 실시되었다는 응답이 4명, 모두 온라인으로 실시되었다는 응답이 3명이었다.

결과를 종합해 보면 학부 수업과 어학당 수업 모두 온라인만으로 실시하거나 또는 온라인과 대면 형태를 병합하여 실시하는 형태가 가장 많은 것을 알 수 있는데 이는 일본 내 2021년도 가을학기와 별반 다르지 않았다고 할 수 있겠다.

이어서 조사 협력자들이 느낀 학부 수업의 난이도에 대해 조사한 결과를 그림4를 통해 알아보겠다.

그림4 조사 협력자의 학부 수업 체감 난이도 (2021년도 가을학기 기준)

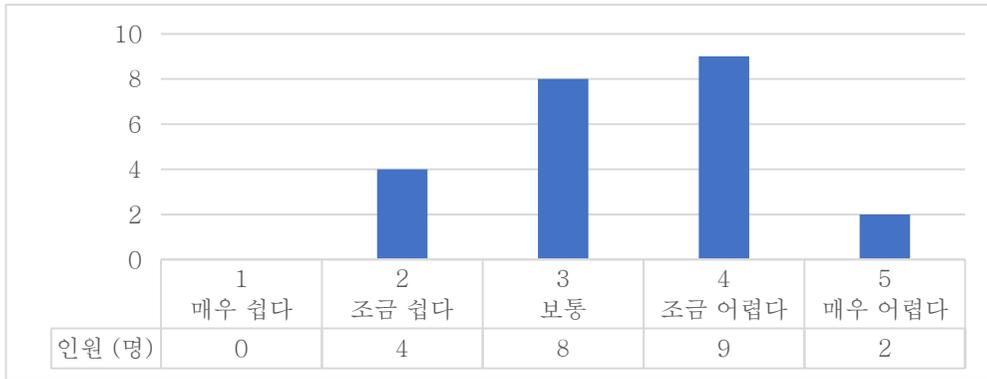


그림4는 학부 수업을 들은 총 23명의 학생들을 대상으로 학부 수업이 얼마나 어려웠는지 5점 척도로 질문한 결과를 정리한 것이다. 학부 수업이 매우 쉽다고 대답한 학생들은 전혀 없었고 보통이라고 응답한 학생이 8명이었다. 조금 어렵다고 응답한 학생은 9명으로 가장 많았으며 체감 난이도의 평균 점수도 3.39로 나타나 이와 같은 경향이 잘 반영되어 있는 것을 알 수 있었다. 그렇다면 어학당 수업의 체감 난이도는 어떠했는지 다음 그림5를 통해 살펴보겠다.

그림5 조사 협력자의 어학당 수업 체감 난이도 (2021년도 가을학기 기준)

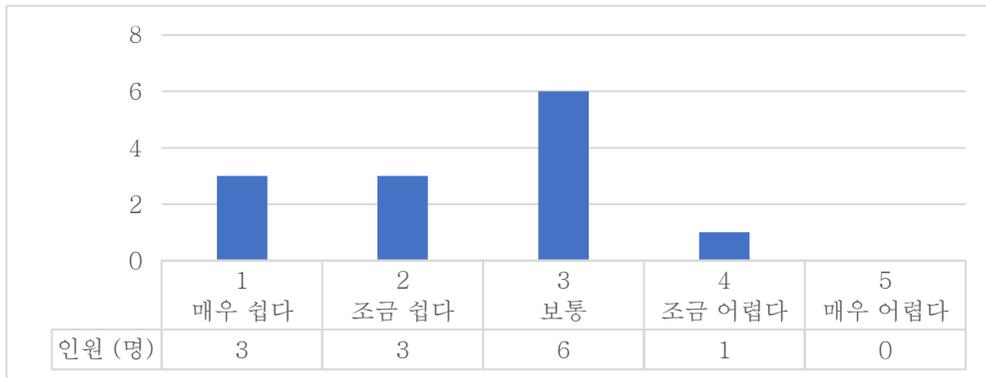


그림5를 보면 어학당 수업을 들은 13명의 학생을 대상으로 체감 난이도를 조사한 결과 매우 어렵다고 응답한 학생이 0명으로 나타나 학부 수업과 대조적임을 알 수 있었다. 매우 쉽다고 응답한 학생이 3명, 조금 쉽다고 응답한 학생이 3명으로 이를 합치면 보통이라고 응답한 학생과 동일한 6명이었다. 반면 조금 어렵다고 응답한 학생은 1명에 지나지 않았고 체감 난이도의 평균 점수도 2.38로 나타나 이와 같은 경향이 잘 반영되어 있다고 할 수 있겠다.

결과를 종합해 보면 학생들은 학부 수업에 비해 어학당 수업의 난이도를 더 낮게 인식한다는 것을 알 수 있다고 하겠다. 그러나 본 조사에서는 학부 수업만을 듣는 학생이 다수 존재하기 때문에 두 집단을 비교하기에는 한계가 있다는 것을 밝힌다. 또한 학생들의 체감 난이도와 수업 실시 형태 역시 관련성을 찾기 어려우므로 향후 수업 실시 형태를 변수로 하지 않는 설문으로 조사를 계속할 필요가 있다고 하겠다.

3.2.5 코로나 관련 상황

조사 협력자에게 코로나로 인해 힘든 점이 무엇인지 동일한 선택지를 복수 응답 가능한 설문과 단일 선택 설문으로 나누어 질문하였다. 그 결과를 정리하면 다음 표3과 같다.

표3 조사 협력자들이 코로나로 인해 힘든 점에 대한 조사 결과

선택지 내용	복수 응답 가능 (명)	단일 선택 (명)
한국인과의 교류기회 감소	24	15
자신의 코로나 감염 위험	21	4
온라인 수업 실시	15	4
외출 기회 감소	8	1
경제적 부담 증가	7	2
기타	1	1

표3을 보면 자신의 코로나 감염 위험이나 온라인 수업 실시는 다른 요소들과 더불어 힘든 점에 속하기는 하나 가장 힘든 점이라고 응답한 학생이 각각 4명인 것을 알 수 있다. 복수 응답, 단일 선택 모두 학생들이 코로나로 인해 힘들다고 생각하는 점이 한국인과의 교류기회가 감소하는 것이라고 응답한 학생이 가장 많은 것으로 미루어 보았을 때 코로나로 인해 학생들을 제일 힘들게 하는 요소는 역시 한국인과의 교류 기회 감소인 것으로 추측할 수 있다. 그 외 제출 서류가 늘어난 점, 비자 취득의 어려움이 기타 의견으로 제시되었다.

양영하, 최명숙 (2021)은 코로나로 인해 활동범위가 제한되는 것에서 비롯되는 스트레스가 유학생들의 상담 사례 중 하나임을 밝혔다. 최상은 외 (2021) 역시 코로나로 인해 유학생들이 자신의 감염에 대한 두려움과 더불어 주변과의 교우 관계에 대해 많은 어려움을 겪는다고 언급하였다. 장이츠, 김민아 (2021)은 이러한 주변과의 교류 감소로 유학생들이 외로움을 느끼게 되어 학업 수행에 많은 어려움이 있다고 보고한 바 있다. 본 연구 또한 이러한 선행연구들과 유사한 맥락이라고 할 수 있겠다.

이어서 학생들의 한국 입국 시 자가격리에 관해 조사한 결과를 알아보겠다. 학생들의 자가격리 기간은 한국 입국 후 2주일이었으나 파견학교에 따라 기숙사에 들어가기 전 자가격리를 3일에서 1주일 정도 추가로 실시한 학교도 있다고 응답하였다. 또한 대부분 자가격리 기간 동안 격리 시설에서 준비된 식사로 끼니를 해결했다는 응답을 확인할 수 있었다. 자가격리 기간 중 힘들었던 점에 대하여 동일한 선택지로 복수 응답 가능과 단일 선택으로 조사한 결과는 다음 표4와 같다.

표4 조사 협력자들이 자가격리로 인해 힘든 점에 대한 조사 결과

선택지 내용	복수 응답 가능 (명)	단일 선택 (명)
외출할 수 없는 점	13	6
혼자 있다는 점	8	3
인터넷 환경이 충분하지 않은 점	7	5
자가격리 비용이 비싼 점	9	5
자가격리 시설이 만족스럽지 않은 점	7	1
기타 ⁵	6(3)	7(3)

표4를 살펴보면 복수 응답과 단일 선택 모두 외출할 수 없는 점이 학생들에게 가장 힘들었던 점으로 인식되고 있음을 알 수 있다. 이에 반해 혼자 있다는 점은 단일 선택보다 복수 응답에서 더 많은 학생들의 응답이 있었던 것으로 미루어 보아 혼자 있는 것보다는 자가격리 비용이 고가인 점이 학생들의 부담을 키운 것으로 보인다. 복수 응답의 경우 고가의 비용을 지불하였음에도 불구하고 시설에 만족하지 못한 학생들이 일부 있는 것으로 보이지만 실제로는 격리 시설에 대한 불만족이 가장 힘든 점으로 이어지지는 않았으며 그보다는 인터넷 환경 등에 더 어려움을 겪었던 것으로 여겨진다. 기타 의견으로는 자신이 코로나에 감염될 수 있다는 두려움, 앞으로 수강할 수업에 대한 불안 등이 수집되었다.

종합해 보면 학생들이 자가격리 기간 중 본인의 외로움보다 코로나로 인한 외부적인 활동 제한, 자가격리 시설의 비용 및 불만 등에 대해 많은 스트레스를 느꼈다는 것을 확인할 수 있었다.

4. 나가며

지금까지 2021년도 가을학기를 기준으로 한국에서 유학하고 있는 N 대학 학생들에게 실시한 설문 조사를 통해 학생들의 유학 결심 계기, 주거 상황, 한국에서의 수업 이수 상황, 코로나 관련 상황 등에 대해 알아보았다. 본 연구의 조사 대상자는 이중학위 또는 교환과건학생으로서 앞서 2장에서 살펴본 선행연구의 대상자들과는 소속 특성이 달랐다. 그러나 학생들이 코로나로 인해 주변과의 교류가 감소한 것을 가장 불안하게 여기는 것으로 나타나 선행연구와 비슷한 결과가 도출되었음을 알 수 있다.

본고는 N 대학교의 학생들 중 한국어를 전공하는 학생들을 주 대상으로 한

⁵ 기타 항목의 복수 응답 가능 및 단일 선택에서 괄호 안에 기재된 3명은 한국 입국 당시 자가격리가 필요하지 않았다고 응답한 학생들이다.

것으로서 이 연구 결과를 일반화하기에는 부족하다는 한계가 있다. 그러나 학생들의 현 상황을 파악할 수 있다는 점과 향후 유학 지도에 관해 고찰할 수 있는 자료로 삼을 수 있다는 점에서 유의미하다고 할 수 있겠다. 또한 본 연구 결과를 토대로 하였을 때 향후 학생들의 유학 지도 시 필요하다고 생각되는 지원에 대해 기술하고자 한다.

첫번째로 서울 및 수도권 지역으로 유학을 가는 학생 중 자매협정교에서 기숙사를 제공받을 수 없는 경우 학생들의 주거 시설을 원활하게 확보하기 위한 지원이 필요하다. 일본 소속 대학의 국제 교류 센터와 자매협정교의 유학생 지원 센터 등이 힘을 합쳐야 하며 필요에 따라 외부 기업 등과의 제휴 협정도 고려해야 한다고 생각한다.

두번째로 코로나 관련 상황에서 학생들이 받는 스트레스를 줄이기 위한 지원이 필요하다. 앞서 언급한 장이즈, 김민아 (2021)에서도 유학생들의 심리적 부담을 줄이기 위해 상담 서비스를 마련하거나 멘토링을 실시해야 한다고 하였다. N 대학의 경우 상담실이 교내에 개설되어 있고 유학 전 대면으로 상담을 실시한 학생에 한해 온라인으로도 계속해서 상담을 받을 수 있는 제도가 준비되어 있다. 또한 각 학생마다 담당 교원이 있기 때문에 학생이 어려움을 느낄 때마다 언제든지 도움을 요청할 수 있는 편이라고 생각된다.

그러나 이러한 지원은 모두 일본 소속 대학에서 제공하고 있는 것이며 학생들이 한국 현지에서 도움을 받을 수 있는 곳은 실질적으로 한국의 교우 관계 등에 기댈 수밖에 없는 것이 현실이다. 특히 코로나 확진이나 밀접접촉자로 분류되었을 때의 대처 방법은 한국 현지에서도 시시각각 변하고 있기 때문에 현지의 지원이 더욱 절실하다. 이 또한 자매협정교의 유학생 지원 센터나 자매협정교 소재지의 외국인 지원 센터 등과 연계하여 학생들의 불안을 줄여줄 필요가 있을 것으로 생각된다.

계속되고 있는 코로나 사태로 인해 학생들은 물론 학생들의 보호자와 교직원들까지 불안과 혼란이 이어지고 있다. 코로나가 종식된다고 하더라도 코로나와 유사한 감염증이 언제 또 다시 발병할지 알 수 없기 때문에 향후 유학 지도에서는 이러한 감염증이 발생했을 때에 어떻게 대처할 것인지 매뉴얼을 만들어 혼란을 최소화해야 할 것이다.

마지막으로 코로나로 인해 유학 생활을 마음껏 누리지 못하는 학생들이 없도록 현장에서 항상 힘써 주시는 관계자 여러분들께 감사의 인사를 전하며 본고를 마치하고자 한다.

<참고문헌>

- 손한결, 손복은 (2021) 「외국인 유학생의 비대면 교양수업 운영에 따른 인식조사 연구」 『학습자중심교과교육연구』 21(9), 학습자중심교과교육학회, pp.747-756.
- 양영하, 최명숙 (2021) 「코로나19 상황의 외국인 유학생 상담센터 운영 현황과 방향 : 2020학년도 S대학교 운영 사례를 중심으로」 『학습자중심교과교육 연구』 21(24), 학습자중심교과교육학회, pp.475-486.
- 장이츠, 김민아 (2021) 「코로나바이러스감염증-19 대유행으로 인한 재한 중국인 유학생의 심리사회적 어려움과 서비스 욕구」 『사회복지연구』 52(2), 한국사회복지연구회, pp.65-93.
- 조경원, 이상대, 김수정, 김민경 (2021) 「외국인 유학생 감염병 관리방안: 부산시 소재 대학의 코로나19 대응을 중심으로」 『한국학교 · 지역보건교육 학회지』 22(2), 한국학교 · 지역보건교육학회, pp.41-52.
- 책리하, 박창언, 지미영 (2021) 「코로나19 대응 원격교육에 대한 유학생 학습참여도 및 학습만족도에 미치는 학습자 관련 요인」 『학습자중심교과 교육연구』 21(10), 학습자중심교과교육학회, pp.215-230.
- 최상은, 김병찬, X. Fu (2021) 「코로나 19 사태에서 중국유학생의 적응과정 사례연구」 『학습자중심교과교육연구』 21(17), 학습자중심교과교육학회, pp. 891-914.

- 受付 : 2022 年 7 月 30 日
- 修正 : 2022 年 9 月 15 日
- 掲載 : 2022 年 9 月 30 日

社会的価値を脅かす攻撃的発話に対する反応

—日韓中学生調査を中心に—

河 正一 (大阪公立大学)
森岡 千廣 (京都先端科学大学)

<要旨>

本稿は、河（2022）の継続調査として、中学生を対象に攻撃的発話がどの程度、相手の社会的価値を脅かすか、すなわち攻撃的発話に対する不愉快度とその反応の相関関係を分析した。

社会的力関係における利益の衝突は、談話参加者間の利益または不利益として表れる。そこで、利益の衝突として表れる攻撃的発話を相手の責任の有無に置き換え、聴者の責任による攻撃的発話と聴者の責任ではない攻撃的発話に分けた。その上、攻撃的発話の対象としての社会的価値を「性格」「能力」「外見」「所属」に分けて日韓対照研究を行った。

キーワード インポライトネス、社会的価値、攻撃的発話、不愉快度、反応

1. はじめに

現代社会で最も必要とされるスキルは、良好な人間関係を築き、それを維持しながら仕事に取り込んでいく能力、いわゆる対人関係能力と言われている。対人関係能力は、自分と他者との関係性を認識し、如何にお互いの意思疎通をスムーズに行うかというコミュニケーション能力がそのカギとなる。こうした社会的要請からポライトネス理論が脚光を浴び、数えきれない研究が行われ、多くの言語行動が究明されてきたと言えよう。

ところが、ポライトネス理論の台頭は、円滑なコミュニケーションというポライトネスとしての言語行動だけが重視される傾向をもたらした。その結果、河（2019）が指摘するように、相手に対する断り表現や不満表明にさえも、攻撃的かつ批判的な言語行動としての「私とは関係ない!」「なぜ、私が手伝わなければならないのか」などといった反駁は、分析の対象としてあまり取り

扱われてこなかった。つまり、ポライトネスの捉え方からすべての言語行動を分析するということが当然のことと思うようになり、それに反するインポライトな言語行動は望ましくない、避けなければならない否定的な対象として、いわゆるポライトな言語行動に反する一例としてしか扱わないという言語研究の偏りをもたらしてしまった。

インポライトネス研究は、社会的秩序や価値体系を明確に示すことにつながり、円滑なコミュニケーションの手助けとなる。本稿では、日韓高校生を対象とした河 (2022) の継続研究として、日本と韓国の中学生調査を通じ、攻撃的発話がどの程度、相手の社会的価値を脅かすか、すなわち攻撃的発話に対する不愉快度と、それに対する反応の相関関係を分析する。

2. 先行研究

インポライトネスは、社会的価値を脅かす言語行動として、互いの社会的価値の衝突から生じる言語行動であり、従来のインポライトネスに関する研究は¹、Brown & Levinson (1987) のフェイス概念²から、ポライトネスに反する周辺的な言語行動として、インポライトネスの捉え方や話者の言語ストラテジーなどに焦点が置かれた研究が大半であった (Culpeper 1996, Culpeper 2008 など)。

話者の言語ストラテジーではなく、聴者の反応に焦点を当てた研究としては、Culpeper., Bousfield and Wichmann (2003) や Bousfield (2008 : 第 6 章) などがある。Culpeper., Bousfield and Wichmann (2003) は、話者のインポライトネスに対する聴者の反応のストラテジーを「攻撃 - 防御」と「攻撃 - 攻撃」に分類し、「攻撃 - 攻撃」のパターンとして段階的拡大 (escalation) を、「攻撃 - 防御」のパターンとして直接反駁 (contradiction)、否認 (abrogation)、未参加 (opt out)、見せかけの同意 (insincere agreement) などを提示している。Bousfield (2008 : 第 6 章) は、発話の初期段階 (utterance 'beginnings')、中間段階 (utterance 'middles')、終結段階 (utterance

¹ インポライトネス研究の動向や問題点については、紙幅上、割愛する。詳細は、河 (2014, 2017) または藪内 (2015) を参照されたい。

² Brown & Levinson (1987) は、社会の成員は皆ある種の基本的な欲求、すなわちネガティブ・フェイス (negative face) とポジティブ・フェイス (positive face) を持っているとする。ネガティブ・フェイスとは自分の行動が他人によって干渉されてほしくないという欲求であり、ポジティブ・フェイスとは自分が大切にしている物や価値や行動などを他人によって理解されたり高く評価されたいという欲求である。この二つのフェイスを脅かすような行動がフェイス侵害行為 (Face-threatening Acts) である。

‘ends’) に分け³、中間段階におけるインポライトネスの反応のストラテジーを提示している。Bousfieldは、フェイス侵害行為を受けた聴者の反応のストラテジーを「反応すること (to respond)」と「反応しないこと (not to respond)」に分け、これらのストラテジーは「防御 (defensive)」あるいは「攻撃 (offensive)」の二つの性質を併せ持つとする。しかし、いずれの研究においても聴者の反応のストラテジーに焦点が置かれたため、本稿の目的である攻撃的発話に対する不愉快度とその反応の相関関係を読み取ることができない。

이성범 (2015) は、社会的力関係における話者の攻撃的発話が明示的か非明示的かや聴者の責任の有無によって、聴者の印象と反応を調査している。調査結果、話者の攻撃的発話に対する聴者の印象と反応に聴者の責任の有無が最も重要な要因として働く。その上、明示的か非明示的かに関わらず、女性のほうが男性より攻撃の認知度が高く現れる。つまり、女性は男性より相手の攻撃的発話に敏感に反応する。なお、聴者の責任の有無によって、責任のない場合に比べ、あるほうが攻撃の度合いを低く認識するという。いわゆる、聴者の責任が一種のフィルターとなり、話者の攻撃的発話をろ過するマスク効果 (mask effect) をもたらす。さらに、男女を問わず、聴者の責任のない話者の明示的な攻撃的発話に最も攻撃の度合いを感じる。一方、聴者の責任のある話者の攻撃的発話では、女性は「非明示的 (Indirect Utterance) > ヘッジ (Hedged Utterance) > 明示的 (Direct Utterance)」の順で、男性は「非明示的 (Indirect Utterance) > 明示的 (Direct Utterance) > ヘッジ (Hedged Utterance)」で攻撃の度合いを感じるという。이성범 (2015) では、攻撃的発話の明示性の有無、対人関係における社会的要因、聴者の責任の有無を考慮した点は優れている。しかし、攻撃的発話の場面の分類基準が明確ではないという点と聴者の反応がポライトネス観点に偏っているという点が不十分である。

上記の問題点を取り入れ、河 (2022) では日韓国高校生を対象に攻撃的発話に対する不愉快度と、それに対する反応を分析している。本稿は、河 (2022) の継続調査のため、詳細内容は次節以降で述べていく。

3. アンケートの概要

言語行動の評価は、談話参加者における社会的価値とは何かと共に、社会的

³ 発話の初期段階では、談話参加者間の対人関係の認識、背景知識などが重要な役割を果たす。中間段階は、話者のフェイス侵害行為に対して聴者はどのような反応を示すか、そして、終結段階では、相手との妥協、降伏、補償の提案などが展開される。

会的力関係 3×責任の有無 2×攻撃の対象 4、計 24 場面)、攻撃的発話に対する印象と反応を調査する。

従来の多くの調査方法では、特定の場面に対する言語ストラテジーを直接、記入する談話完成タスク (Discourse completion task : DCT) が多かった。しかし、談話完成タスクは、意識的であれ、無意識的であれ、円滑な言語コミュニケーションとしてのポライトな言語ストラテジーへの偏りが生じやすいため、インポライトネスの要素が表れにくい。このことは、断り・不満表明の先行研究においてインポライトネスに関わる言語行動がほとんど現れなかったことから示唆される⁵。

そこで、調査では、이성범 (2015) を参照し⁶、攻撃的発話に対する反応として、それぞれの場面において A~E というストラテジーを提示し選択する方法を採用した (下記は、性格の例である)。

- A : 沈黙 (何も言わず、沈黙する)
何も言わず、沈黙する。
- B : 謝罪 (謝罪する)
ごめんなさい。すぐやり直します。
- C : 解明・言い訳 (解明または言い訳をする)
ごめんなさい。昨日遅くまで準備していたため、電車で居眠りをしてしまいました。
- D : 反駁 (自分の考え方を明確に示す)
遅刻したことで性格がだらしないというのは関係ないと思います。
- E : 批判 (相手の失礼さを指摘・批判する)
遅刻したことで性格がだらしないと言うのは失礼じゃありませんか。

以上、上記の社会的力関係 (「話者 > 聴者」「話者 = 聴者」「話者 < 聴者」) や責任の有無、攻撃の対象 (「性格」「能力」「外見」「所属」) を取り入れた 24 の質問項目が、表 1 である。

表 1 質問項目

- | |
|---|
| 1. 今日は、来週の文化祭のための打ち合わせがあった。しかし、電車で居眠りをして、乗り過ぎてしまって、40 分ぐらい遅れて到着した。その際、先輩に「大事な打ち合わせに遅刻するなんてあり得ない。まったくだらしないんだから。」と言われた。 |
|---|

⁵ 日本と韓国における断り表現や不満表明などといった社会言語学的調査の動向については、河 (2019) を参照されたい。

⁶ 이성범 (2015) では、「沈黙する」「謝罪する」「解明する」「意見を開陳する」「積極的に反駁する」これら 5 つを反応として設定している。

2. 一週間頑張って作成した文化祭の企画書の後輩に見せたら、後輩に「これ、それぞれの行事の時間が全然考慮されていないので、使いものにならないんじゃないですか。」と言われた。
3. 友達に昨日、好きな人に告白したが断られたという話をしたら、友達に「もうちょっとおしゃれしてよ、顔があまりいけてないから」と言われた。
4. 自分の出身小学校の野球部はそれほど強くないが、昨日の試合でも大きく負けてしまった。それを聞いた先輩に「また負けたって。そんなに弱いなら、野球部をなくしたほうがいいんじゃない」と言われた。
5. 学校で共同作業をしていたが、自分のミスでもないことで、友達に「また間違ってる、もうちょっときちんとしてよ、まったく」と言われた。
6. 朝から友だちと小高い丘をハイキングしていたが、1時間くらい、歩き回ったらもう歩けないくらい疲れてしまい、友達に帰ることを提案した。そしたら、友達に「だめだよ、まだ1時間くらいしか経ってない。取りすぎ、ダイエットしてよ。」と言われた。
7. 一週間頑張って作成した文化祭の企画書を先輩に見せたら、先輩に「これ、それぞれの行事の時間が全然考慮されていないじゃん。まったく、使えないな」と言われた。
8. グループ発表の結果、私のグループが最下位であった。それを聞いた別のグループの友達に「最下位だって、レベル低い。」と言われた。
9. 学校の部活で農業ボランティアに参加した。午前中に畑仕事をしたら、疲れてしまい、後輩に休憩することを提案した。その際、後輩に「30分前も休みましたけど。先輩は取りすぎですよ。ダイエットしてください。」と言われた。
10. 電車で居眠りをして乗り過ごしてしまい、友達との待ち合わせの場所に40分くらい遅れてしまった。待ち合わせの場所についてたら友達に「待ち合わせの時間1時だったよね。なんで毎回、遅刻するのよ。本当にだらしがない。」と言われた。
11. 今朝、部活の先輩に呼ばれて、「最近1年生の遅刻が多いみたいけど、お前がしっかりしていないからじゃないか。もっときちんとしてよ。」と言われた。
12. 部活の帰りに自分の第一印象について、後輩に聞いたら「ぶっきらぼうで冷たい印象でした。先輩は強面なので、笑わないと人から怖がられると思います。」と言われた。
13. 友達と一緒にそれぞれの出身校のマラソンを応援したが、残念ながら自分の出身校は予選落ちで終わってしまった。すると、友達に「お前の学校、毎回参加する意味ある？」と言われた。
14. 電車の人身事故のため、友達との待ち合わせの場所に40分くらい遅れてしまった。待ち合わせの場所についてたら友達に「待ち合わせの時間1時だったよね。なんで毎回、遅刻するのよ。本当にだらしがない。」と言われた。
15. 学校の部活で農業ボランティアに参加した。午前中に畑仕事をしたら、疲れてしまい、先輩に休憩することを提案した。その際、先輩に「何言ってるんだ。30分前も休んだでしょう。太ってるからじゃん。ダイエットしろよ。」と言われた。
16. 学校の部活同士のバスケット試合で、うちの部活は1回戦で負けてしまった。その時、後輩に「めっちゃ弱いですね。多分、小学生にも勝てないかも。」と言われた。
17. 今日は、電車の人身事故のせいで、来週の文化祭の打ち合わせに40分くらい遅れて到着した。その際、先輩に「大事な打ち合わせに遅刻するなんてあり得ない。まったくだらしがないんだから。」と言われた。
18. 部活に参加してみたら、1年生の遅刻が目立っていた。その際、後輩に「最近、1年生の遅刻が多いです。3年生の先輩がみんなのお手本にならず、毎回遅刻するからじゃないですか。先輩らしくお手本を見せてください。」と言われた。
19. 自分の出身小学校の野球部はそれほど強くないが、昨日の試合でも大きく負けてしまった。それを聞いた後輩に「また負けたんですね。そんなに弱いなら、野球部をなくしたほうがいいんじゃないですか」と言われた。
20. 部活の新入部員歓迎会で、自己紹介をしたら、先輩に「もうちょっとハツラツで体格

<p>のいい後輩が欲しかったな。」と言われた。</p> <p>21. 今日は、来週の文化祭のための打ち合わせがあった。しかし、電車の人身事故のため、40分ぐらい遅れて到着した。その際、後輩に「待ち合わせの時間1時でしたよね。大事な打ち合わせを遅刻するなんて、しっかりしてくださいよ。」と言われた。</p> <p>22. 授業の共同発表のため、自分なりに色々調べた内容を友達に見せたら、友達に「内容があまり面白くないし、発表のテーマと趣旨がまったく合わない。」と言われた。</p> <p>23. 学校の部活同士のバスケット試合で、うちの部活は1回戦で負けてしまった。その時、先輩に「めっちゃ弱いじゃん。多分、小学生にも勝てないかも。」と言われた。</p> <p>24. 今日は、来週の文化祭のための打ち合わせがあった。しかし、電車で居眠りをして、乗り過ぎしてしまって、40分ぐらい遅れて到着した。その際、後輩に「待ち合わせの時間1時でしたよね。大事な打ち合わせを遅刻するなんて、しっかりしてくださいよ。」と言われた。</p>

24の質問項目を社会的力関係や責任の有無、攻撃の対象によって分類すると、表2となる。

表2 社会的力関係及び聴者の責任の有無（話者＝話、聴者＝聴）

		1	17	10	14	24	21
性格	力関係	話>聴	話>聴	話=聴	話=聴	話<聴	話<聴
	責任	有	無	有	無	有	無
		7	11	22	5	2	18
能力	力関係	話>聴	話>聴	話=聴	話=聴	話<聴	話<聴
	責任	有	無	有	無	有	無
		15	20	6	3	9	12
外見	力関係	話>聴	話>聴	話=聴	話=聴	話<聴	話<聴
	責任	有	無	有	無	有	無
		23	4	8	13	16	19
所属	力関係	話>聴	話>聴	話=聴	話=聴	話<聴	話<聴
	責任	有	無	有	無	有	無

例えば、「性格」における質問1と17は、聴者の責任の有無、すなわち居眠りと人身事故の理由で遅刻した際に、先輩（話者）に言われる場面であり、10と14では、友達に言われる場面で、24と21は、後輩に言われる場面である。同様に聴者の責任の有無によって少し状況は違うものの、「能力」「外見」「所属」においても同様の組み合わせで作られた。

4. 分析結果と考察

調査は、2021年1月から2021年8月にわたって行われた。有効回答者の内訳

は、表 3 の通りである。

表 3 回答者の内訳

		A 中学校 (日本)	B 中学校 (韓国)
性別	男	84	105
	女	69	163
全体		153	268

質問項目 24 問の「不愉快」×「国」の 2 要因分散分析を行った結果 (SPSS)、「不愉快」の主効果は $[F(23, 9637)=53.09, p<.001]$ で有意であった。なお、「不愉快」と「国」の交互作用が 0.1% 水準で有意であり ($[F(23, 9637)=4.67, p<.001]$)、「国」の単純主効果は、0.1% 水準で有意であった ($[F(1, 419)=16.57, p<.001]$)。詳細分析は、「性格」「能力」「外見」「所属」の順に論じていく。

4.1 「性格」の結果

「性格」に対する攻撃的発話の不愉快度をまとめると、表 4 となる。

表 4 「性格」に対する不愉快度 (網掛け:責任なし)

	1: 話>聴			10: 話=聴			24: 話<聴		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
日本	2.6	2.5	2.5	2.7	2.4	2.6	2.5	2.6	2.5
韓国	2.5	2.8	2.7	2.7	3.0	2.9	2.8	3.5	3.2
	17: 話>聴			14: 話=聴			21: 話<聴		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
日本	3.2	3.2	3.2	3.3	3.1	3.2	3.2	3.1	3.1
韓国	2.9	3.6	3.3	2.9	3.4	3.2	2.9	3.6	3.3

日韓共にすべての質問において聴者の責任のない場合が聴者の責任のある場合より不愉快度が高く現れた。また、聴者の責任のある場合、日本では社会的力関係という要因による不愉快度の変化に一定の傾向が見られなかったが、韓国では、先輩「話>聴」<友人「話=聴」<後輩「話<聴」という傾向が見られた。つまり、日本の中学生は、社会的力関係という要因より聴者の責任の有無が不愉快度に大きく作用される一方、韓国の中学生は、聴者の責任の有無だ

けでなく、社会的力関係も不愉快度の要因として重視される。さらに、日本では男女の不愉快度の相違があまり見られないが、韓国では聴者の責任の有無を問わず、すべての項目において女性の不愉快度が高く表れた⁷。

反応では、日韓共に聴者の責任の有無によって、明らかにその反応が異なっている（付録参照）。話者の攻撃的発話が聴者の責任による場合、日本は社会的力関係に問わず、B（謝罪）を選択するが、聴者の責任ではない場合は、C（解明・言い訳）の選択が最も多かった。しかし、韓国の中学生は聴者の責任による場合、「B（謝罪）>C（解明・言い訳）>…」の反応が見られるものの、B（謝罪）とC（解明・言い訳）の差は日本ほどの開きは見られなかった。なお、社会的力関係によって不愉快度の差が反応にもそのまま表れ、先輩から後輩になるにつれ「B（謝罪）>C（解明・言い訳）>…」の割合の変化も見られた。さらに、韓国の女子中学生は高い不愉快度と関連して男子中学生より重い反応を示す傾向が見られた。つまり、高い不愉快度とそれに対する反応には一定の相関関係が見られるということである。

4.2 「能力」の結果

「能力」に対する不愉快度をまとめると、表5となる。

表5 「能力」に対する不愉快度（網掛け：責任なし）

	7：話>聴			22：話=聴			2：話<聴		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
日本	3.1	3.2	3.1	2.9	3.1	3.0	3.3	3.5	3.4
韓国	3.1	3.9	3.6	3.0	3.8	3.5	3.4	3.8	3.7
	11：話>聴			5：話=聴			18：話<聴		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
日本	3.1	3.2	3.1	3.4	3.2	3.3	3.1	3.1	3.1
韓国	3.1	3.8	3.5	3.4	4.2	3.9	3.2	4.0	3.7

⁷ 日本調査における「不愉快」×「性別」の「不愉快」の主効果は[F(23, 3473)=15.62, p<.001]で有意であった。しかし、「不愉快」と「性別」の交互作用（[F(23, 3473)=0.87, n.s.]）及び性別の単純主効果（[F(1, 151)=0.11, n.s.]）は、有意ではなかった。韓国調査は、「不愉快」の主効果は[F(23, 6118)=47.31, p<.001]で、「不愉快」と「性別」の交互作用が0.1%水準で有意であり（[F(23, 6118)=6.14, p<.001]）、性別の単純主効果は、0.1%水準で有意であった（[F(1, 266)=44.51, p<.001]）。

日韓共に聴者の責任の有無や社会的力関係による不愉快度の違いはあまり見られない。ところが、すべての項目において韓国の不愉快度が有意に高く表れた。また、男女においても日本はそれほど顕著な違いは見られなかったものの、韓国はすべての項目で有意に女性の不愉快度が高く表れた。

反応では、日本は多少の割合の違いは見られるものの、聴者の責任の有無に問わず、「B (謝罪)」が最も示された (付録参照)。韓国は聴者の責任のある場合は、先輩には「C (説明・言い訳)」を、友達には「D (反駁)」を、後輩には「E (批判)」が示された一方、聴者の責任のない場合は、「D (反駁)」が最も多かった。このことは、不愉快度においては明確な相違点が見られなかったにもかかわらず、相手に対する反応では社会的力関係という要因が働いているということを表している。

4.3 「外見」の結果

「外見」に対する不愉快度をまとめると、表 6 となる。

表 6 「外見」に対する不愉快度 (網掛け:責任なし)

	15 : 話 > 聴			6 : 話 = 聴			9 : 話 < 聴		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
日本	2.9	3.2	3.1	3.2	3.4	3.3	3.4	3.4	3.4
韓国	3.1	4.1	3.7	3.2	4.5	4.0	3.4	4.4	4.0
	20 : 話 > 聴			3 : 話 = 聴			12 : 話 < 聴		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
日本	3.3	3.6	3.4	3.4	3.6	3.5	2.9	2.7	2.8
韓国	3.1	4.2	3.8	3.3	4.5	4.0	2.6	3.3	3.0

日韓共に 12 を除けば、聴者の責任の有無や社会的力関係によってやや不愉快度が高く表れる傾向が見られた⁸。また、日本より韓国の不愉快度が高く表れ、韓国では「性格」「能力」と同様にすべての項目において有意に女性の不愉快度が高かった。

反応では、聴者の責任のある場合、日本は先輩には「B (謝罪) > C (説明・

⁸ 9 における「30 分前も休みましたけど。先輩はやりすぎですよ。ダイエットしてください」は、相手への批判として、ところが、12 における「ぶっきらぼうで冷たい印象でした。先輩は強面なので、笑わないと人から怖がられると思います」は、相手へのアドバイスとして受け止められたかもしれない。上記の結果は、高校調査においても同様の結果であった。

言い訳) > …」を、友達には「B (謝罪) > D (反駁) > …」を、後輩には「C (解明・言い訳) > D (反駁) > …」が示された一方、韓国はいずれも「D (反駁) > E (批判) > …」が示された(付録参照)。聴者の責任のない場合、12を除いて日本は社会的力関係によって、「B (謝罪) 32.7 > E (批判) 19.6 > C (解明・言い訳) 19.0 > …」や「C (解明・言い訳) 32.7 > E (批判) 24.2 > D (反駁) 15.7 > …」のようにそれぞれの反応の割合が多種多様であったが、韓国は「E (批判) > D (反駁) > …」の反応が最も多かった。つまり、「性格」「能力」に対する反応では、日本のほうはパターン化が顕著であったが、不愉快度が高くなるにつれてむしろ反応が多様化される一方、韓国はパターン化される。また、韓国では男性より女性のほうの不愉快度が高いだけあって、その反応もより重く表れた。

4.4 「所属」の結果

「所属」に対する不愉快度をまとめると、表7となる。

表7 「所属」に対する不愉快度(網掛け:責任なし)

	23: 話>聴			8: 話=聴			16: 話<聴		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
日本	3.5	3.5	3.5	3.4	3.6	3.5	3.6	3.7	3.6
韓国	3.4	4.0	3.8	3.7	4.5	4.2	3.5	4.1	3.9
	4: 話>聴			13: 話=聴			19: 話<聴		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
日本	3.5	3.6	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4	3.5	3.4
韓国	3.6	4.0	3.8	3.2	4.0	3.7	3.4	4.0	3.7

日韓共に聴者の責任の有無や社会的力関係による相違は明確ではなかったが、聴者の責任のある場合、韓国では友人関係を中心に先輩と後輩における不愉快度において有意差が見られた。最も仲間意識が強いと思われる友人関係における所属感の否定が不愉快度につながったのではないかと思われる。そして、上記の「性格」「能力」「外見」と同様にすべての項目において日本より韓国の不愉快度が有意に高く表れた。また、日本では男女の不愉快度の差がそれほど見られなかったが、韓国ではすべての項目で女性の不愉快度が有意に高かった。

反応では、聴者の責任のある場合、日本では社会的力関係によってその反応が明らかに異なっている(付録参照)。日本は、先輩の攻撃的発言に対してはB (謝罪) が、友人にはD (反駁) が、後輩にはE (批判) の反応が最も多く見ら

れた。韓国では、先輩には D（反駁）、友人と後輩には、E（批判）の反応であった。ということは、不愉快度が高くなるにつれ、日韓共に社会的要因が重視されるということである。一方、聴者の責任のない場合では、社会的力関係に関わらず、日本は「D（反駁）>B（謝罪）>…」が、韓国は「D（反駁）>E（批判）>…」が多く表れた。

4.5 考察

攻撃の対象別による不愉快度をまとめると、表 8 となる。

表 8 攻撃の対象別の不愉快度（網掛け：責任なし）

	性格		能力		外見		所属		性格		能力		外見		所属	
	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓
男	2.6	2.6	3.1	3.2	3.2	3.2	3.5	3.5	3.2	2.9	3.2	3.3	3.2	3.0	3.5	3.4
女	2.5	3.1	3.2	3.8	3.4	4.3	3.6	4.2	3.1	3.5	3.2	4.0	3.3	4.0	3.5	4.0
計	2.6	2.9	3.2	3.5	3.3	3.8	3.5	3.9	3.2	3.2	3.2	3.6	3.3	3.5	3.5	3.7

聴者の責任のある場合、日韓共に「所属>外見>能力>性格」の不愉快度である。聴者の責任のない場合、日本は「所属>外見>能力=性格」で、韓国は「所属>能力>外見>性格」の順であり、いずれも所属に対する不愉快度が最も高く表れた。高校生調査でも聴者の責任のある場合は、今回の結果と同様であった（河 2022）。つまり、相手の所属や集団を攻撃することは、その人のアイデンティティーを否定することにつながるがゆえに、最も攻撃の度合いが高いということである。

そして、聴者の責任の有無を問わず、すべての項目において日本より韓国の不愉快度が高く表れた。表 8 では紙幅上、小数点以下一桁まで示しているため、聴者の責任のない「性格」の不愉快度が日韓共に 3.2 となっているが（四捨五入）、実は日本 3.18、韓国 3.22 で、若干韓国のほうが高い。高校調査では聴者の責任のない場合は顕著な相違は見られなかったものの、聴者の責任のある場合は、韓国の不愉快度が高く表れた。

表 8 では日本と韓国における男女の意識の違いが最も際立つ。聴者の責任の有無を問わず、韓国は有意に女性の不愉快度が高かったが、日本では明確な違いは見られなかった。ところが、高校調査では、日韓共にすべての項目において女性の不愉快度が高く表れた⁹。さらに、男女の意識の違いにおいて最も大き

⁹ 이성범 (2015:122) においても男性より女性のほうが攻撃的発言に対する認識が高いと報告されている。

な差が見られたのが、聴者の責任のある場合の「外見」の不愉快度の差であった（日本「女 3.4>男 3.2」韓国「女 4.3>男 3.2」）。しかし、高校調査では日本「女 3.9>男 2.7」、韓国「女 4.1>男 3.1」で、日本の男女の差が多かった。つまり、日本の中学生はあまり男女の差が見られないが、高校生になると男女の差が見られる一方、韓国は中学生の段階から言葉遣いに対する認識の差が明確に表れる。

言葉遣いに対する男女の意識について、井出（2006：172-173）は、一般に女性のほうが友人、近所の人、夫の上司などのような社交上の人間関係を重んじる付き合いが多いため、より丁寧なことばを使っている。さらに、頻繁に丁寧な言葉を使っているため、女性は言葉の丁寧度評価も低くなる傾向があるという。つまり、通常の丁寧な言葉遣いからかけ離れた攻撃的発話であるがゆえに、丁寧度評価が下がり、その結果、不愉快度が高くなったと考えられる。

また、高校調査と同様に聴者の責任の有無と関連して「性格」と「能力」に関しては、日韓共にそれほど相違点は見られなかったものの、「外見」と「所属」においては、韓国ではむしろ聴者の責任のない場合のほうが低く表れた（これについては、後に反応と関連して考察する）。

反応では、聴者の責任のある場合、日本より韓国は不愉快度が高い分、その反応も重くなる傾向が見られた¹⁰。しかし、日本では攻撃の度合いが高い「外見」「所属」さえも、B（謝罪）の反応が広く見られたのが特徴である。また、相対的に不愉快度が低かった「性格」「能力」において、日本はB（謝罪）かC（説明・言い訳）のパターン化が顕著であったが、不愉快度が高くなるにつれてむしろ反応が多様化された。一方、韓国は最も不愉快度が高い「所属」では、D（反駁）かE（批判）の反応が多かったが、その他ではパターン化というより多種多様な反応が多かった。

また、高校調査では、不愉快度が高くなる「外見」「所属」の反応として、A（沈黙）が一定の割合で表れたが、中学生調査では、他の対象よりは増えているものの、それほどの差は見られなかった。沈黙という行為は、相手の攻撃的発話に対する衝突を避けるための戦略としても、または相手の攻撃的発話に対する不満や無視するための戦略としても用いられる。今回の結果を踏まえ、フェイスの防御としての沈黙か、フェイスの攻撃としての沈黙か、もしくは位相における相違点なのかについて、さらに大学生調査を通じて

¹⁰ 李（2004）では、日本で第二言語として日本語を勉強する学習者（JSL）と韓国で外国語として日本語を勉強する学習者（JFL）に焦点を当て、JFLのほうがJSLに比べ、よりフェイス侵害行為の度合いの高い戦略を選択する傾向があることから、学習環境が不満表明戦略の選択に影響を与えていると指摘している。このことは、韓国のほうが相手の攻撃的発話に対してより明確に反応を示す傾向があるという今回の結果と相通じる。

分析が必要であろう。

一方、日韓共に聴者の責任のある場合に比べ、責任のない「性格」「能力」に対して重い反応が示される傾向が見られた。ところが、不愉快度が高い「所属」では、むしろその反応が逆に表れたのが非常に興味深い。とりわけ、韓国では高校調査と同様にその特徴が顕著であった。このことは、聴者の責任でもない攻撃的発話に対して、その攻撃的発話の所在（責任の有無）を明確にし、これ以上、互いの関係を悪化させたくないというフェイスへの保持が働いたため、不愉快度及び反応も和らいだと考えられる。

社会的力関係と関連して、日本より韓国のほうが重視される傾向が見られた。日本は相対的に不愉快度が低い「性格」「能力」では、社会的力関係に問わず、B（謝罪）もしくはC（説明・言い訳）の反応が多いが、不愉快度の高い「外見」「所属」では、ある程度、社会的力関係が重視され、その反応も多様化された。一方、韓国では「性格」「能力」では社会的力関係による反応の違いが見られるものの、不愉快度が高くなるにつれ（「外見」「所属」）、D（反駁）もしくはE（批判）の反応が多かった。つまり、日本より不愉快度を高く示す韓国では、相対的に不愉快度の低い「性格」「能力」に対して社会的力関係を考慮する一方、日本は不愉快度の高い「外見」「所属」に対して社会的力関係を考慮する。高校調査では韓国のほうが日本より社会的力関係が重視され、特に後輩から言われる攻撃的発話に対してより重い反応が示される傾向が見られた。

最後に、韓国では男性より女性のほうの不愉快度が高いだけあって、その反応もより重く表れた。

5. 終わりに

本稿は、河（2022）の継続研究として日本と韓国の中学生を対象に、攻撃的発話がどの程度、相手の社会的価値を脅かすか、すなわち攻撃的発話に対する不愉快度と、それに対する反応の相関関係を分析し、高い不愉快度とそれに対する反応には一定の相関関係が見られることが分かった。

分析の結果をまとめると、以下の通りである。

- ・日韓共に、聴者の責任のある攻撃的発話に対する不愉快度は、「所属>外見>能力>性格」であり、聴者の責任のない攻撃的発話では、日本は「所属>外見>能力=性格」で、韓国は「所属>能力>外見>性格」であった。
- ・聴者の責任の有無を問わず、すべての項目において日本より韓国の不愉快度が高く表れた。
- ・聴者の責任のある場合、日本より韓国は不愉快度が高い分、その反応も重くなる傾向が見られた。しかし、日本では攻撃の度合いが高い「外見」「所属」

さえも、B（謝罪）の反応が広く見られた。また、相対的に不愉快度が低かった「性格」「能力」において、日本はB（謝罪）かC（説明・言い訳）のパターン化が顕著であったが、不愉快度が高くなるにつれてむしろ反応が多様化された。一方、韓国は最も不愉快度が高い「所属」では、D（反駁）かE（批判）の反応が多かったが、その他ではパターン化というより多種多様な反応が多かった。

- ・「性格」と「能力」では、聴者の責任のある場合に比べ、責任のない場合が日韓共に重い反応が示される傾向が見られたが、不愉快度が高い「所属」では、むしろその反応が逆に表れ、とりわけ韓国ではその特徴が顕著であった。聴者の責任でもない攻撃的発言に対して、攻撃的発言の所在（責任の有無）を明確にし、これ以上、互いの関係を悪化させたくないというフェイスへの保持が働いたためではないかと思われる。
- ・社会的力関係では、日本より韓国のほうが重視される傾向が見られた。ただし、日本より不愉快度を高く示す韓国では、相対的に不愉快度の低い「性格」「能力」に対して社会的力関係を考慮する一方、日本は不愉快度の高い「外見」「所属」に対して社会的力関係を考慮する。
- ・日本ではあまり男女の違いが見られなかったものの、韓国はすべての項目において女性の不愉快度が高くて重い反応が示された。

本稿では、中学生調査を中心に分析したが、今後は、大学生の調査を通じ、各位相における相違点や類似点を分析していきたい。

＜参考文献＞

- 李善姫（2004）「韓国人日本語学習者の「不満表明」について」『日本語教育』123, 日本語教育学会, pp. 27-36.
- 井出祥子（2006）『わきまへの語用論』大修館書店
- 河正一（2014）「インポライトネスにおけるフェイス侵害行為の考察」『地域政策研究』17-1, 高崎経済大学地域政策学会, pp. 93-116.
- （2017）「韓国語教育におけるインポライトネスの教授法—社会的・文化的価値体系及び言語的側面からの提案—」『韓国語教育研究』7, 日本韓国語教育学会, pp. 139-157.
- （2019）「社会言語学的調査の状況—言語行動に関する日韓対照研究を中心に—」『計量国語学』31-8, 計量国語学会, pp. 572-588.
- （2022）「攻撃的発言に対する韓日高校生の反応—韓日対照研究の観点から—」『日本言語文化』59, 韓国日本言語文化学会, pp. 81-103.

- 藪内昭男 (2015) 『ポライトネスとフェイス研究の諸相—大きな物語を求めて—』
リーベル出版
- 이성범 (2015) 『언어적 무례함에 대한 실험화용적 연구 - 공격성 발화를 중심으로 -』 서강대학교출판부
- Bousfield, D. (2008) *Impoliteness in Interaction*, Amsterdam, John Benjamins.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Culpeper, J. (1996) Towards an anatomy of impoliteness. *Journal of Pragmatics* 25: 349-367.
- Culpeper J. (2008) Reflections on impoliteness, relational work and power, Bousfield, Derek & Locher, Miriam. A (Eds.), *Impoliteness in Language: Studies on its Interplay with Power in Theory and Practice*. 17-44. Berlin and New York: Mouton de Gruyete.
- Culpeper, J., Bousfield, D., and Wichmann, A. (2003) Impoliteness revisited: with special reference to dynamic and prosodic aspects. *Journal of Pragmatics* 35:1545-1579.

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP20K13138 の助成を受けたものです。

- ・受付 : 2022 年 7 月 31 日
- ・修正 : 2022 年 9 月 15 日
- ・掲載 : 2022 年 9 月 30 日

付録

	No	性	日本	韓国
性格	1	男	B69.0>C22.6>A4.8>D2.4>E1.2	B56.2>C23.8>A9.5>D6.7>E3.8
		女	B81.2>C14.5>A4.3>D=E0	C37.4>B35.6>D14.7>A7.4>E4.9
		計	B74.5>C19.0>A4.6>D1.3>E0.7	B43.7>C32.1>D11.6>A8.2>E4.5
	17	男	C36.9>B26.2>E19.0>D16.7>A1.2	B=C28.6>E17.1>D15.2>A10.5
		女	C65.2>B21.7>D5.8>E4.3>A2.9	D31.3>C25.8>B21.5>E18.4>A3.1
		計	C49.7>B24.2>E12.4>D11.8>A2.0	C26.9>D25.0>B24.3>E17.9>A6.0
	10	男	B71.4>C16.7>A4.8>D=E3.6	B39.0>C30.5>A=D10.5>E9.5
		女	B73.9>C18.8>A5.8>D1.4>E0	B34.4>C28.2>D17.8>E14.7>A4.9
		計	B72.5>C17.6>A5.2>D2.6>E2.0	B36.2>C29.1>D14.9>E12.7>A7.1
	14	男	C38.1>B28.6>E16.7>D15.5>A1.2	C36.2>B24.8>E19.0>A10.5>D9.5
		女	C60.9>B21.7>E10.1>D4.3>A2.9	C34.4>D26.4>B18.4>E17.8>A3.1
		計	C48.4>B25.5>E13.7>D10.5>A2.0	C35.1>B20.9>D19.8>E18.3>A6.0
	24	男	B60.7>C21.4>D8.3>A6.0>E3.6	B31.4>C23.8>D=E16.2>A12.4
		女	B72.5>C21.7>E4.3>A1.4>D0	C27.0>D=E23.3>B22.7>A3.7
		計	B66.0>C21.6>D4.6>A=E3.9	B26.1>C25.7>D=E20.5>A7.1
	21	男	C35.7>B33.3>E17.9>D11.9>A1.2	C31.4>B29.5>E16.2>D12.4>A10.5
		女	C59.4>B29.0>D7.2>E4.3>A0	D29.4>C25.8>E21.5>B20.9>A2.5
		計	C46.4>B31.4>E11.8>D9.8>A0.7	C28.0>B24.3>D22.8>E19.4>A5.6
能力	7	男	B47.6>C25.0>D15.5>A=E6.0	C35.2>B24.8>D17.1>E13.3>A9.5
		女	B65.2>C21.7>E7.2>A5.8>D0	C34.4>E27.6>D21.5>B10.4>A6.1
		計	B55.6>C23.5>D8.5>E6.5>A5.9	C34.7>E22.0>D19.8>B16.0>A7.5
	11	男	B45.2>D34.5>E8.3>C7.1>A4.8	B28.6>D24.8>C21.9>A13.3>E11.4
		女	B66.7>D15.9>A8.7>C=E4.3	D38.0>B19.6>E19.0>C17.2>A6.1
		計	B54.9>D26.1>A=E6.5>C5.9	D32.8>B23.1>C19.0>E16.0>A9.0
	22	男	B46.4>C33.3>E9.5>D7.1>A3.6	C30.5>B21.9>D18.1>A17.1>E12.4
		女	B=C36.2>E13.0>D10.1>A4.3	D39.9>E20.2>C19.0>B15.3>A5.5
		計	B41.8>C34.6>E11.1>D8.5>A3.9	D31.3>C23.5>B17.9>E17.2>A10.1

	5	男	B34.5>C33.3>D22.6>E9.5>A0	D30.5>C22.9>B20.0>E15.2>A11.4
		女	B42.0>C26.1>E18.8>D10.1>A2.9	D46.0>E25.8>B15.3>C8.0>A4.9
		計	B37.9>C30.1>D17.0>E13.7>A1.3	D39.9>E21.6>B17.2>C13.8>A7.5
	2	男	B53.6>C15.5>D14.3>E11.9>A4.8	C25.7>B22.9>E21.9>D21.0>A8.6
		女	B44.9>C=E18.8>D14.5>A2.9	E41.7>C25.2>B17.8>D14.1>A1.8
		計	B49.7>C17.0>E15.0>D14.4>A3.9	E33.6>C25.4>B19.8>D16.8>A4.5
	18	男	B56.0>D19.0>C14.3>E10.7>A0	D29.5>B21.9>C21.0>E17.1>A10.5
		女	B63.8>D15.9>C14.5>E5.8>A0	D47.2>E26.4>C15.3>B8.0>A3.1
		計	B59.5>D17.6>C14.4>E8.5>A0	D40.3>E22.8>C17.5>B13.4>A6.0
外見	15	男	B38.1>D25.0>C17.9>A10.7>E8.3	C32.4>D24.8>B15.2>A14.3>E13.3
		女	C34.8>B27.5>D18.8>A11.6>E7.2	D40.5>E35.0>C9.2>A8.6>B6.7
		計	B33.3>C25.5>D22.2>A11.1>E7.8	D34.3>E26.5>C18.3>A10.8>B10.1
	20	男	B34.5>E20.2>C17.9>D14.3>A13.1	C27.6>D20.0>A19.0>B17.1>E16.2
		女	B30.4>C20.3>E18.8>D17.4>A13.0	E35.6>D31.9>A14.7>C11.0>B6.7
		計	B32.7>E19.6>C19.0>D15.7>A13.1	E28.0>D27.2>C17.5>A16.4>B10.8
	6	男	B31.0>D26.2>E17.9>C13.1>A11.9	D24.8>C=E20.0>A19.0>B16.2
		女	C21.7>B=E20.3>A=D18.8	D42.9>E36.2>A9.2>C7.4>B4.3
		計	B26.1>D22.9>E19.0>C17.0>A15.0	D35.8>E29.9>A13.1>C12.3>B9.0
	3	男	E26.2>C23.8>D21.4>B15.5>A13.1	C30.5>D22.9>E19.0>A17.1>B10.5
		女	C43.5>E21.7>A15.9>B10.1>D8.7	E39.9>D30.7>C16.6>A8.0>B4.9
		計	C32.7>E24.2>D15.7>A14.4>B13.1	E31.7>D27.6>C22.0>A11.6>B7.1
	9	男	C31.0>D26.2>B20.2>E14.3>A8.3	C=E23.8>D22.9>B15.2>A14.3
		女	C49.3>E15.9>D14.5>B11.6>A8.7	D45.4>E37.4>A=C8.0>B1.2
		計	C39.2>D20.9>B16.3>E15.0>A8.5	D36.6>E32.1>C14.2>A10.4>B6.7
	12	男	B36.9>C27.4>E14.3>A=D10.7	B35.2>C34.2>A12.4>D10.5>E9.5
		女	B49.3>C20.3>D14.5>E10.1>A5.8	D27.6>C26.4>E20.2>B17.8>A8.0
		計	B42.5>C24.2>D=E12.4>A8.5	C28.7>B24.6>D20.9>E16.0>A9.7
所属	23	男	B34.5>D33.3>E20.2>A7.1>C4.8	D32.4>C22.9>E20.0>A=B12.4
		女	B43.5>D31.9>E13.0>A7.2>C4.3	D41.1>E35.0>C10.4>B8.6>A4.9
		計	B38.6>D32.7>E17.0>A7.2>C4.6	D37.7>E29.1>C15.3>B10.1>A7.8
	4	男	D45.2>B25.0>E19.0>A6.0>C4.8	D41.0>E19.0>C16.2>B14.3>A9.5

		女	D40.6>B31.8>A11.6>E10.1>C5.8	D43.6>E16.6>C16.0>B13.5>A10.4
		計	D43.1>B28.1>E15.0>A8.5>C5.2	D42.5>E17.5>C16.0>B13.8>A10.1
	8	男	D35.7>E23.8>B19.0>A14.3>C7.1	E31.4>D28.6>A16.2>C15.2>B8.6
		女	D34.8>E24.6>A23.2>B14.5>C2.9	E46.0>D36.8>A9.8>C4.3>B3.1
		計	D35.3>E24.2>A18.3>B17.0>C5.2	E40.3>D33.6>A12.3>B8.6>B5.2
	13	男	D28.6>B26.2>E23.8>C11.9>A9.5	D26.7>C24.8>B18.1>E17.1>A13.3
		女	D37.7>B34.8>E11.6>C10.1>A5.8	D39.9>E28.2>C16.6>B8.0>A.7.4
		計	D32.7>B30.1>E18.3>C11.1>A7.8	D34.7>E23.9>C19.8>B11.9>A9.7
	16	男	E39.3>B27.4>D22.6>A6.0>C4.8	E29.5>D26.7>C16.2>B15.2>A12.4
		女	E37.7>D36.2>B15.9>A8.7>C1.4	E41.1>D38.7>B8.0>C6.7>A5.5
		計	E38.6>D28.8>B22.2>A7.2>C3.3	E36.6>D34.0>B10.8>C10.4>A8.2
	19	男	B36.9>E25.0>D23.8>A8.3>C6.0	D32.4>E22.9>B=C16.2>A12.4
女		D46.4>B27.5>E11.6>C8.7>A5.8	D43.6>E28.8>C11.7>B9.2>A6.7	
計		D34.0>B32.7>E19.0>A=C7.2	D39.2>E26.5>C13.4>B11.9>A9.0	

「日韓研究」授業の実践報告

一日韓比較文化教育の可能性と課題一

尹 孝貞 (法政大学大学院博士後期課程)

<要旨>

本稿は、筆者が日韓比較文化授業として担当した「日韓研究」の実践報告である。授業運営における試行錯誤を共有し、より発展的な授業方法を考察することを目的とする。

「日韓研究」授業は、日本と韓国の文化を比較することで、韓国文化をより深く理解することを目指した授業である。授業内のアンケート結果から、多くの学生たちにとって、文化は韓国語を勉強する際に、大きな役割を果たしており、また、学生たちが韓国文化の様々な面に興味を持っていることが分かった。ここから、文化教育の重要性がわかる。本授業において、メディアを活用し、授業ごとにアンケートを実施、そして、その結果をすぐに次の授業に反映することで、授業への参加度を高め、学習効果が高めることとなった。

一方、課題として比較文化教材の不足、授業構成の問題、学生の参加度を高めることの難しさなどが残されている。

キーワード 日本 韓国 文化 文化授業

1. はじめに

筆者は、2021年の秋学期に、専門学校の1年生を対象に、日韓比較文化授業である「日韓研究」を担当した。所属している専門学校は観光専門学校であり、英語・韓国語・中国語コースに別れ、外国語におけるコミュニケーション能力を高めることを目指した学科である。春学期の「韓国文化」は、韓国の文化について学ぶ授業であり、秋学期の「日韓研究」では、日韓の文化を比較することで、韓国文化の理解度を高めることが授業の目的となる。学生の中から、関心が高いK-POPに着目するほうが望ましいという事前情報をもとにカリキュラムを作成した。

しかし、「文化」というテーマは膨大であり、さらに、「日韓研究」では、日本と韓国の文化を比較する必要がある、学生たちの興味・関心を把握するために、授業ごとにアンケートを行い、それを次の授業で反映することを決めた。

2. 授業アンケート調査の結果

2.1 初回アンケート

まず、初回の授業では、授業に向けて学生たちの自発的な学習目標を理解するために、アンケートを行った。Google Form を使い、「韓国語を勉強し始めた理由」、「興味のある韓国文化」、「韓国語を勉強することで、今後希望すること」、「日本文化についてどのくらい知っているのか」について質問をし、23名から回答が得られた。具体的な質問内容は表1の通りである。

表1 質問リスト

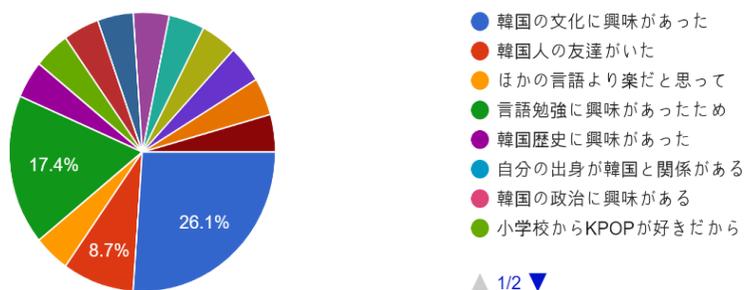
質問	選択肢
韓国語を勉強し始めた理由	①韓国文化 ②韓国人の友達 ③言語勉強の楽しさ ④言語に興味 ⑤韓国歴史に興味があった ⑥自分の出身が韓国と関係がある ⑦韓国の政治に興味がある
興味のある韓国文化	①料理 ②KPOP ③ドラマ ④映画 ⑤韓国人の生活 ⑥歴史 ⑦政治 ⑧スポーツ ⑨伝統文化
韓国語勉強することで、今後希望すること	①韓国人の友達作り ②韓国旅行 ③韓国への語学研修 ④韓国大学に入学 ⑤韓国で就職 ⑥日本で韓国語を生かした就職 ⑦韓国のコンテンツを字幕なしで見る
日本文化についてよく知っているか	①よく知っている ②知っているが、説明することは難しい ③よく知らない ④あまり知らず、特に興味ない

アンケート調査結果について考察する。

図 1 韓国語を勉強し始めた理由

韓国語を勉強し始めた理由

응답 23개

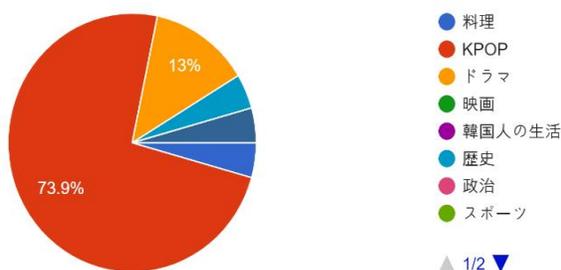


まず、図 1 からわかるように、韓国の文化に興味があり、韓国語を勉強し始めたと答えた学生は 6 人（26%）で最も多かった。しかし、直接記入で、KPOP アイドルが韓国語勉強の動機となったと答えた学生が 6 人（26%）であった。すでに韓国の文化という項目があるにもかかわらず、KPOP アイドルが好きだったためと直接記入した学生が 6 人もいたことは、KPOP アイドルへの愛情が、韓国語を勉強する大きな動機となっていることがわかる。

図 2 興味がある韓国文化

興味がある韓国文化

응답 23개



次に、授業を進める中で、韓国文化へのより具体的な関心を把握するために、興味を持つ韓国文化について質問をした。予想していたとおり、KPOP に関心を持った学生が 17 人で 70%を超えた。図 1 の結果とも比較すると、KPOP アイド

ルは韓国語を勉強する大きな動機でもあり、韓国文化の中で、最も興味のあるテーマであることがわかる。自分が興味を持つテーマをより深く勉強したいという学生たちの要望を読み取ることができた。

図3 韓国語を勉強することで、今後希望すること

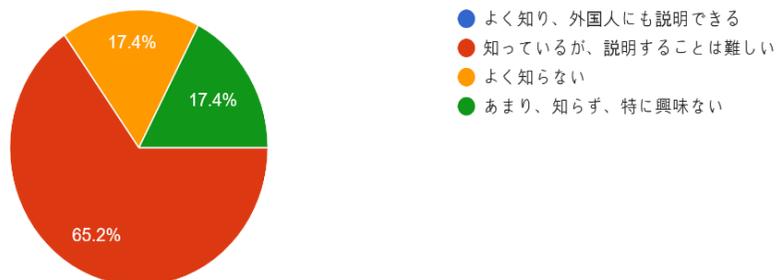
韓国語を勉強することで、今後希望すること
 응답 23개



そして、韓国語を勉強する目的としては、「日本で韓国語を生かした就職」が 12 人（52%）で、半分を超えていた。その次に、「韓国旅行」が 5 人（21%）、「韓国のコンテンツを字幕なしで見る」は 3 人（13%）となった。卒業後、就職を目指す専門学校の学生であるため、今まで学んできた韓国語を就職の際にも生かしたいのではないかと考えられる。

図4 日本文化についてよく知っているか

日本文化についてよく知っているか
 응답 23개



日本と韓国の文化を比較する授業の特徴から、学生たちの基本知識としてどのくらい日本文化を理解しているのかを把握する必要があった。その結果、「知っているが、外国人に説明できるほどではない」という回答が最も多いことは予想していたことである。しかし、日本文化について「よく知らない」と答えた 8 人 (34%) のうち、「あまり知らず、特に興味ない」と答えた学生が、4 人 (17%) もいたというのは、自国の文化理解度が決して高くないことがわかる。そのため、カリキュラム作成の際に、日本文化とは少し異なる韓国文化に重点を置き、両国の文化を学生自身が比較できるようにすることを目指した。

2.2 授業内アンケート - 教材を通じた文化授業

授業を進める際、文化に関する本を教材¹として授業を行った。まず、教材にした本を学生たちが自分で読んでくることを前提とし、授業では教材にあった内容に説明を加える形式とした。しかし、文化教材として出版された本ではなく、日韓比較文化に関連するエッセイ本であったため、紹介されている様々なテーマを関連付けて説明することが難しかった。そのため、本の中から、2-3 個のテーマを抜粋することとしたが、限られた授業時間内に複数のテーマをすべて触れることが難しかったため、最終的に一つのテーマに深く触れるように変更した。

2.3 授業内アンケート - 日韓アイドル授業&大衆音楽

最初にテーマとして選んだのは、学生たちから最も関心が高かったアイドル文化である。日韓アイドル文化については、2回にわたって授業を行った。関心度が高いテーマだったため、すでに自己学習していると判断し、基本的なアイドルの紹介は除き、学問的な定義を含め、アイドルエンターテインメント産業について、深層的な内容を述べた。しかし、専門学校の学習内容としては、学問的な議論を深めることは難しかったため、過去 30 年間、日韓アイドルがどのように変化し、昔のアイドルは、どのような公演をしたのかを映像で紹介した。そして、2回目の授業では、アイドルファンダムをテーマとし、日韓アイドルファンたちは、どのようにアイドルを応援し、公演を楽しんでいるのかについて説明した。以下は、学生のコメントである。

アイドル授業 - 学生 A

KPOP アイドルはダンス、歌、ビジュアル全てにおいて日本のアイドルより優れていると思います。日本のアイドルは日本のアイドルで、韓国のアイドルは韓国のアイドルで比較するものでは無いなと思いました。どちらの

¹ 長迫英倫 (2011) 『それでも不思議な韓国 - やさしい日韓比較文化考』文芸社

国のアイドルも大好きです！

アイドルファンダム授業—学生B

日本のアイドルファンの子は自分と推しが被ると敵対心やライバル心をもってしまう傾向がある気がします。日本アイドルファンは韓国アイドルファンのように駅やバス停に広告を出したり、誕生日イベントをしたり、アーティストの名前で寄付したりすることがないので韓国はアーティストとファンの距離が近いように感じました。

ペンライトもたくさんグループがあるのに、コンセプトもデザインも被らないのがすごいし、そのグループのイメージを表すものだったりもすると思いました。最近では日韓合同アイドルも増えてきてお互いのいいところを真似していけたらもっと良くなると思いました。

学生たちが自分なりに授業を通して学んできたことを分析していることがわかる。共通的に見える反応は、両国のアイドル文化の長所に注目し、互いに発展しあっていくことを願っていることだ。

さらに、アイドルだけでなく、より幅広く日韓の大衆音楽についても知ってもらうために、大衆音楽の100年史の流れを説明し、日韓の様々な音楽を紹介した。そして、学生たちが自分で日韓の大衆音楽の違いを比較するようにした。

日韓大衆音楽授業—学生C

日本と韓国の音楽の歴史がよく分かりました。昔の曲は日本も韓国もすごく似ている気がした。韓国のバンドはゆっくりしたリズムで日本はロックに近い感じがした。

日韓大衆音楽授業—学生D

アーティストのライブで日本の静かに聞く文化も好きだけど海外の一緒に歌いながら楽しむというのもいいなと思います。機会があれば海外の公演にも行ってみたいです。

大衆音楽の大きな枠の中に、アイドル文化も含まれているので、時代の変化による音楽スタイルの変化、国による公演の楽しみ方を違いなど、授業で紹介した様々な動画から読み取ったことをコメントで残した。

2.4 授業内アンケート - 食文化

食文化は2回にわたって授業を行った。初回の授業では、日韓の食文化の特徴について触れ、2回目の授業では、具体的に食べ物の由来と作り方を、映像

を通して紹介した。特に、冷麺や焼肉のように日韓で食べているものを選び、学生たちが、それぞれの違いを考えるようにした。日本で愛されている食べ物の歴史には、在日コリアンの歴史と深くかかわりを持っているため、映像を通して紹介した。以下は学生のコメントである。

食文化授業—学生 E

韓国では11月にたくさんのキムチを漬けたり唐辛子などの調味料が基本で、日本では「だし」や食材などを基本とするなどの味の違いや、日本と韓国の食文化の違いを知ることができました。

食文化授業—学生 F

今回も日韓の食べ物について学んで、味噌を作る時に日本は米を使うことや、日本の冷麺は食べやすいように日本人向けに辛すぎないように作ってあること、焼肉の歴史などについて初めて知ることができました。食べ物一つとっても、国によって少しずつ違いがあると知れて面白かったです。

在日コリアンを通して入ってきて、日本化された韓国料理については、ただ見るだけだと知らない部分であるため、授業を通して学ぶことができたというコメントがあった。そして、日韓ともに存在する味噌に対しては、作り方を映像で見せながら、説明をした。しかし、直接食べたり、簡単に作ってみる体験学習としても活用した方が、学習効果がより上がるテーマであるだろう。

2.5 授業内アンケート - 文学

最後の授業は、特別な深化学習として韓国文学、その中でも、尹東柱の作品について紹介した。ただ、尹東柱と作品を紹介するだけでなく、日本で出版された尹東柱の日本語訳と比較した。学生に対しては難しいのではないかと予想していたとおり、アンケートでも、詩は難しいという回答が多かった。しかし、その中でも、作品に関する理解度がかなり高かった学生がいた。以下はそのコメントである。

文学授業—学生 G

高校の時の授業では日本語訳のものを読んだだけで、原文や他の翻訳のものは読まなかったので、それぞれの訳し方で感じ方が少し違って面白かった。

「十字架」では、昇る日の事をイエス・キリストに起因して「追いかけてきた」と表現していたのが秀逸だと感じました。他の韓国の詩も読んでみたいと思いました。

「十字架」

追いかけてきた日の光が

いま 教会堂の尖端
十字架にかかりました。
尖塔があれほど高いのに
どうして登ってゆけるでしょうか。
鐘の音も聞こえてこず
口笛でも吹きつつ さまよい歩いて
苦しんだ男、
幸福なイエス・キリストにとって
そうだったように
十字架が許されるのなら
首を垂れ
花のように咲きだす血を
暗くなってゆく空の下に
静かに流しましょう

(1941. 5. 31)井出訳

言及した作品は、尹東柱の「十字架」である。「追いかけてきた日の光が」の部分、イエス・キリストに起因して表現していると理解したのである。コメントからわかるように、尹東柱の作品は日本の高校教科書にも紹介されている²ため、学んできたことを覚えていたということだ。このように、文学のような考察が必要な部門に対しては、学生の頃、どう勉強してきたのかが影響を及ぼすことがわかる。

ここから、大学・専門学校のような高等教育機関における韓国文化授業も必要であるが、中学・高校における教育において、他文化圏の文化について、多く触れていくことが、その後の理解度にも大きな役割を果たすと考えられる。

5. 授業のレポート

² 日本の高校国語教科書『新編現代文』に、茨木のり子の著書『ハンデルへの旅』から「尹東柱」という文章が「空と風と星と詩」というタイトルで収録されている。

授業の期末レポートは、文化の授業で学んできたテーマの中から一つを選び、なぜ、そのテーマを選んだのか説明し、今まで学んできた内容を踏まえながら、自分が調べた内容を述べるようにした。

ここで、自分の関心分野について深く考えるきっかけとなるように、自分が好きな理由を具体的に述べることを強調した。しかし、授業中の言及にもかかわらず、ただ、好きだからと答えた学生は半数を超えた。その中で、自分がこのテーマを選んだ具体的な理由を述べた学生が数人いたが、最も印象的な学生のレポートを紹介する。

日韓アイドルレポート - 学生 G

私が今まで学んできた日韓の文化の中で、最も印象的だったテーマは、「日韓のアイドルの違いについて」である。なぜなら、日韓のアイドルに違いがあることは雰囲気ではわかっているが、何がどう違うのか自分では理解できていなかったけれど、授業を通して、アイドルの育成やファンの応援の仕方について学んだからである。

授業では、アイドル制作システムのイメージづくりにおいて、日本のアイドルは「身近な同僚」という認識であることを学んだ。しかし、それだけでなく、「雲の上の存在」という認識もある。

ここでは日本のアイドル代表として、ジャニーズ事務所を挙げる。韓国のアイドルたちはコロナ化になったことで、サイン会の代わりに「ヨントン」という、アイドル達とビデオ通話で話すことができる場を設けた。その「ヨントン」を参考に、ジャニーズ事務所は、ビデオ通話ではないが、電話でアイドル達と直接話すことができる機会を設けようとした。しかし、ジャニーズのファンたちの多くが、「ジャニーズに「ヨントン」要らない」「ジャニーズには雲の上の存在でいてほしい」という意見があった。

ジャニーズは昔からあらゆる制限が厳しく、サブスク禁止、SNS禁止、コンサート会場での写真禁止など、様々なことが禁止されていた。そのため、昔からいるファンの多くは、身近には感じられるけれど、あくまで「雲の上の存在」であるジャニーズを応援していると考えられる。

このことから、韓国のアイドルは完璧なスターではあるが、ファンとの距離は近い。しかし、日本のジャニーズは身近には感じられるがファンとの距離は比較的遠いと感じられた。

以上の理由から、このテーマがもっとも印象的であった。

この学生は、日韓アイドル授業で学んできたことを踏まえつつ、授業で説明していない日本アイドルに関する新しい観点について、実例をもとに説明した。

授業の趣旨をよく理解したい例である。さらに、ただ授業で学んできたことをそのまま、受け入れるのではなく、それとは少し異なる事例を持ってきて述べたのが、最も印象深い。

6. おわりに

以上、筆者の授業運営をもとに、学生たちのコメントを分析し、今後の授業運営方法に関する考察を述べた。

既存の研究では、韓国語学習者において文化教育の重要性は注目されてきたものの、自国の文化と韓国の文化を比較することで、韓国文化の理解度を高める試みはほとんど見当たらなかった。

動画を通じた授業運営は学生たちの反応が最もよかった。メディアを通じた学習の重要性が高まる中で、特に文化教育の際には、メディアの活用をより増やしていく必要があると考えられる。

そして、授業ごとにコメントをとることで、教室の問題や授業の構成に関する不満などをすぐ把握でき、その場で反映することができた。特に、文化授業で膨大なテーマに触れ、学生たちの興味・関心を積極的に反映できたことが最も良かった点である。

しかし、課題も残されている。最初、授業カリキュラムの作成に混乱があり、学生たちから紛らわしいというコメントがあったため、今後、関連するテーマごとに絞っていく必要がある。メディアを活用することで、授業への参加度を高めることもできたが、動画が終わり、本論に入るときは集中力が下がる傾向があったので、食文化のような直接体験できるテーマの際は、体験型授業として運営することもよいだろう。

最後に、まとまった授業でなかったにもかかわらず、積極的にコメントを残し、授業に参加してくれた学生たちに感謝したい。「日韓研究」を通し、学生たちが自分の関心分野を広げるきっかけになることを願う。

<参考文献>

- 長迫英倫 (2011) 『それでも不思議な韓国 - やさしい日韓比較文化考』 文芸社、pp. 14-98.
- 김지원 (2021) 「일본 대중문화 개방 이후 한일 대중음악 교류의 성과와 의미 고찰- 2000년대 이후를 중심으로」 경희대학교 석사학위논문, pp.25-75.

- 김혜윤 (2016) 「한일 아이돌 콘텐츠와 팬덤의 수용 방식 SM 엔터테인먼트와 자니즈 사무소를 중심으로」 중앙대학교 석사학위논문, pp.6-74.
- 김효은 (2014) 「일본 사회에서의 K-POP 에 관한 연구」 동아대학교 석사학위논문, pp.9-43.
- 이예일 (2021) 「한국과 일본의 아이돌 메이킹에 관한 연구: 한일 합작 프로젝트 아이즈원과 AKB48 을 중심으로」 중앙대학 석사학위논문, pp.10-73.
- 이지연 (2021) 「미디어를 활용한 한국어와 사회문화 이해 교육 방안 연구-외국인 유학생을 중심으로」 『문화와 융합』 43(10), 한국문화융합학회, pp.114-133.
- 井出泉 (2013) 「詩人尹東柱関連資料」, 立教大学図書館ホームページ
(2022年8月29日取得, <http://library.rikkyo.ac.jp/archives/exhibition/exhibition1/dongju/works2.html>)

- 受付 : 2022 年 7 月 31 日
- 修正 : 2022 年 9 月 16 日
- 掲載 : 2022 年 9 月 30 日

〈書評〉

朴 天弘 著

現代日本語の「ハズダ」の研究

李 英蘭 (東京大学)

本書は、著者の朴天弘氏（東京大学）の博士論文をもとにし、現代日本語の文末に現れる「ハズダ」文の意味・機能について、統一的な説明を可能にする最も基本となる性質を突き止めようとした著書である。

高橋（1975）を始めとする「ハズダ」文に関する先行研究は数多くあり、その意味・機能についての見解もさまざまである。それまでの従来の研究は大きく、①「ハズダ」の意味・用法を記述的に考察したもの（高橋（1975）、田村（1995）等）と、②推論の観点から考察したもの（寺村（1984）、松田（1994）、中村（2003）等）との2つに分けられる。前者は、「ハズダ」の意味を「ある根拠PからQが帰結することが当然であることを表す」とし、〈みこみ〉〈さとり〉〈思い込み〉〈推察〉〈道理〉〈予想〉などの用法があるとしている。一方で後者は、「ハズダ」の意味・機能を「何かの根拠となるPからQを当然のように推論する」とし、その推論過程についてさまざまな考察が行われてきた。

これらの先行研究に対し、著者は次の2つの問題点を指摘している。一つ目は「ハズダ」の使用について統一的な説明ができない点と、二つ目は「ハズダ」の本来の性質を的確に説明できないという点である。このような先行研究における問題点を解決し「ハズダ」の本質を探るため、本書では、「ハズダ」が用いられる文に共通しているある事に着目している。それは、「ハズダ」の使用には、話し手が持っている知識と実際の状況の間に何らかのズレが存在するという点である。

本書では、「ハズダ」の使用条件として「話し手の知識、または、話し手が予想・期待することと現状の間に何らかのズレが生じた場合、そのズレから発生した「疑問」を払拭するときに「ハズダ」が用いられやすくなる」とし、この使用条件から考えられる「ハズダ」の基本的な意味・機能については、「話し手が真であると思っている、または、真であろうと予想している内容において何らかの話し手の認識的なズレが存在する場合、それに起因する疑問を払拭するために、「知識の確認」を行う。ここでの「確認」とは、「ハズダ」の使用条件のもとで、「当該の関連のある知識を引き出し、再び確かめる」ことと述べている。つまり、話し手の知識と現状の間に何らかの認識的なズレが生じた場合、

そこで発生した疑問を解消するための「知識を確認する」ときに用いられる形式が「ハズダ」であり、それが「ハズダ」の本質的な意味・機能であるということであろう。

そして、本書では、このような意味・機能を持っている「ハズダ」を「知識確認形式」と呼び、その詳細を考察している。まず、知識確認形式としての「ハズダ」には、①推論を行うものと、②推論を行わないものがあると述べている。前者は、話し手の知識と未確認領域の事態とのズレから生じる疑問や話し手の不確定な疑問から生じる知識確認のタイプであり、話し手は、未確認領域の事態に対し関連がある知識を使い、推論を行い知識を確認する。後者は、事態が話し手の確認領域に属しているため推論過程を経ず、知識そのものを確認するタイプであり、知識そのものの真偽が問われるか、話し手が保持している知識とのズレが強く感じられるときに、当該の知識を確認すると述べている。

さらに、知識確認という「ハズダ」の基本的な機能は、知識の中で欠けている変数が穴として存在するときに穴埋めとしての知識を確認する用法や、「はずがない」という否定表現を用いて可能性の強い否定を表す用法、責任回避といった hedge としての用法などにも派生し、これらの全ては「ハズダ」が知識確認形式であることで説明できると述べている。

また、本書の後半では、「ハズダ」と「ダロウ」「ニチガイナイ」を比較し、知識確認形式としての「ハズダ」の基本的な機能を他の形式と明確に区別している。「ダロウ」は、話し手が持っている知識を意識するものの、その真偽を問うのをやめて保留するという点で、「ニチガイナイ」は話し手の確信的な判断を表し、話し手の知識は反映されるが、知識の存在は問われないという点で、「ハズダ」との相違が見られる。つまり、「ダロウ」や「ニチガイナイ」と比べ、「ハズダ」は知識の確認と話し手の確信度という側面により幅広い用法を持っていると言える。さらに「ハズダ」と韓国語の推量表現である「-(u)l kesita」を対照考察し、「ハズダ」の基本的な機能は「知識の確認」であるのに対し、「-(u)l kesita」は「知識を参照し、未確認領域への投影」と述べている。

本書の成果としては次の2点が挙げられる。第一に、それまで統一的な基準で説明できなかった「ハズダ」のさまざまな用法について、話し手の知識と現状の間に生じるズレの存在に気づき、「ハズダ」の基本的な機能を認識的なズレから発生する疑問を解消するための「知識の確認」という一つの機能で説明したという点である。第二に、「ハズダ」と類似した意味を持っている「ダロウ」や「ニチガイナイ」との比較を通じ、「知識の確認」という「ハズダ」の基本的な機能を再び確認する他、「ダロウ」や「ニチガイナイ」との相違点を明確に示した点である。

但し、「ハズダ」の使用条件を「話し手の認識的なズレ」とし、「ハズダ」の基本的な機能は「知識の確認」と定義した点には少し疑問が残る。なぜなら、

本書でも述べられているように、「ハズダ」文には一貫して「話し手の認識的なズレ」という文脈条件が「プロトタイプ」として働いており、「ハズダ」と「ダロウ」「ニチガイナイ」との最も顕著な違いも、この話し手の認識的なズレの有無ではないかと考えられるからである。要するに、「話し手の認識的なズレ」は単に「ハズダ」の使用条件というより、「ハズダ」の最も本質的でプロトタイプの意味・機能であろうとも言える。そして、少し観点を変え、認知言語学的なアプローチで考えてみると、「ハズダ」の意味・機能は、「話し手の認識的なズレの現れ」をプロトタイプとし、そこから「推論を伴う知識の確認」や「推論を伴わない知識の確認」「穴埋めとしての知識の確認」などの周辺の意味・機能へと拡張していったと考えられるのではないだろうか。

また、「ハズダ」と「-(u)l kesita」との比較においては、日本語の「ハズダ」は多様な用法を持って文法化されている形式であり、「ハズダ」に対応する韓国語の表現は、「-(u)l kesita」だけではなく、「-(u)l theita」「-(u)l li epta」などがあるという問題もある。一般に日本語の一つの表現形式に対し、韓国語の場合、語彙化が進み、幾つもの表現形式が対応することが多いという点からも、「ハズダ」を韓国語の諸形式と比較する際は、「-(u)l theita」「-(u)l li epta」などの他の形式も含め、その全体像を示す必要があるであろう。

以上、本書は、多少の課題は残っているものの、「ハズダ」の多様な用法を統一した一つの意味・機能で説明し、今後の「ハズダ」研究方法に一つの可能性を示唆した点が非常に有意義であると考えられる。今後は他言語の諸表現との比較も含め、認知言語学的なアプローチも視野に入れた、更なる研究成果を期待したい。

(2021年3月19日 ひつじ書房 296頁 6,700円+税)

〈書評〉

白 凜 著

在日朝鮮人美術史 1945-1962

—美術家たちの表現活動の記録—

山口 祐香（日本学術振興会特別研究員 PD）

「在日朝鮮人美術家」と聞かれて、一体どれほどの人々が具体的な作家名を挙げる事が出来るだろうか。本書は、歴史の闇に追いやられてきた 1950 年代の在日朝鮮人美術家集団に光を当て、その活動の軌跡と作品を初めて取り上げた先駆的な研究である。

そもそも、日韓において在日朝鮮人美術史研究は未だ蓄積の薄い領域である。筆者の整理によれば、1950 年代は戦後体制の確立と戦前の美術活動に対する反省に立ち、日本美術界においても様々な新しい実践が試みられた時期であった。それにも関わらず、同時期の在日朝鮮人美術家グループ、あるいは個人に関する学術研究は日韓でも非常に少なく、抽象的な分析な一部の著名作家を取り上げた断片的な評価に留まっている現状である。

そこで本書では、10 数年をかけた徹底的な資料収集と当事者への聞き取り調査を通じ、これまで点でしか取り上げられてこなかった戦後在日朝鮮人美術家たちを「集団」という観点から見直し、戦後の動乱の中で彼／彼女たちがどのように結びつき、活動したのか、またその表現活動を通していかに格闘し、何を訴えようとしたのかを明らかにすることを試みている。また、在日朝鮮人美術家たちの表現活動の背景となった戦後朝鮮半島の動乱や在日朝鮮人社会の変遷、そして彼／彼女たちと交流をもった同時代の日本人美術家たちの存在も取り上げており、本書は美術史のみならず、戦後在日朝鮮人史や日韓関係史、日本の戦後文化史等にも関わる領域横断的な研究と言える。

本書の構成は以下の通りである。

プロローグ

序章 『在日朝鮮人美術家画集』について

第1章 始動のエネルギー

第2章 何をどのように創造するのか

第3章 共通のテーマと写真—討論から制作、そして発表へ

- 第4章 南北分断を異郷の地で乗り越えた「連立展」
- 第5章 日本人美術家との接点
- 第6章 在日朝鮮人美術史をひもとく語り
- 付録 機関誌『朝鮮美術』解題

では、各章の内容を取り上げながら、1950年代の在日朝鮮人美術家たちの足跡を追ってみたい。まず、序章では、在日朝鮮人美術家たちの手によって編集され、在日朝鮮人美術家の作品のみを収めた初めての画集である『在日朝鮮人美術家画集』（1961年）を紹介し、同画集を手がかりにしながら、各章で取り上げる美術家たちの概要や作品に関する見取り図を提示している。

続く第1章では、「在日朝鮮美術家協会」（1947年結成）と「在日朝鮮人美術会」（1953年結成）を中心に取り上げながら、戦後最初期の朝鮮人美術家たち（金昌徳・全哲）の邂逅と集団形成への過程を記述している。

第2章では、朝鮮戦争を境に在日朝鮮人社会の中でも南北分断が顕在化した1950年代中盤以降の美術家たち（金昌洛・白玲・成利植）の言説や実践に焦点を当て、その表現方法を分析し、作品に込められた民族意識や思想的背景について考察している。更に、これらの美術家たちは朝鮮人による初の試みとして「第一回朝鮮美術会巡回展」を1956年に開催するが、出品者の少なさや財政難に直面する中で、会の連帯意識の脆弱性や、在日朝鮮人美術家の存在意義に対する問い直しが行われる契機となった。

そこで第3章以降では、「社会主義リアリズム」に立脚した創造的な芸術を目指し多様な表現の模索をしながら、テーマ制作を通じた発表の場の拡大と美術家同士の交流を深めていく人々の活動が詳述されていく。例えば第3章では、「9・9展」（1958年）、「第12回日本アンデパンダン展」（1959年）、「8・15祖国解放記念美術展」（1960年）にテーマ制作の作品を出品した7名の在日朝鮮人美術家たちとその作品の分析と共に、日本人の展評文が寄せられていたことで、活動の幅が広がっていたことが分かる。

また、第4章の主題である「連立展」（1961年）は日本にいる民団系美術家と総連系美術家が南北を超えて共同開催した展覧会となった。また、第5章で取り上げた「日本アンデパンダン展」への関与を通じて生まれた日本人美術家たちとの交流が「日朝友好美術展」（1961年）開催へと結実するなど、在日朝鮮人美術家たちの活動が、イデオロギーや民族、国籍などの境界を越えた実践へと拡大していった。

最後に、第6章では、本書が扱ってきた在日朝鮮人美術家たち本人や遺族、関係者らへの約60回の聞き取りを基に、彼／彼女たちの生い立ちと芸術との関わり、そして他の朝鮮人美術家や日本人美術家たちとの出会いなどについて語られた貴重なオーラルヒストリーが記録されている。

本書の意義を、以下の2点から述べたい。1つ目は、1950年代在日朝鮮人美術史を初めて体系的に整理し跡付けた点である。先行研究の限界にも挙げられるように、在日朝鮮人美術史はこれまでの戦後日韓の美術史研究では捨象されてきた存在であり、本書はその空白を埋める先駆的な学術成果となっている。特に、画集や機関誌などの貴重な文献資料に加え、絵画作品や聞き取りによる証言など多様な資料を網羅的に収集・活用しており、大きな学術的価値を有している。在日朝鮮人の1世や2世がほぼ鬼籍に入りつつある現状において、丹念な1次資料の収集・整理や、オーラルヒストリーの記録は、東アジアの戦中戦後史を多角的に描いていく上でも必要不可欠な作業であると痛感した。

2つ目に、美術史の記述における政治性や権威性を指摘し、新たな歴史記述の可能性を切り拓いたのである。たとえば、本書のプロローグにて筆者は、取り扱う美術作品について「鑑賞に値するかどうかに重きを置かない」とし、在日朝鮮人たちの手による様々な美術作品とその制作過程を研究の射程に置くことを強調している。なぜなら、いわゆる「大家」のものであるかということや、「上手いか下手か」「傑作か否か」といった既存の美術における価値判断の基準こそが、これまで一部の「大家」を除く多くの在日朝鮮人美術家たちの作品と制作工程を不可視化してきた権威性に他ならないからである。また筆者は、「(筆者は)在日朝鮮人美術史を『発掘』した。このことはすなわち、「在日朝鮮人」であるという理由で、またこの人たちの「美術」であるという理由で、これらは語る価値のないものであり、研究の対象にならないものであると判断されてきたことの裏返しではないだろうか。戦後美術史において、また在日朝鮮人研究においても取り残され、忘却されてきた、その原因を考えたい」

(p.15)と述べている。確かに、戦後長らく在日朝鮮人という存在は、日韓の社会で「見えない」マイノリティとしての位置に置かれてきており、彼/彼女らの発する声や生み出した創作物は、ごく一部を除いて正当な扱いや評価を受けることなく見落とされてきた。更に、従来の在日朝鮮人研究自体もまた、南北のイデオロギー対立を背景とする政治運動や日本社会内での反差別運動といった単線的な運動史の記述や、あるいは、南北朝鮮および日本の3か国の狭間にあっていずれの国家に帰属するかといったエスニック・アイデンティティの検証に傾きがちであるという課題も抱えて来た。それに対し本書は、従来の在日朝鮮人史でも見落とされてきた「美術家」という新たな主体に着目し、政治運動ではない側面から戦後日本を生き抜いた在日朝鮮人たちの実践と連帯を描く同時代史となっている点で、ユニークなものであると言えよう。

手前味噌ながら、戦後市民運動史を専門とする評者は、近代史研究者の姜在彦や考古学者の李進熙など、戦後に活躍した在日朝鮮人の「歴史家」たちの活動に関心を持っており、こうした筆者の問題意識は非常に参考になる部分が多かった。更に、筆者が指摘したように、「在日朝鮮人」の「美術」がこれまで

語られず、研究されてこなかった背景には上記に挙げたような構造的な問題があることを今一度受け止め、そもそも何が価値ある「芸術」（あるいは研究）なのか、残すべき「歴史」なのかといった自身の価値基準そのものを不断に問い直し、これまで見落とされてきた事象や人々の営みを拾い上げて行くことは、評者も含め、広く歴史研究に携わる者にとって共有すべき姿勢なのではないだろうか。

なお、本書では在日朝鮮人美術家のみならず、彼／彼女らと日本人芸術家との交流なども丁寧に取り上げられているが、一方で、同時期の日本社会の文化史・美術史・思想史・運動史などに関する記述はかなり簡潔な印象を受けた。特に、1950年代を射程にしているが、この時期の日本人および在日朝鮮人が携わった様々な社会運動や文化芸術に強い影響を及ぼした日本共産党と在日朝鮮人美術家たちとの接点の有無に関する記述があまり見られない。もしかすると、現時点では資料的な限界から、これらの接点について詳述することは難しいかも知れない。それでも、これらの大きな時代背景や社会状況を更に分析要素に加えることは、本書のテーマの解像度をより高める上で今後必要な課題であると考え。筆者の更なる研究の展開を期待したい。

最後に、本書の特徴を押さえる上で著者についても触れておきたい。著者の白凜氏（日本学術振興会特別研究員 PD）は在日朝鮮人美術史を専門としており、自身も在日朝鮮人三世である。朝鮮大学校教育学部美術科、東京藝術大学美術学部芸術学科を経て、東京大学大学院総合文化研究科で博士号を取得した。本書は、著者が2020年に提出した博士論文をもとに書かれたものである。また、著者は2016年に一般社団法人在日コリアン美術作品保存協会（ZAHPA）を立ち上げ、在日朝鮮人美術家の作品や関連資料約300点の所蔵・管理も行っている。このように、著者は研究者であるのみならず、自身も美術家としての教育訓練を受けた人物であり、現在も在日朝鮮人歴史家の作品を研究・保存する活動に従事している。こうした著者のバックグラウンドは、本研究の遂行において、美術作品のモチーフや表現方法、制作過程の状況に関する深い理解を裏付けると共に、本書に登場した美術家たちにとっての「在日朝鮮人」であること、「美術家」であることの思いや人生の意味に肉薄する助けになったのではないか。その意味では本書もまた、過去から今へと受け継がれた在日朝鮮人美術家たちの実践の1つの帰結である。

（2021年4月30日 明石書店 312頁 4,600円＋税）

研究会会則

第1章 名称および事務局

第1条

本研究会は、日本韓国研究会と称する。英語名は Japan Association of Koreanology（略称 JAK）とする。

第2条

本研究会は、主たる事務局を関西地区に置く。

第2章 目的および事業

第3条

韓国・朝鮮研究の発展に資することを目指し、言語・文学・歴史・文化・政治経済など多様な分野にわたって幅広く学術情報を発信することを目的とするとともに、1. 研究者相互の交流を通じた韓国・朝鮮研究の活性化、2. 若手研究者が活躍できる場の創出、3. 若手研究者への研究支援を研究会の理念として掲げる。

第4条

本研究会は、年2回の研究例会（3月と12月）と年に1回（8月）の研究発表大会を開催する。開催地、期日は運営委員会で定める。

第5条

本研究会は、年1回研究会誌（オンラインジャーナル）を発行する。

第3章 会員

第6条

本研究会の会員は次の通りとする。

1. 一般会員：本研究会の目的に賛同する個人および団体
2. 維持会員：本研究会の目的に賛同し、所定の維持会費を前納する個人および団体

第7条

会員は次の権利を有する。

1. 研究発表大会の予稿集および研究会誌などの配布案内
2. 研究会誌への投稿
3. 研究発表大会での発表、その他、本研究会の行う行事への参加
4. 役員選挙における選挙権ならびに被選挙権

第4章 入会および退会

第8条

本研究会に入会を希望する者は、所定の手続きにより申し込むものとする。本研究会会員で退会を希望する者は、その旨を本研究会に通知しなければならない。

第5章 役員

第9条

本研究会の役員は、会長1名、事務委員2名、編集委員2名、会計委員2名、企画委員2名、世話人若干名、顧問若干名とする。任期は2年とし、再選を妨げない。

第10条

本研究会の会長は事務局を置き、必要な事務担当者を委嘱することができる。

第11条

運営委員会および世話人会は、原則として研究会の際に開催する。ただし、本研究会の会長は必要に応じて臨時に召集することが出来る。

第6章 会則の改定

第12条

本研究会における会則の変更改定は、運営委員会の発議と世話人の3分の2以上の同意を得なければならない。

2020年12月27日 制定

2021年1月18日 改定

投稿規定

1. 投稿資格

投稿者は原則として日本韓国研究会（以下、本研究会）の会員に限る。

2. 投稿内容

他研究誌・学会誌などに未掲載のものに限る。原則として、本研究会の例会または大会で発表されたものとする。但し、本研究会の判断により、掲載が必要とされる場合はこの限りではない。

3. 使用言語

日本語や韓国・朝鮮語、英語（事前に相談する）とする。

4. 投稿原稿の種類

- ・研究論文：独創性を有する論文
- ・研究ノート：萌芽的な考察もしくは論考
- ・実践報告：実践活動から得た成果
- ・書評：出版物に対する短評

5. 投稿締切

毎年、6月末日とする。

6. 発行

毎年9月末日に本研究会のホームページにて電子化（pdf形式）して公開する。

7. 投稿方法

Eメールにて投稿を行う。

投稿時、以下の内容をメール本文に必ず入れること。

- ・投稿者の氏名（英文表記も含む）
- ・投稿者の所属
- ・投稿原稿の種類（研究論文、研究ノート、実践報告、書評）
- ・原稿のタイトル（英訳も含む）
- ・連絡先（メールアドレス）

送付先（編集担当）： jak-henshu(at)gmail.com * (at)は@に変更してお

送りください。

8. 著作権

掲載された原稿の著作権はすべて本研究会へ帰属するものとする。

9. 査読

掲載の採択可否について複数名による査読を行う。

10. その他

投稿要領で指定されているフォントまたは体裁以外の書式がある場合は、事前に相談すること。

運営委員

海外顧問	韓 昌勲（全北大学）、崔 順育（ソウル神学大学）
日本顧問	任 炫樹（帝塚山学院大学）、辻 大和（横浜国立大学）
会長	河 正一（大阪府立大学）
大会	高橋 梓（日本学術振興会特別研究員 PD）
例会	飯倉 江里衣（神戸女子大学）、朴 天弘（東京大学）
企画	高橋 梓（日本学術振興会特別研究員 PD） 金 根三（志學館大学）
編集	趙 智英（同志社大学）、崔 銀景（長崎外国語大学） 影本 剛（立命館大学ほか）、飯田 華子（関西大学大学院博士後期課程）
広報	徐 明煥（昭和女子大学ほか）、小高 理子（朝日出版）
会計	朴 庚卿（長崎外国語大学）、丹羽 裕美（ひろば語学院）
HP	楊 廷延（群馬県立女子大学）、趙 智英（同志社大学）
事務	渡邊 香織（千葉大学大学院博士後期課程） 仲島 淳子（関西大学大学院博士後期課程）
語学世話人	崔 銀景（長崎外国語大学）、朴 天弘（東京大学）
文学世話人	趙 智英（同志社大学）、影本 剛（立命館大学ほか）
歴史世話人	飯倉 江里衣（神戸女子大学）、崔 誠姫（大阪産業大学）
文化世話人	朴 庚卿（長崎外国語大学）、鄭 敬珍（檀國大学）
政経世話人	金 根三（志學館大学）

日本韓国研究 第2号

発行日 2022年9月30日

発行 日本韓国研究会

〒599-8531

大阪府堺市中区学園町1番1号

大阪府立大学 高等教育推進機構

電話 072-254-9655

メール(事務局) [jak.jimu\(at\)gmail.com](mailto:jak.jimu@gmail.com) *(at)は@に変更してお送りください。

ホームページ <http://jak.main.jp/> (入会手続きは[こちら](#))

編集 日本韓国研究会編集委員

日本韓国研究会 
Japan Association of Koreanology

Journal of Koreanology in Japan

Vol.2

CONTENTS

〈Research Articles〉

- A Study of ‘malda’ for Prohibitive Expressions and Verb Conjugation
-Focusing on the ‘-ha-’ verb - Hanako Iida
- A Diachronic Study of the Korean Thinking Verb ‘yeogida’
..... Junko Nakajima

〈Research notes〉

- Relations Between COVID-19 and Studying Abroad in Korea: Focusing on a
Case of N University in Japan Eunkyung Choi

〈Special Contribution〉

- Japanese and Korean Junior High School Student Responses to Aggressive
Statements Jeongil Ha·Chihiro Morioka

〈Practice Report〉

- Practical Report on Class of Research Between Japan and South Korea-
Possibility and Task of Comparative Culture Education Between Japan
and South Korea- Hyojeong Yoon

〈Book Review〉

- “A Study on ‘Hazuda’ in Modern Japanese” by Chunhong Park
..... Youngran Lee
- “The History of Zainichi Korean’s Art 1945-1965: A Record of Artists’
Expressive Activities” by Rum Pek Yuka Yamaguchi

2022.9.30